

ディスクバリーで殴り
込む

ホワイト・フェザー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんかいきなり死んでしまった男がいろいろな世界をデイスカバリーに乗って殴り込みに行くお話

※注意

- ・ 亀更新になるかもです
- ・ 基本ご都合主義です
- ・ ガバ設定です
- ・ 作者がデイスカバリー大好き人間でただただデイスカバリーが暴れる作品です
- ・ 不快に思われた方はブラウザバックをお願いします

目次

プロローグ	1
Call of Duty: Infinite Warfare	
1 : ファースト・コンタクト	5
2 : 今後の方針	12
3 : 未来を変える為に	24
4 : よーしパパ火星で暴れちゃうぞ	32
5 : 遊撃隊として	42
6 : 火星急行	54
7 : 運命を変える	66
幕間	
12 : 旅立ち	120
11 : 後片付け	109
10 : 最後の作戦(地球サイド)	86
9 : 最後の作戦	77
8 : 次の作戦は?	
ウォー	
1 : 俺らこんな世界嫌だ〜♪	137
2 : 話をしよう	150
3 : 何なんだ、あいつは…	166

4	アベンジャーズ、再集結	177
5	出撃	191
6	救出任務	204
7	待ち伏せ	216
8	正々堂々戦おう(棒)	227
9	タイタン地上戦	234

プロローグ

突然だがどうも俺は死んでしまったらしい。いつも通りブラック企業から終電で帰宅して自宅で風呂呂に入っていたはずだったんだが…

「俺、神。お前、間違えて死んだ。ソーリー」

「ええ…」

目の前で土下座している片言で話す白髪のおっさん曰く、俺の部屋の隣に住んでいるニートのおっさんが本当は死ぬ予定だったらしい。でもなんかの手違いで俺が死んでしまったとか。

「ちなみに俺はどういう風に死んだんだ？」

「湯船で、心臓発作。発見時、ぐちゃぐちゃ。警官、ゲロ吐く」

「うわあ…」

典型的な孤独死のパターンやないか！俺まだ30代だったのに…親孝行とかしてないし。すまねえ母ちゃん。しかも湯船で死んだから溶けてスープみたいになって…そりゃ警官も吐くわ。

「で、俺はどうなるんだ？」

「手違いで、死んだ。詫びが、必要。だから、転生」

「おおお！」

転生！ 俺の好きなやつだ。

「転生特典みたいなのは制限あるのか？」

「ない。好きなもの、言う」

ないのか。ならば…

「スタートレック：デイスカバリーに登場した『USSデイスカバリー』が欲しい。32世紀の時点での武装とシールドを備えた上で、俺が次に行く世界でもワープや胞子ドライブが使えるようにしてくれ。もちろん1人で操縦ができるように補助のAIも積んでね。あと俺の体にクマムシのDNAを取り込んで、俺自身が『航海士』として動かせるようにして欲しい。ジャンプ時に起きる身体的負担はかからないようにね。遮蔽装置も標準装備でよろしく。それと筋肉モリモリの健康体で頼む。一生病気にかからないやつで。とりまこんな感じかな」

俺はUSSデイスカバリーが大好きなんだ。今までの艦と違う胞子ドライブによるトランスワープ技術がかつこよすぎて鼻血が出るレベル。ちなみに胞子ドライブとは正式名称『活性マイセリウム胞子転移ドライブ』のことだ。宇宙空間とその裏側の亜空間に独特なネットワーク網を張り巡らせる宇宙植物マイセリウムの性質を利用して、艦

を一瞬だけ『マイセリウム空間』に沈ませ、ネットワーク網のある別の場所まで瞬間移動させるといっても技術。ワープエンジンも亜空間も使わない、スタートレックにおいてはこれまで登場したいかなるトランスワープとも一線を画す異様な技術なんだよね。最初に見た時はそりやもうびつくりしたよ。

胞子ドライブはわずか数kmの距離から遙か50000光年もの距離まで、マイセリウムネットワークさえあればどこにでも瞬間移動できる。そう、瞬間移動だ。これは強い。あのUSSVオイジャーでさえ、瞬間的に出せる最高ワープ速度がワープ9・975（光速の5754倍）だから、本当に胞子ドライブはチートだよなあ、と思いながら見ていたよ。

「わかった。あと、重要なこと、ある。次の世界、ポイント制」

「ポイント制?」

「原作介入、すると、ポイント、もらえる。ポイント、色々なこと、出来る」

神によると原作に介入するとポイントがもらえて、そのポイントで色々出来るらしい。カタログを見たが確かに色々出来るな。拠点やら武器やら技術やらを貰えるみたい。重要なのは原作で死ぬキャラを救ったりするとかつりポイントが貰えるんだとか。モブキャラでもいいらしい。

「なるほど理解した。で、俺はどの世界に行くんだ?」

「これで、決める」

おいおいルーレットとかやめてくれよ…

「(´▽´)」

「ん？」

「いってらー」

「ちよっ」

文字が小さくて読めなかったしいきなり落とす穴に落ちるしふざけんなこの野郎!!

Call of Duty: Infinite War fare

1:ファースト・コンタクト

「おっ?」

落とし穴に落ちたと思っただら何故か椅子に座っていた。そして目の前に広がるのは親の顔よりも見たあの光景。デイズカバリーの艦橋だった。

「すげえ! これはすげえや!」

よく見ると自分の服装も変わっていた。グレーをベースに指揮官を示す赤色が肩掛け帯のようにワンポイントに入る32世紀の制服デザインだ。階級は大佐になっている。コムバッジは縦長の楕円形で、通信・翻訳・GPS機能に加えて、転送装置とトリコーダーも兼ねているやつだ。コムバッジを開くと氏名が表示された。

「おいおい、この名前なのかよ…」

ジェームズ・T・カーク。長い歴史を持つスタートレックシリーズの最初の主人公。それが転生後の新たな名前になっていた。あの伝説の艦長の名前をもらうとか重圧が

やべーんですけど。でもまあやるしかないか。

「さて、どうやって動かすかな…AI君いる?」

「おはようございます、艦長」

爽やかな男性の声ですぐに返答が来た。女性の方が…いや、やめておこう。

「おはよ。なんて呼べばいい?」

「特に名前は決まっています。艦長が決めて下さい」

「では君は今からデータだ。よろしくな、データ」

秒で決めた。スタートレック：ピカードに登場した時はびっくりしたし、その最期に感動した。

「では艦長、ご命令を。現在本艦は太陽系小惑星帯内のケレス軌道上にて遮蔽装置を使用した状態で待機しています」

「わかった。胞子ドライブにてジャンプを行う。目標は月軌道。ブラック警報」

「了解です、艦長。ブラック警報発令。胞子ドライブ起動準備」

第1船体の回転ギミックが動くと同時にあの独特な警報音が響き渡る。この警報音がとても好きだ。生で聞けるなんて最高過ぎる!

「ジャンプ後にシールド出力を最大、武装の準備を。念の為だ」

「了解です、艦長。胞子ドライブ、準備完了しました」

「よし、ジャンプ！」

船体から離れたワープナセルがパイロンに寄り接続し、艦全体がきりもみ回転して瞬間移動する。外から見てみたいけどそれは無理か。

駆逐艦タイガースの集中砲火によりSDFの空母アレスは木っ端微塵に吹き飛んだ。これでSDFからムーンポートを奪還して艦隊が再建可能となった。ニック・レイエス中佐はその爆発を眺めながらリトリビューションに針路を向けた。

「任務完了だ、タイガース。SCARは帰投……」

そこまで言った時、突然新たな艦艇がリトリビューションとタイガースの目の前に出現した。

『なんだあの船は!?!』

『SDFの新手か!総員攻撃準備!』

『タイガースは射撃準備完了!いつでも攻撃可能だ!』

しかしレイエスにはどう見てもこの船がSDFとは思えなかった。艦の形状も色も、今までのSDF艦艇とは異なる部分が多すぎる。

「全部隊、攻撃中止！繰り返す、攻撃はするな！こいつはSDFじゃない！」
『レイエス、ならこいつは一体何なんだ？』

副官のソルター少佐に聞かれるも即答できないレイエス。分からないなら聞くまでだ。

「ゲイター、全周波数帯で通信準備。あの不明艦とコンタクトを取りたい」

『了解しました、サー。どうぞ』

「こちらUNSAリトリビューション臨時艦長のニック・レイエス中佐だ。所属不明艦、通信に応答せよ」

しばしの沈黙の後、返答が来た。だがその返答に誰もが首を傾げる。

『こちら惑星連邦宇宙艦隊所属、USSデイスカバリ。艦長を務めるジームズ・T・カーク大佐だ。突然近くにジャンプしてしまい申し訳ない。そちらに被害等は発生しているか？』

惑星連邦？ 宇宙艦隊？ 一体何の事を話している？ レイエスは混乱しつつも会話を続ける。

「いや、こちらは特に被害はない。大丈夫だ」

『そうか、良かった。ところでUNSAとは一体何を示す略称なのだろうか？初めて聞いたので教えて頂きたいのだが』

「こちらでも惑星連邦や宇宙艦隊といった名称を初めて聞いた。一体どういう組織なのだし？」

『あー…もし良かったら会って話す事はできないだろうか。お互い認識に差があるようだし』

「そうだな…上司に確認を取る。カーク大佐、少し待っていて欲しい」

『わかった』

通信を切ったレイエスは思わず頭を抱えたくなった。SDFに奇襲攻撃を受けるわ、艦隊は壊滅するわ、変な宇宙船がやってくるわ、もう勘弁してくれと心の底から思った。

「中佐…頑張って下さい」

「そこは助けてくれるんじゃないのかイーサン!？」

「ジョークです」

エンハンスド・タクティカル・ヒューマノイドであるイーサンがサムズアップしていた。

マジ？
転生先がCall
of
Duty: Infinite
Warfareの世界って

2：今後の方針

とりあえず艦隊長へ状況を報告しリトリビューションの艦橋に戻ったレイエスとソルター。タイガースからフェラン艦長もシャトルでやってきた。

『レイエス艦長。カーク艦長からの会談要請だが私の権限で許可する。ただし会談場所はリトリビューションとする。あと私もオンラインで同席するぞ』

「了解しました、艦隊長。ではカーク艦長に繋がります…こちらレイエス艦長。カーク艦長、応答願います」

『こちらカーク。感度良好だ』

「会談の要請ですが許可が降りました。ただリトリビューションまで来て頂く必要があります」

『了解した。そちらの…あー、艦橋に行けばいいのか？』

「そうです。シャトル等の小型艇でこちらの格納庫に来て頂ければ案内を…」

『それには及ばない、レイエス艦長。直接艦橋に飛ぶ』

「えっ？」

次の瞬間、見慣れない制服を着用した男が青い光と音を放ちながら艦橋に出現した。数秒間、誰も動けなかったがイーサンがすぐに銃を向ける。慌ててソルターやフェラン艦長が銃を構えるも、男は気にせず周りを見て笑顔を浮かべていた。

「これがリトリビューションか。素晴らしい宇宙空母だな。やはり大型艦はロマンがあつていいものだな」

男は独り言を言っていたが、ようやく自分に向けられた銃に気付いたのか、両手を上げながら自己紹介を始めた。

「ジエームズ・T・カーク大佐。USSデイスカバリー艦長だ。突然お邪魔して申し訳ない。レイエス艦長はどちらかな？」

レイエスは武器を下げるように指示してから一歩前に出て手を差し伸べた。

「ニック・レイエス中佐。UNSAリトリビューション臨時艦長です。どうぞよろしく」
「こちらこそ」

がっちり握手を交わしてから会議室に移動する。お互い知らないことだらけでどこから話すべきか悩むが：困った時は艦隊長へ丸投げすればいい、とレイエスは考えていた。

なんでやねん。俺が言いたいのはこれに尽きる。Call of Duty: Infinite Warfareの世界とかマジかよ。俺もゲームやったわ。SDFは退けたけど決してグッドなエンディングではなかったよなあ。なら俺がその未来を變えるんじゃない！

というわけで会議室にてこちらから惑星連邦や宇宙艦隊について軽く説明をした。当然向こうはポカンとしている。そりやそうだよな。向こうは地球と火星でバトつてるのに、こちらは星間連邦国家だし、人がワープしてくるし。まさに宇宙猫状態って感じだろう。向こうの状態はゲームと同じらしい。ちようど月をSDFから奪還したところだそうな。

『ついでにはカーク艦長、リトリビュションとタイガースと共にSDFと戦ってもらえないだろうか。こちらは戦力が枯渇状態なのだ』

レインズ艦隊長がお願いしてきたけどちよつと突っぱねてみようかな。素直にハイハイ言うのもどうかと思うし。

「艦隊長、私も宇宙艦隊の士官としてやっても良い事と駄目な事があります。宇宙艦隊

一般命令第1条において、自衛目的以外での武力行使をしてはならない事になっております。そもそも本艦はリトリビューションやタイガースのような純粋な戦闘艦ではありませんから」

「待つて下さい、ではデイスカバリーはどういう種類の船になるのですか？」

フェラン艦長が驚きながら聞いてきた。意外とフェラン艦長つて美人だよな…

「USSデイスカバリーはクロスフィールド級先端技術実験船です。艦内で約300種類もの科学実験に対応可能な設計となっています。一応自衛用の武装はありますが」

『そこを曲げてなんとかならないだろうか…報酬等は今決めることは出来ないが何かしら用意させてもらおう』

報酬か…もらえないよりマシだしもらつとくか。

「そうですか…ちよつと通信をさせて下さい。データ？」

『はい、艦長』

コムバッジを使ってデータを呼び出す。

「デイスカバリーの艦長として、ここに宇宙艦隊憲章第14条31項の適用を宣言する」

『了解しました、艦長』

これで問題ないな。にしてもこの条項ズルすぎないか？そろそろ変えるか消すかしたほうが良いと思う。あとセクション31滅ぶべし。

「カーク艦長、今のは？」

「宇宙艦隊憲章第14条31項というのは今の状況を吹き飛ばす事ができる素晴らしい条項です。これであなた方に協力する事が可能となります」

『それはどんな条項なのだ？』

俺は精一杯ニヤリとしながら伝える。

「非常事態においてはいかなる規則を曲げることも許される、というものです」

『それは実に素晴らしい条項だ。うちも真似したい限りだ』

レインズ艦隊長も思わずニッコリ。というかレイエスや周りのみんなもニッコリ。

「ただそちらの指揮下に入る、となりますと後々問題になってしまうので、UNSAと惑星連邦間の一時的な同盟関係という形でお願ひできますか？」

『もちろんだ』

そんなこんなでUNSAと同盟を結んだので早速作戦会議。リトリビューションは単艦で海王星にてテイクンダガーオプスを実行。デイスカバリーはタイガースと共同で木星周辺の敵パトロール艦隊の殲滅を行う事になった。ゲームにはなかったやつだな。まあデイスカバリーの性能を確認したいんだろう。あとレインズ艦隊長の要請で、

UNSAの軍隊であるSATOの士官・下士官の計4人がデイスカバリーに同乗する事になった。お目付け役なのかどうかはわからんがね。

「では皆さん、私の左手を掴んで下さい。私が良いと言うまで絶対に離さないで下さい」
4人組がしっかりと掴んだ事を確認してから俺はデイスカバリーの艦橋へジャンプした。

「はい、いいですよ。ようこそデイスカバリーへ」

「はえっ!?もう着いた!?!」

「凄い最先端って感じしかしない」

「一瞬でワープとか…ありえない」

「指はある目もある耳も聞こえる玉と息子も無事…ヨシッ!」

みんなテンパってるけど落ち着かせてから椅子に座らせる。艦長席の両サイドに2人ずつ。そしてタイガースに通信を繋げた。

「フェラン艦長、合流地点はガニメデ軌道上で問題ないか?」

『その通りだ、カーク艦長。合流後、エウロパ方面から接近してくる敵艦隊に攻撃を行う。それでは現地です』

「了解した」

タイガースがジャンプの準備に入る。ゲームで見たけどあの放熱板っぽく展開する

装置がかっこいいよなあ。正式名称とか気になる。ゲイターはワープの事をファストトラベルって言ってたっけ？

「あのカーク艦長、我々は座っているだけで良いんですか？」

4人組のリーダーであるキャシー・コール少佐が聞いてくる。彼女はジュネーブのUNSA本部に務める技術士官だとか。

「そうなりますね。皆さんはお客様って事なのでくつろいでいて下さい。そうだ、飲み物はコーヒーでいいですか？」

「え？え、ええお願いします」

「データ、レプリケーターでコーヒー5つ」

「かしこまりました」

すると数秒でコーヒーが出来た。全員の椅子の肘掛けに砂糖とミルク付きで出現したもんだから4人はびっくり仰天。

「えっえっえっ」

「飲んでいいですよ。うん、美味しいな。コーヒーはキリマンジャロが一番だ」

「椅子からコーヒーって…」

そんなことしていたらタイガースがジャンプした。俺も行かないとね。

「データ、胞子ドライブにてジャンプを行う。目標はガニメデ軌道。ブラック警報」

「了解です、艦長。ブラック警報発令。胞子ドライブ起動準備」

例の警報が鳴ると4人はビクビクしているけどそんな揺れないから大丈夫なの
ねー。

「胞子ドライブ、準備完了しました」

「よし、ジャンプ！」

「間もなくスリップを抜けます。出現まで3…2…1…」

タイガースがジャンプを終えて最初に見たのはデイスカバリーの姿だった。先に出
発したのに何故デイスカバリーがいるのかフェランには理解できなかったが、その辺の
技術を詳しく理解するのは技術屋だけで十分だと判断し頭の片隅に追いやった。

『デイスカバリーからタイガース。ロングレンジスキャナーに微弱なコンタクト。SD
Fのレーダー波と一致した。数は…5、いや6。そちらでも確認できるか?』

モニターを見ると確かに6つの反応が確認できる。SDFの巡洋艦2隻、駆逐艦4隻からなる例のパトロール艦隊だ。

「確認した。派手に歓迎してやるとしよう。タイガースがミサイルを斉射、その混乱に乗じて突撃しよう」

『了解した。幸運を』

全速力で敵艦隊に向かいながらタイガースから次々とミサイルが放たれる。エウロパ方面から接近してきたSDF艦隊は突然のミサイル攻撃に混乱しつつも迎撃を開始した。そこにタイガースとデイスカバリーが一気に接近し攻撃を開始。フェラン率いるタイガースは連装速射砲を5基10門、各種ミサイルを装備している駆逐艦だ。まずはミサイルで被害を受けた巡洋艦に攻撃を集中する。機関部にダメージを受けた巡洋艦はその攻撃に耐える事ができず、真つ二つに爆散した。

「良いぞ！次は…」

「艦長！デイスカバリーが！」

操舵手の悲鳴のような大声でフェランはデイスカバリーを見た。なんとデイスカバリーは3隻の駆逐艦からの集中砲火を受けているにも関わらず、一切ダメージを受けた様子がないのだ。フェラン達が啞然としている前で、仕返しと言わんばかりにデイスカバリーの船体から発射された複数の青いレーザー光線のような攻撃で駆逐艦3隻は一

瞬で轟沈。更に発射された青色の光弾のようなものが巡洋艦に命中。爆発の後には巡洋艦の欠片すら見つからなかった。残った駆逐艦は逃げようとしたが、タイガースによつて撃沈された。

「なんとという船だ…あれで自衛用の武器しか搭載していないと言うなら、惑星連邦の戦闘艦は一体どんな化け物なんだ？」

フェランの言葉に返事できる者は誰もいなかった。

「とりあえず攻撃を受けてみよう」

「「「なんて?」」」

俺の言葉に4人組がハモる。だってデイスカバリーのデイフレクター・シールドがどれだけ耐えられるか、きちんと確かめておかないといけないじゃん? 多分大丈夫だと思うけど念の為ね。

「コール少佐、SDFの駆逐艦や巡洋艦にはエネルギー兵器は搭載されていないんだろ? あのパカでかいオリンパス・モンスは例外として」

「そうですけど無茶すぎませんか!？」

「大丈夫だって。こつちにはシールドあるから。というわけでデータ、シールド出力を最大、武装の準備を」

「既に完了済みです、艦長」

「流石だ、データ」

そんなことを言っていたら駆逐艦3隻の攻撃が始まった。多少揺れるのは分かっていたけどシールド出力の低下率はそこまでひどくないね。オリンポス・モンスのF—S P A Rはヤバそうだけど。

「データ、反撃開始だ。駆逐艦3隻にフェイザー発射！続いて奥の巡洋艦に光子魚雷を1発発射！」

「了解、攻撃を開始します」

船体各所に設置されたフェイザー・アレイから青い光が駆逐艦に突き刺さった、と思いきや一瞬で爆散。うっそだろお前、駆逐艦弱すぎませんかね。もうちよつと耐えてもいいんじゃない？あ、巡洋艦が文字通り消えた。うちの光子魚雷って威力どんだけなんだよ。32世紀パネエ。

「ちよちよちよちよつと待って待って待っておかしいおかしい」

コール少佐がバグってる。大丈夫じゃない、問題だ。

『カーク艦長！そちらの武装や防御手段についてちよつと教えてほしいんだが!』

フェラン艦長もテンパってるし。まあまあ落ち着いて。コーヒーでも飲んでリラックスしてさ。

『飲んでる場合かーッ!』
すんません。

その後フェイザーと光子魚雷、シールドについて簡単に説明した。フェイザーとシールドは理解出来ないからいいとして光子魚雷の説明をしたらドン引きされた。え、ただの反物質弾頭が搭載された魚雷なのに。スタートレック界ではごく普通の兵器ですよ。ちなみにもっと威力のある量子魚雷も載せてまっせ。ちよつと試しに撃ってみようかな…え、駄目？

なおこの戦闘詳細を聞いたレイエス達トリビューション組はドン引きし、レインズ艦隊長は割と本気でディスクバリーに単艦で火星攻撃をお願いしようとしたとか。

3：未来を変える為に

さて木星でSDFを叩き潰した訳なんだが今後の事を考えよう。変えるべき未来として、

①オマー軍曹を助ける

②タイガース沈没の阻止

③SDFの地球侵攻阻止&レインズ艦隊長を助ける

④リトリビューション沈没の阻止

がある。この内①と②がほぼ同時期に起きるので阻止が難しい。でもやらないとね。その為にいくつか仕込みが必要なんだよね。

「フェラン艦長、次の任務は弾薬補給後に命令が来るとい認識で問題ないか？」

『その通りだ。間もなく補給艦とのランデブーポイントへ向かうところだ』

ならちよつと散歩に行こうかな。

「了解した。こちらはちよつと設備点検をしてから合流する。あとで会おう。カーク、アウト」

「カーク艦長、点検して嘘ですよ？何をしておつもりで？」

コールは目の前に座るカークにそう聞いた。今まで彼女が学んできた技術の全てを凌駕する船を操るこの男は、例によつてまたとんでもないことをサラツと言ひ始めた。

「ちよつと散歩に行こうと思つてね。行き先はまだ行つてない惑星と準惑星計7箇所だよ」

「……………」

もう驚かん、と思つていた自分を殴りたい。まだ行つてない惑星と準惑星つてことは水星、金星、火星、土星、天王星、海王星、冥王星を意味する。小学生でも分かる事だ。でも火星つて。火星つて！

「あの……」

おずおずと手を上げたのは部下の1人、マイケル・ヒロセ大尉。日系アメリカ人で航空力学の専門家だ。

「火星つてSDFの本拠地なんですけど」

よく言つてくれたマイケル！そのまま言い負かせてやれ！

「もちろん知つているよヒロセ大尉。なーに、戦闘しに行くわけじゃないんだ。ちよつとした散歩だよ」

散歩感覚で行く場所じゃないんだよな、とマイケルは小さい声でつぶやく。駄目だったか…

「散歩（殲滅）ですわね、わかります」

なんて物騒な事を言うのはアントニオ・ヘルナンデス大尉。海兵隊員だったが、負傷が原因で技術部門に移籍してきた。

「で、本当のところは何をやるんですか？」

私より胸があつてイケメン婚約者もいる（羨ましいなんて思っていない）キャシー・シンクレア大尉が聞くと、カーク艦長は椅子から立ち上がった。

「じゃあ一緒に見に行こうか。ついてきてくれ」

よく考えたら艦橋以外の場所に行くの初めてじゃね？

「まずここだけどみんなの個室ね。部屋の中はこんな感じだ」

大きめのベッドにデスク、クローゼット、風呂とトイレ。ごく普通のビジネスホテルみたいだな。

「えっこんな豪華な部屋使つて良いんですか？」

「良いよ。やっぱ人間疲れや眠気があると駄目だからね、きちんと休める環境は必要で

しよ」

その後格納庫へ行くと準備が完了していた。

「艦長、これは？」

「これはステルス探査機。これを太陽系にばら撒こうという訳だ」

直径2メートルの球体、これがデータに作らせていた探査機だ。小型化した遮蔽装置と各種観測機器を内蔵している。これを大量に投下してSDFの動き、もつと正確に言うとオリンポス・モンスの動きを捉える。これで原作でオマー軍曹が戦死してしまう水星でのダーククオリーオプスに介入できる…はず。

「UNSAもSDFもジャンプシステムは同じだ。こいつはそのジャンプを観測し、データを送ってくれる。もちろん光学観測も可能だよ」

「素晴らしいですね。何か欠点とかやるんですか？」

「コールが探査機を欲しがっているけど欠点あるんだよなあ。」

「見ての通り球体でステルス重視で作ったから太陽光パネルがない。だから内蔵電源が切れたら自爆する仕組みになっている」

「ちなみに電源はどれくらい持つんですか？」

「1ヶ月」

「あ…」

まあそれはともかく早速出発だ。まずは冥王星。公式にはUNSAとSDFとの間で争われている領域らしいけど非公式には中立地帯として扱われる。どっちやねん。はつきりしてほしいね。探査機I0基くらい放出完了。

次は土星。SDFがタイタンを奪ってるからそれなりに敵の艦艇がうるちよろしとるな。でも気にせず全速で探査機をばらまく。

「艦長、敵がめっちゃ近くにいるんですけど見つからないんですか!？」

「大丈夫、遮蔽装置を起動しているから。今までの宇宙艦隊の艦艇に搭載されていた遮蔽装置はタキオン放射や残留反陽子によって見破られる事があったんだが、デイスカバリーの遮蔽装置は最新型だ。発見する事は事実上不可能。例外があるとすればたまたま敵艦の攻撃が当たって一時的に遮蔽が乱れた時ぐらいだ」

シミターを始めて見た時は『ほくのかんがえたさいきょうのせんかん』って感じだったな。完璧な遮蔽装置、遮蔽状態でもワープや攻撃が可能、二重シールドにセラロン放射兵器：マジ無敵じゃんね。

お次に金星。ここはUNSAの管理下にあり、重水素系燃料を多数の前哨基地に供給

している重要なエリアだ。探査機は多めに設置しておこう。

次、天王星。UNSAとSDF、どちらの勢力下でもない場所。だからこそ何かをそこそそしたい連中がいるかもしれない。なので探査機を天王星の周りにシユウウウーツ!!

お隣?の海王星に到着。リトリビューションのテイクンダガーオプスは成功した模様。しばらく敵は来ないかもしれないが念には念を入れて配置しておこう。

太陽に一番近い水星。UNSAの資源採掘コロニーがいくつもある。ダーククオリオプスが行われる採掘コロニー、ベスタ3もこの近くにある。ゲーム内ではオリンパス・モンスの攻撃で太陽に向かって飛ばされてしまうが、そうはさせない。ここには30基ほど、しかも広範囲に設置しておこう。

そして最後は。

「これが火星か」

目の前にはSDFの本拠地である火星があった。流星は本拠地だけあって防衛の為

に配置されている駆逐艦、巡洋艦、戦艦、空母は最低でも20隻は確認出来る。軌道上のタルシス造船所では数多くの艦艇が建造中。更に火星の衛星フォボスには鉄とニッケルの採掘所が、デイモスにはレアメタル採掘所と宇宙港、燃料補給所がある。軍備拡張にはもってこいの環境だな。

「艦長、探査機の展開が完了しました。平行して実施した偵察も完了済みです」

「ありがとう、データ。これで散歩はおしまい…いや待て」

「艦長？」

「データ、探査機を改造した魚雷ランチャーってまだ残っているか？」

探査機作成の過程で色々と試しに作らせたんだった。光子魚雷の弾頭を探査機に入れて爆雷のように運用するタイプとか、魚雷ランチャータイプとか。

「魚雷ランチャーは4基残っています」

「よし。量子魚雷を各探査機に4基ずつ装填し、フォボスとデイモスの軌道上に2基ずつ配置しろ」

「了解です、艦長」

ちなみに光子魚雷と量子魚雷は使えばなくなる。なくなったらポイントで購入できる。木星での戦いで得られたポイントは50000ポイントだった。ゲームにあったピュアスレットオプスがああ戦いで消し飛んだのが高ポイントの理由みたいだ。カタ

ログを見る限り拠点となる大型移動施設の購入にはまだ足りないな。もっと頑張つて原作に介入しないと。

「艦長、魚雷ランチャーの配置が完了しました」

「ありがとう、データ。よし、これで散歩はおしまい！タイガースと合流する」

この後タイガースと合流してから各地の偵察情報をレインズ艦隊長に提出したら目眩を起こしていた。SDFの奇襲以降きちんと寝れていないのかもしれないな。健康には気を付けてほしいね。

4：よーし。パパ火星で暴れちゃうぞー

目眩から復活したレインズ艦隊長から新たな任務が来た。リトリビューションは天王星にてフェニックスオプスを実行。タイガースは水星及びケレス近辺のパトロール任務。そしてデイスカバリーは初めて単艦での作戦に挑む事となった。

ただの作戦ではなく、ゲームにはないオリジナルの作戦だ。作戦名はランダムアタック^通カーオプス^魔：いや作戦名に通り魔^魔って単語を入れるのどういう事なんよ。作戦エリアは火星。表向きの作戦目標は『SDF火星防衛艦隊への威力偵察』となっているが、真の目標はジュネーブ奇襲攻撃の仕返しとコッチ艦隊長の顔面に泥を塗りに行く事である。その為の装備もUNSAより提供された。

「よーし、いっちょ派手にぶちかますとするか！コール少佐、準備は出来ているか？」
「問題ありません、艦長。いつでもいけます」

更に今回の作戦ではコール少佐と他3名にも役割がある。UNSAから提供された装備の運用は彼女達が行うのだ。

「よろしい。ではランダムアタックオプスを開始する。データ、火星にジャンプだ」
「了解です、艦長」

SDFの駆逐艦ヴァリアントは出来たてホヤホヤの新造艦だ。数日前に各種試験を無事に終え、現在は火星周辺のパトロールから帰投中である。艦長以下乗組員達の士気は高く、UNSAの連中を叩き潰せる日を楽しみに待っている。明後日から金星方面に出撃し、既に展開中の空母ヘラスの護衛任務が始まる。我々の戦いはここから始まるのだ、ヴァリアントの艦長はそう考えていた。

彼らは良く訓練された優秀な軍人だ。多数の友軍艦が展開している本拠地が目の前にあるが、油断などは全くしていない。いっどんな事が起きても我々なら直ちに対応出来る、そう信じていた。

『呼ばれてないけどジャジャジャーン！ちわーデイスカバリーです！』

瞬きをする間に見たこともない大型艦が突然目の前に出現し、それとほぼ同時に全周

波数帯からテンション高めめの男の声が大音量で鳴り響き、更に青色のレーザー光線がヴァリアントの船体を文字通り真つ二つにした。この間たった3秒。ヴァリアントの乗組員達は一体何が起きたのか、あの船は何なのか、それらを考える間を与えられる事なく、宇宙の藻屑と化したのであった。

『なんだあの船は?! UN SA か?』

『駆逐艦ヴァリアント、及びネレイダム轟沈!』

『総員戦闘配置! あの船を撃沈しろ!』

『スケルターを早く上げろ!』

うわー敵さん大慌てだな。いいぞ、混乱は俺達の味方だ。全部沈めてやる、と言いたるところだが作戦通りに行こう。

「全速前進! 目標はタルシス造船所だ。針路上の敵艦及び敵機はフェイザーで蹴散らせ。他は後回しだ、雑魚は放っておけ!」

「了解です、艦長」

「少佐、射程に入ったら合図をくれ」

「了解しました、艦長」

SDFの駆逐艦やA-JAKカタター、更には艀装途中の巡洋艦が艦載砲や機銃、ミサイルでディスカバリーを撃沈しようとするが、まあシールドあるから攻撃効かないだよね。

『こちら駆逐艦アルシア！機関大破！我操舵不能！救援を……！』

『くそつたれ！アルギレ爆沈！スケルター隊の被害甚大！』

『アスクレウスが吹き飛んだ！もつと攻撃を集中しろ！』

これで5隻は沈めたから、ここからはフェイザーの威力を落として機関部のみを破壊する。スケルターやA-JAKカタターなら威力を落としても一撃で破壊できるから問題ない。敢えて沈めずに身動き出来ないようにしてやろう。

「艦長、射程に入りました！」

「了解だ、少佐。データ、例のミサイルを造船所に向けて発射だ！」

UNSAから提供された装備とは特殊なミサイルだった。大量の針状機械が時限信管により造船所手前で炸裂し、円錐状に撒き散らすフレシエツト弾である。これで何をするかと言うと、造船所及びSDFのメインフレームへのコンピュータウイルス攻撃だ。

針状の機械は造船所のあちこちに突き刺さる。そこから造船所のシステムにウイル

スガ流し込まれる。あっちの部屋では重力が切れたり、こっちの部屋では生命維持装置が、反対側ではいきなりハッチが開いてダイナミック宇宙遊泳を、といった感じである。控えめに言っただけだね。

更にSDFのメインフレームから重要な情報を引き出してUNSAに送信する。現在使用されている暗号、部隊の配置情報、今後の作戦方針等々。UNSAにとってはどれもこれも宝の山だからね。

「少佐、これで作戦目標を完了したと言えるかな？」

「十分過ぎる戦果です、艦長！ 帰投しましょう」

「いや、もう一つやる必要がある。手伝ってくれ」

これは俺が個人的にやりたいやつなんだ。コッチ君にメッセージを送らないとね。

サレン・コッチ艦隊長は目の前の惨状に愕然としていた。まさかUNSAが母なる火星を攻撃するとは思わなかった。損害報告は目も当てられないレベルでひどいものだった。駆逐艦ヴァリアント、ネレイダム、アルシア、アルギレ、アスクレウスの5隻が沈没、駆逐艦4隻、巡洋艦2隻が大破、更にスケルターも50機以上が撃墜された。しかも造船所経由でSDFのメインフレームがウイルス攻撃でめちゃくちゃになった。復旧にどれだけ時間が掛かるか検討もつかない。これだけの被害をたった1隻の船が生み出した。

（一体UNSAはどんな船を建造したのだ？スパイの情報にはこんな形状の船はなかった。リトリビューション、タイガースとは明らかにデザインや兵装が異なる…）

オリンパス・モンスの艦橋でそんな事を考えていると通信が入る。

『艦隊長、通信ブイのようなものを発見しました。内部スキャンの結果、ウイルス等は確認できませんでした。映像ファイルが1個あります。再生しますか？』

「今すぐ再生しろ」

再生すると男が映っていた。UNSAではない、見慣れない制服を着ている。艦橋も

UNSAの軍艦には見えない。

「イエーイ！コッチ君見てるー？今から君の大事な火星を俺達が…あー、ごめん！もう吹き飛ばした後でしたー！」

オリンパス・モンスの艦橋は静まり返っていた。画面の男は気にせず続ける。

「いやーSDFの船つて弱いね！あつという間にドカンよドカン。もつと頑丈に作った方がいいんじゃないですか？てか疑問なんだがあのスローガンつてどういう意味なん？なんだつけ：Mars enemyだっつけ？まあいいや」

※Enemyagra（エネマグラ）は前立腺マッサージ器具の名称です。

ニヤニヤしながら話す男はここで真顔になった。

「でも、怒つちや駄目だよ？だつてコッチ君、ジュネーブや月でひどい事したもんね？軍人はもとより、民間人も容赦なく殺しまくっていたもんな？だつたら文句言えないでしょ？人が嫌がる事をしてはいけません、つて子供の頃教わらなかった？まあ君の幼少期はどうでもいいとして」

男はカメラに近付いてドスの利いた声で静かに言った。

「いいかボッチ君。あ、コッチ君。今君に何が出来るか教えてあげよう。そんなに難しくないから大丈夫。実にシンプルだ。SDFはUNSAに対して無条件降伏しろ。そ

れが出来ないなら、次会う時にお前は死ぬ。それだけの話だ」

カメラから男が遠ざかる。

「最後になるが自己紹介を。私の名前はジェームズ・T・カーク大佐。惑星連邦宇宙艦隊所属、USSデイスカバリーの艦長だ。UNSA所属ではないからな！よく覚えておけよ。あ、最後にもう一つ。オリンパス・モンスが火星にジャンプしてから15分が経過するとフォボスとデイモスが吹っ飛ぶからよろしく。まったねー！」

動画の再生が終わるのとほぼ同時にフォボスとデイモスが光った。カークが配置していたステルス魚雷ランチャーから量子魚雷が各衛星に4基ずつ発射されたのだ。

デイスカバリーに搭載されている光子魚雷の威力は300アイソトン。25アイソトンの光子魚雷1基で大都市が数秒で壊滅する。そんな反物質弾頭の光子魚雷よりも更に威力が高いのが量子魚雷だ。真空エネルギー反応爆発を引き起こす弾頭となっている。そんな物騒な代物を4基も撃ち込まれたフォボスとデイモスは、文字通り粉々に碎け散った。破片が四方八方に飛散したせいであちこちで被害報告が上がる。

そんな中、コッチの部下も、C12ロボットも、全員が無言だった。人間はもちろん

何故かロボット達も一種の共通体験を味わっていた。エネルギーを最大にチャージしたオリンパス・モンスのF—SPARに狙われてるUNSAの連中というのは、多分こういう心境なのだろう、と。どう考えても助からない武器に狙われている恐怖感。彼らはそれを痛感しまくっていた。

コッチは自分の感情を制御しようとしていた。コッチは常日頃から『死は恥ではない！』と言い切る程の冷酷かつ残忍な性格であり、SDFの広告塔としての役割も果たす高いカリスマ性の持つ男なのだ。そんな人間が感情に流されてはいけない。

しかし彼もまた一人の人間だった。目の前のモニターに映る、満面の笑みを浮かべながら横ピースをしているカークと名乗る男を見て、コッチは無意識に拳銃を抜いていた。部下が止める間もなくコッチはモニターにマガジンに装填されていた全弾を撃ち込んだ。

使い物にならなくなったモニターを見て、ようやくコッチは口を開いた。

「報復だ！復讐だ！あの船に死を！あの男に死を！火星を、我々を怒らせた事を後悔させてやれ!!」

「はい、カット！」

「よし！人を煽るのって楽しいな。手伝ってくれてありがとね、少佐」
帰投する前にこんな事をしていたカーク艦長とコール少佐であった。

5 : 遊撃隊として

ランダムアタッカーオプスの後、地球軌道上でリトリビューション、タイガースと合流し、レインズ艦隊長との4者会議が行われた。

レイエス率いるリトリビューションはフェニックスオプスを見事成功させ、SDFの空母をEMPに無力化して試作エアシップを強奪してきた。タイガースは水星近辺にて航行中だったSDFの輸送艦を強奪。艦隊再建に必要な不可欠の貴重な金属資源を手に入れた。

「艦隊長、今後の方針はどうしますか？」

『うむ。最初はリトリビューションにはディーコンオプスを実行してもらう予定だったが、それよりも優先してやって欲しい任務がある。バーンウォーターオプスだ』

土星の衛星タイタンに存在する燃料補給所の破壊任務。確かにこつちの方が優先だよな。SDFは大損害を受けてしばらく大人しくなるだろうし。まあ化学兵器も十分危険だけだな。この時代の化学兵器ってどんなやつなのか気になる：前世だとサリンとかVXガスとかノビチヨクとかが有名だったな。時代が進んでいるこの世界だともっとえげつない化学兵器が作られてそう。

タイガースは引き続き哨戒任務にあたるとのこと。リトリビューション以外に運用可能な唯一の戦闘艦だが、所詮は駆逐艦だから出来る事は限られる。仕方ないね。

『カーク艦長、SDFは今後どのような行動を起こすと思う？意見を聞きたい』

会議の最後の方でレインズ艦隊長に話を振られたので返事をする。

「火星の復讐に燃えるSDFが取る戦術は2つのはずです。1つは被害の復旧、戦力の回復に務めるべく戦闘を避ける。SDFの勢力下にある土星はもちろん、各地に展開中の部隊から戦力を引き抜いて火星の防備を固めるのではないかと」

『それが道理だな』

「もう1つは、感情に任せてディスカバリーを搜索、その途中で見かけたUNSAの拠点や部隊に無差別攻撃を仕掛けるのではないかと、というものです。あのプライドが高そうなおコッチの顔にこれでもかと泥を塗りたくった訳ですし、ホームベースである火星が今まで見たことがない船に襲撃された。しかもUNSAではなく惑星連邦という聞いた事がない組織に。相当怒り狂っているでしょう。ただ正直、この線は薄いと思います。イカレポンチなのは分かっていますが、それでもコッチは優秀な人間です。感情に任せて大暴れ、という事はしないでしよう」

コーヒーで喉を潤してから俺は続けた。

「これは私の推測ですが、SDFがジュネーブ及び月に対する奇襲作戦を行うにあたつ

て、連中は大量のスパイを地球に送り込んでいる筈です。AATISの破壊工作を実行したライア中佐もその1人でしよう。優秀な人員を潜入させ、時間をかけてUNSAの情報を入手、最適な作戦を計画し、最高のタイミングでUNSAを殴りつける。ここまでは良かったがイレギュラーが起きた。レイエス艦長率いる精鋭のSCARチーム及び勇敢な海兵隊の活躍によりSDFは撤退、月の奪還も成功した。そして今まで地球上に存在しなかったこのデイスカバリー。その後の戦いにおいてもUNSAが勝利を重ねています。戦力の差では負けていても勝機はこちらにあります」

『そう言ってもらえて我々も嬉しいよ。火星から回収したデータの解析も進んでいる。その中にジュネーブ近郊に潜伏中のスパイ及びセーフハウスの場所も確認できた。じきにスパイ網は壊滅するだろう』

その後、デイスカバリーの今後の方針について話し合ったが、遊撃隊として動くのがベストだと進言した。コッチ君が俺の予想以上にブチ切れていた場合、薄い線と言った第2の戦術を取る可能性がある。こっちは3隻しかいないのにそんなことされたら、UNSAが受けるかもしれない被害は重大なものになる。また地球攻撃なんてされたらたまったもんじゃない。なので敢えて俺が太陽系内を堂々と飛び回ることでUNSAから目を逸らせる。要は困だな。レイエスやフェランは反対していたけどレインズ艦

隊長の賛同を得て押し切った。

「それで艦長、ここで一体何をするんですか？」

ヒロセ大尉が不思議に思うのも道理。彼の目の前にあるモニターは太陽系全体を表すもので、リトリビューションとタイガースの現在位置が表示されている。そしてディスプレイバリーの現在位置は火星と木星の公転軌道の間が存在する小惑星帯である。

「ちよつとした実験をしようと思つてね。俺も初めてやるから成功するかは不明だが」
そう言つて俺は船を近くにあつた手頃なサイズの小惑星に近付ける。

「データ、トラクタービームの操作はこつちでやる。フックの操作は任せたぞ」
「了解です、艦長」

トラクタービームでゆっくりと小惑星を船の下部に近付ける。それと同時に下部に設置した頑丈なフックが展開する。これは火星での大暴れで大量に稼いだポイントを使用した。

「そのまま…そのまま…よし！捕まえました！」

「よくやった、データ」

2つのフックでディスプレイは小惑星をがっちりと掴んだ状態だ。

「小惑星をどうするので？まさかこれを火星に一杯投げつけるとか…」

「しないからね!?え、俺の事何だと思つてるの？」

するとコール少佐は目を背ける。え、こっち見てよ。

「控えめに言つて…常識が1ミリも通用しない人…ですかね？」

「ええ…」

…気を取り直して。実験を進めよう。

「それじゃあデータ、胞子ドライブ起動。目標は10キロ先。ブラック警報」

今回の実験はフックで別のものを掴んだまま胞子ドライブが使えるのかどうか、というもの。これが出来ればある作戦を実行に移せるからね。

「準備完了、いつでもどうぞ」

「よし、ジャンプ！」

「データ、どうだ？」

「船体及びフックに異常なし。小惑星は…掴んだままです。内部構造にも変化なし！成功です！」

「よし!!」

これで作戦はうまく行くだろう。みんなニッコリだな！

「よし、じゃみんな行こうか？」

「作戦目標は？」

「SDFから空母を貰おうと思ってね、タダで」

SDFの空母ケルベロスは天王星第5衛星ミランダの小惑星帯にある秘密乾ドックにて修復作業の真っ最中だった。リトリビューションによるフェニックスオプスの影響で、エンジンがEMPでお釈迦になったからだ。更に言うスケルター隊の損耗も無視できないレベルだった。

幸いドックに予備のエンジンパーツは揃っていたので、予定では増援のスケルター隊が到着してから作業を進める筈だった。しかしデイスカバリーの火星攻撃が全てを変えた。24時間体制で修復作業を実施し可及的速やかに火星へ帰投せよ、とのコツチ艦隊長からの命令でクルーは大忙しだ。

優秀なクルーとドック員のおかげで修復作業は佳境を迎えており、このペースで行けば明日には出発できる。ケルベロスの艦長は艦橋でリラックスしていた。試作機を奪われた上、複数のエースパイロットを失った事は大きな損失だ。だがこの借りは必ず返してやる。

その時艦橋に警報音が鳴り響いた。

「何事だ!」

「機関室より報告!メインリアクター及びドロップリアクターが原因不明のオーバーロードを起こしているとのことです!」

「何だと!」

艦長の顔が真っ青になる。メインリアクターは名前の通り艦全体の動力源だ。それと同じくらい重要なのがドロップリアクターだ。こいつが無いと光速を超えたジャンプが出来ない。もし爆発を起こせば間違いなくケルベロスはドック諸共木っ端微塵だ。

「何とかしろ!」

「駄目です！完全に制御不能です！」

「吹き飛ぶまでどれくらいだ？」

「このままでは…あと15分もないかと！」

「最悪だ、くそつたれ！こちら艦長！総員退艦せよ！繰り返し、総員退艦！リアクターが吹っ飛ぶぞ！通信士官、火星に緊急連絡を！救助を要請するんだ！あと乾ドック指揮所に連絡して作業員を退避させろと伝えろ！」

「もうやっています！艦長も急いで下さい！」

艦内は大混乱に陥るも、皆プロの軍人らしく命令に従い素早く退艦を実施した。15分程の時間しかなかったが、なんとか時間までに全員の退艦が完了した。爆発から逃れるべく全力で乾ドックから離れる。

「こんな事で艦を失うとは…恥ずかしくて死にそうだ！艦隊長になんとお詫びすればよいか…」

「艦長…」

避難するシャトルの中で艦長は悔しそうに壁を叩いていた。

「もう間もなくかと」

「そうか…」

気力を振り絞って艦長はケルベロスの最期を見ようとモニターに目を向ける。しば

らくすると突然青白い光と共にケルベロスが消えた。文字通り。

「……………あ?」

「えっ?」

避難したクルーや作業員はしばらくフリーズしていたが、乾ドックそのものは残っていたので大急ぎで戻った。ドックへの被害はなかったものの、ケルベロスは忽然と姿を消してしまった。

「なんでえ?」

艦長の疑問に答える事が出来る者は誰もいなかった。

ちなみにケルベロス消失事件を聞いたコッチは反射的に隣にいたロボットを素手で殴り壊した。

「艦長、弾薬等の物資補給が完了しました。いつでも行けます」

「了解だ、ゲイター」

リトリビューションは補給を終えて地球から土星へ、すなわちバーンウオーターオプスを実行するところだった。そこにデイスカバリーがジャンプしてきた。それを見ていたレイエスは、32世紀の宇宙船は全部あんな感じのデザインになるのだろうか、そもそもどんな世界になっているのだろうかと少し考えた。

しかしデイスカバリーの真下にある物を見て、そんな考えは銀河の果てまで吹き飛んだ。いつの間にかデイスカバリーの下部にでかいフックがあり、その先にはSDFの大空母がぶら下がっていた。よく見たらこの前天王星で無力化したケルベロスじやないかあれ？

「通信士官、デイスカバリーに繋いでくれ」

「了解です、どうぞ」

「こちらトリビューション。デイスカバリー、応答せよ」

『こちらデイスカバリー。驚かせてすまない。こいつを持つてくるのに苦労したよ』

持つてくる？ 戦闘して鹵獲したということか？ ただ見た感じケルベロスに損傷は見当たらないな…

「カーク艦長、それは…ケルベロスですよね？」

『その通り。俺の知らない間にSDFが天王星に店を構えていてね。覗きに行ったらEMPでエンジンをやられた中古空母を格安で売りに出していたんだよ。これはお得だと思つて買おうとしたんだが、いざ支払いつて時に財布を忘れた事に気が付いてな。うっかりしていたよ。で、どうしても欲しかったから万引きしてきた』

真顔でそんな事を言うもんだからトリビューションの艦橋にいた全員が爆笑した。空母を万引きつてパワーワードすぎる。こんなの笑うなと言う方が無理だ。

「ち、ちなみに乗組員はどうなったんです？」

『それなら大丈夫だ。火星攻撃時にこちらが用意したウイルスを使用して、ケルベロスのリアクターが吹き飛ぶという偽のデータを表示させたんだ。連中慌てて船から逃げたよ。艦内のロボットも停止済みでシステムは完全に掌握している。軽く調べたがEMPでフライになったエンジンもほとんど修復されているから、色を塗り替えてUNSSAの旗を掲げれば問題ないと思う。どう使うかはレインズ艦隊長次第だがね』

その後ケルベロスはカーク艦長の言った通り、UNSAカラーに塗り替えられて正式に運用される事になった。SDFの他の空母と異なり、ケルベロスには強力なレーザガンが搭載されているので艦隊戦でも活躍してくれそうだ。ただしばらくは乗組員の訓練が必要なので前線に出るには時間がかかるだろう。あと艦名はケルベロスからヘラクレスに変更となった。ギリシア神話においてヘラクレスがケルベロスを捕えて地上に連れ出した話があるそうだ。

「よしゲイター、土星へ行こう。SDFから燃料を奪い取ってやろう」
「了解です、艦長！」

6：火星急行

万引きしたケルベロスをUNSAに渡した後、俺は遊撃隊としてどう動くか考えていた。本当なら冥王星まで行ってディープエクセキュートオプスをやろうと思っていた。なんか潜入任務ってかっこいいし。でもコッチのアホが、

『指導者会議などしている暇があったらデイスカバリーを探せ！』

みたいな命令を出したのかは知らんが、とにかく会議は中止になったっぽい。くそコッチめ。

遊撃隊の役割はシンプルだ。本隊であるUNSA艦隊とは別に行動し、ターゲットを選ばず状況に応じて戦闘目的を変更する。ならどうするか。

「嫌がらせに徹するでしょう」

「具体的には？」

「そうだな…シンクレア大尉？」

「は、はい！」

急に話を振られてびっくりしているシンクレア大尉。コール少佐より胸でかいよな

：

「例えば君が事故にあつて入院していたとする。早く怪我を治して職場に復帰する為に、毎日リハビリも頑張っている。そんな時いきなり病室に君が一番嫌いな人間が、アポ無しで、しかも毎日無駄話をするだけの為にやってきたらどんな気分になる？」

「それはとてもストレスが溜まりますね、宇宙空間に生身で放り出したいレベルで」「だよね？それと同じ事をコッチにしてやろうかなと」

至るところに艦艇の残骸が浮遊し、吹き飛んだフオボスとデイモスの破片が漂う火星宙域。軌道上のタルシス造船所はもちろん、火星地表の造船所も全力で新造船を建造している。コッチ艦隊長の命令で火星は総動員体制で被害の復旧に努めているのだ。

衛星破壊の影響で火星地表にも残骸が降り注いだ。高性能防空システムにより効率的に破壊された為、地表の被害は少ないものとなった。造船所とメインフレームへのウイルス攻撃も何とか復旧が完了した。

タルシス造船所のコマンドセンターで造船所所長と副官が仕事に追われていた。彼らはこの造船所の責任者であると同時に、火星宙域の防衛責任者でもあるのだ。そのせいで普段の数倍の仕事に対処する羽目になった。

「これであと少しだな。一息入れるか？」

「そうですね。これが片付けば家に帰れますよ。あのまずいレーションにはうんざりです」

「まったくだ。嫁の作った料理に叶うものはないからな」

2人はちよつぴりウイスキーを入れたコーヒーをチビチビ飲みながら窓の外を眺める。目の前を冥王星から転属してきた駆逐艦が警戒任務に出撃するのが見える。

「それにしてもあの敵の船、デイスカバリーはとんでもないやつだったな」

「UNSAではなく別の所属だと言っていましたね。確か…惑星連邦でしたか？聞いたこ

とがないです組織名です」

「私もだよ。だが今までのUNSA艦艇とはデザインはもちろん武装も防御も全てが違う。本当に別組織なのかもしれないな」

「では惑星連邦は我々の戦争にUNSA側で参戦してきたと？」

「連中から正式発表はない。だが…」

そう言つて所長はモニターに画像を表示した。3隻の艦艇が映っている。

「これは地球にいる我々のスパイが撮影したものだ。地球軌道上にてリトリビューション、タイガース、そしてデイスカバリーが横並びになって航行しているのを確認している」

「そうなりますと我々はかなり苦しい立場になりますね。UNSAの2隻だけならまだ何とかなるでしょうけど、1隻で火星をここまで滅茶苦茶に出来る船が敵になるとは…」

「まあな。だがまだ負けが決まっているわけではない。我が艦隊は数を大きく減らしたが直に回復するだろう。それにここだけの話だが…」

所長は声を落として副官だけに聞こえるように言った。

「2隻目と3隻目のオリンパス・モンス級超大型空母が5日後に配備される」

「それはっ…本当ですか？確かに性能は証明済みですけど、コストやらなんやらの問題

で同型艦製造計画はなかったはずでは？」

「俺も今朝聞いたんだが本当だ。元々は評議会が司令部に内緒でこっそり建造していたらしい。自分達の避難船としてな。だが火星攻撃を受けて評議会が情報を開示した、って話だ。司令部の友人に聞いた話だと1隻はここ、もう1隻はコッチ艦隊長率いる第8軌道艦隊に配属されるらしい」

所長は知らない事だが、評議会は司令部はもちろんSDF内部にも情報が漏れる事を防ぐ為に徹底的な情報統制を実行していた。極秘造船所には外部との通信システムがない、完全なスタンドアロンになっていた。ネットワークに繋がっていないからウイルス感染や情報漏えいが生じる恐れはほぼ皆無だ。評議会直属の部隊が施設を管理している為、セキュリティは万全だった。故に司令部は気付く事が出来なかった。

「久々に聞いた素晴らしいニュースですね！」

「しかもオリンパス・モンスに搭載されているF—SPAR、あれの改良型が搭載されているそうだ。若干デカくなったみたいだがエネルギーチャージにかかる時間が減った上、威力も20%ぐらい上がったそうだ。これであのデイスカバリーなんか一捻りだ」

そんな事を話しながら2人で窓の外を見ていた時だった。いきなり目の前にあのデイスカバリーが出現した。

「……………んっ?」

「……………あれ?」

2人はお互いの顔を見合わせ、もう一度窓の外を見る。やはりデイスカバリーがいる。酔いが回った訳ではなさそうだ。

「警報を鳴らせ! 総員戦闘配置!!」

「稼働する全ての対空兵器を敵艦に向けろ!」

「どこから来やがった? レーダーには何も反応がなかったぞ!」

「哨戒中のスケルター2個小隊及び駆逐艦2隻がこちらに来ます! 到着まであと2分!」

するとデイスカバリーから全周波数帯にて通信が入ってきた。

『こちらUSSデイスカバリー、艦長のカークだ。コッチ艦隊長はいないのか?』

「ど、どうします? 返事します?」

「しないと撃たれるぞ? 俺がやろう」

所長はパネルを操作して返事をする事に。

「こちらタルシス造船所コマンドセンターだ。艦隊長はいない」

『どこに行つたんだ?』

「軍機だ。敵に言うわけ無いだろう」

『そりやそうか。じゃまた30分後に来るわ』

そう言い残し、デイスカバリーは艦全体がきりもみ回転して瞬間移動していった。

「え…それだけ？攻撃しないの？何の用で来たんだよ！ていうかもう来んなよ！しかもまた消えたし！なんでなんでなんで!？」

「落ち着いて下さい所長！」

30分後。本当に来た。

『ちわーす、カークでーす。おつと爆竹みたいじゃんそれ。で、コッチ君いる？え、まだ帰ってきてないの？わかった、じゃーね』

前回と同じ場所に出てくると予想して爆雷を設置していたが全く効果はなかった。

「クソツ！」

「駄目でしたか…もつと置きます？」

「やめとけ。置きすぎるとコマンドセンターも吹っ飛ぶぞ」

「確かに…F—S P A Rここに配備して欲しいですね」

「いいなそれ。でもエネルギー足りるか？」

「あー…難しいかもですね」

また30分後。なんかキレてる。

『おいコツチ！出てこいこの野郎!! 居留守使ってんじゃねえぞ！そこにいるのはわかかってんだ!!』

ゴオンツ!!ゴオンツ!!

「いないつつつてんだろ！てか叩くのやめろおおおお!!!」

デイスカバリーは分離型ワープナセルをコマンドセンターの上部にガンガンぶつけていた。15回ぐらいぶつけてから帰った。大した被害はなかったが造船所にいた全員が恐怖した。あいつ頭おかしいだろ！

この後更に4回来た。そのせいで造船所にいる人間は全員ぐったりしていた。駆逐艦による至近距離からの攻撃も効かず、高速で体当たりしたA-JAKは文字通り砕け散った。だがデイスカバリーは一切反撃せず、口を開けばコツチを出せの一点張りだった。

『なあ、ちよつと聞きたいんだけどいい?』

今までとは違い、少し申し訳無さそうな感じの声だったので、所長は返事をする事に。

「なんだ?」

『あのさ、もしかしてだけど…今日コツチ帰ってこない感じ?』

「……………」

『いや、ほら、3時間待つてあげただけど全然来ないしき、ね！ひよつとして仕事忙しいのかなーなんて、思ったり思わなかったり…』

所長は疲れていた。本能的に言おうとした。あともう少しで帰ってくるぞ、と。しかし彼はプロの軍人だった。

「…軍機を言う訳がないだろう。用がそれだけなら帰ってくれ」

『そつか…じゃあ今日はこれぐらいにしておくわ。すまん、時間取らせてしまつて。じゃあまた明日の朝来るね！バイバイ！』

「二度と来んなクソ野郎!!」

こうして所長達の長い一日は終わった。帰投したコツチ艦隊長に詳細を報告すると、この距離でも抜けないのか…駆逐艦とはいえそれなりに火力は……A—JAKの乗員は?…無線操縦…ブースターも付けて加速したのに駄目か……所長、このカークという男だが、具体的に私に会つて何をしたいのか、言つていたか?』

「いいえ、艦隊長。こちらからも聞きましたし、必要なら伝言も受けると言つたのです
が、直接言うから良いと…」

『そうか分かつた。所長、限られた戦力で被害を出さずに良く耐えてくれた。苦勞をか

けてすまない。だがあと5日で戦局は大きく変わるだろう』

「オリンパス・モンスの同型艦ですね？」

『その通り。UNSAもこの事は気付いていない。私が知ったのがこの前だったからな。評議会はもつと我々を信用してほしいものだ…それはともかく、君の提出した造船所にF—SPARを設置する案だが私も賛成だ。エネルギーの問題については地上から軌道エレベーター経由で送れば良い』

だが、とコッチは顔をしかめる。

『残念ながらF—SPARの現物が無い。2番艦、3番艦への資材が最優先で回されているから新しく作るにしても時間がかかる。最低でも1ヶ月はかかってしまうだろう』

「そうですか…無い物ねだりは出来ませんな。今あるもので対処しましょう」

『それしかあるまい。だが明日また来ると言っていたんだらう？どう対処する？』

「現有戦力でははつきり言つて勝てません。場所が場所だけに攻撃手段が限られますから。かと言つて相手の通信を無視した場合攻撃してくるかもしれません。明日は地上攻撃用の大型貫通爆弾等を敵艦直上より投射する予定です。あとは行き当たりばったりになるかと…」

『なるほど…せめて造船所が動かせれば良かったのだが設計上不可能だからな』

そして翌日。所長は叫んだ。
「来ないのかよっ!!!」

「艦長、今日に行かないんですか？」
「今日の火星急行はやめておこうかな」

火星急行とは昨日の作戦の事だ。ネーミングはもちろん東京急行から取った。太平洋戦争時の鼠輸送の事ではなく、冷戦時代から旧ソ連空軍・ロシア空軍の戦略爆撃機、哨戒機、偵察機、電子戦機等が日本の周辺を飛行し、東京に近づく飛行コースで哨戒・偵察を行なうやつの方ね。

「行くって言ったんじゃ？」

「だから行かない。すると連中は肩透かしを食らう。待ち構えているのにあいつなんて来ないんだよおい、って感じでイラツとしなない？」

「艦長、性格悪いですね（なるほど、それは確かに）」

「考えている事と言いたい事が逆転してない、コール少佐!？」

7：運命を変える

リトリビューションはバーンウオーターオプスを見事成功させたそうだ。ゲームと同じでレイエスとイーサンが宇宙空間に取り残されたがタイガースが無事に救出した。ここまでは問題ない。

しかし、レインズ艦隊長の命令でリトリビューションはダーククオリオプスを実行する。ゲームではこの作戦でオマー軍曹が戦死し、更にほぼ同じタイミングでタイガースがオリンパス・モンスに撃沈されてしまう。これを防ぐのが俺の仕事だ。問題はどうかやってやるか。とりあえず通信を開いて、と。

「レイエス艦長、こちらカーク。緊急の連絡ですまないが、これから水星に行くんだよな？」

『ええ、その通りです。何か？』

「水星付近に展開中の探査機にオリンパス・モンスの姿が映っていた。今から数時間前だ」

『何ですって!?!』

「もう知っていると思うがベスタ3は軌道を外れて太陽に向かって一直線だ。恐らくべ

スタ3をスイスチーズみたいに穴だらけにしやがったのはオリンパス・モンスだ」

小惑星の軌道が変わるレベルの攻撃って相当だよな。ベスタ3って結構大きめだったし。

『最悪だ…生存者はいるんだろうか…』

「俺が思うにこれはリトリビューションをおびき寄せる罠だ。オリンパス・モンスの火力ならばベスタ3を完全に破壊する事は容易のはず。そうしなかつた理由は1つしかない」

『リトリビューションを救出に向かわせている間に何かをする為。となると考えられるのは…まさか!』

「同じ考えに至つたようだな。オリンパス・モンス、いやコッチの狙いはタイガースだ。万が一救難信号を発信されてもリトリビューションが間に合わないくらい距離を置いた上で、誰にも邪魔されずにタイガースを攻撃するつもりだろう。フェラン艦長には申し訳ないがタイガースの火力ではオリンパス・モンスには歯が立たないだろう」

一瞬で16隻のUNSA艦艇を撃沈した超大型空母と駆逐艦では話にならんよな。決してタイガースが弱い訳では無い。オリンパス・モンスが強すぎるだけだ。ゲーム内においても太陽系で一番大きくて最強の艦艇って紹介されていたし。

『だからといって見捨てるわけにはいきません!採掘コロニーにはまだ生存者が救助を

待っているかもしれない』

「もちろんだ。だからデイスカバリーはしばらくタイガースと行動を共にする。オリンパス・モンスが来なければよし、来たらタイガースと共同で撃退する。あと今からそっちにちよつとの間お邪魔するよ。今回の任務で使うかもしれないデバイスを提供する」

『デバイス？わかりました』

という訳で、早速リトリビューションの真横にジャンプ。用意した荷物を抱えてリトリビューションの艦橋にピュツと。

「どうも、レイエス艦長」

「…さつきぶりですね、カーク艦長。最初はびつくりしましたが、なんか慣れましたよ」

「それは何よりだ。でもこれを使うとまたびつくりするかもな」

そう言つて俺は両手に抱えた大きな箱を揺らした。

レイエスはカークを格納庫まで案内した。レイブンの横でオマー率いる海兵隊が揃っていた。

「軍曹、こちらはカーク大佐。デイスカバリーの艦長だ。カーク艦長、こちらはオマー軍

曹。海兵隊部隊の指揮官です」

「初めまして軍曹。君達勇敢な海兵隊の活躍はレイエス艦長から聞いているよ」

「ありがとうございます、艦長。こつちでもあなたが火星で派手に暴れたニュースで持ちきりですよ。またやるんでしょう？」

「もちろんさ、明日か明後日には火星旅行に行こうと思っただけ。じゃあちよつとこれの説明をするから注意して聞いて欲しい」

カーク艦長が取り出したのは楕円形のバッジみたいなものだった。カーク艦長が左胸に付けているものと同じに見える。

「我々はこれをコムバッジと呼んでいる。このように胸のどこかに付けていけばいい。通信・翻訳・GPS機能は標準装備、そしてこいつには転送装置が付いている」

「転送？それはどういう…」

ブルックス伍長が聞くとカーク艦長はニッコリしながら、
「こういう事だよ」

「と、伍長の真横にジャンプした。いきなりの出来事に海兵隊員達はびっくりしていた。カシマー一等兵は口が開きっぱなしだ。」

「えっ…ええっ?!」

「いわゆるテレポート、またはワープと呼ばれる技術だな。好きな所に飛べるし、指定し

た座標にも飛ぶ事も出来る。更に負傷者等を抱きかかえながらでもジャンプ出来る。というかこのコムバッジを装着している人間に触れてさえいれば、一緒にジャンプする事が可能だ。最大で10キロメートル先まで転送可能だ」

「すごい技術だ：ですがこれ程の物を我々に提供してもいいんですか？」

「大丈夫だ。理由は幾つかある。まず現在のUNSAやSDFの技術力ではこいつの複製はもちろん構造解析すら不可能だからだ。それにフェイルセーフも付けてある。転送装置は30回までしか使えない設定にした。使い切ったらコムバッジは自動的に破壊される」

「もう一つ聞きたいことが。何故今回の任務でこれを渡すのですか？」

「諸君の安全の為だ。知っての通りベスタ3はコツチのクソ野：失礼、オリンパス・モンスの攻撃の影響で太陽目掛けてダイビング中。しかも観測データを見る限り地表が数百度、局所的には千度以上の灼熱地獄になっている。日焼け止めを塗っても効果はないだろう」

敵艦隊のリーダーをクソ野郎って：まああいつがクソ野郎なのは当然だが。

「そんな場所で時には遮蔽物がない場所を横切らないといけないだろう。そこで転送装置を使えば対岸の施設に素早くジャンプする事ができる。あと生存者がいた場合、迅速に避難させる為にレイブンの格納庫に直接ジャンプ出来れば便利だろう？施設内には

可燃物が腐る程あるみたいだし、俺ならそんな場所に長居はしたくないね」

その後転送の練習をしたがこいつは凄い。最初は若干酔ってしまいが慣れれば便利なものだ。

「32世紀はとてつもなく科学力が進んだ世界なんですな」

「そうしないと生き残れなかつたんだ。惑星連邦は今まで異星人や機械生命体等のとんでもない連中と戦ってきたからな」

そう言いながらカーク艦長は遠くを眺めた。相当大変な歴史を歩んできたのだろう。

とりあえず転送装置があればオマーは助かるはず。100%ではないけど生存率は大幅に上がるだろう。あとは本人の運次第か。

で、次はタイガースだけどその前にポイント使って何か買おうかな。現在のポイントは325000ポイント。火星攻撃でだいぶ稼げたみたいだ。カタログをパラパラめくっているけどこれと比べていい感じのものはないかな……念の為に防御力を上げて

おくか。オリンパス・モンスのF—SPARだともしかしたらシールドを抜くかもしれない。

今のディスカバリーのシールドは2重構造になっていて、防御力はあのシミターを超えている。それを更に倍プツシユの4重シールドにポイントで改造した。これならオリンパス・モンスに体当たりされてもあつちが壊れるだろう。

「しかし本当に来るんでしようか？」

「絶対来る。ヘルナンデス大尉、君が指揮官なら艦載機を搭載した空母と殴り合うのと、駆逐艦を一方的に殴るのだったらどちらがいい？」

「それはもちろん後者ですね」

するとデータが警告を発した。

「艦長、火星宙域よりオリンパス・モンスがジャンプしました」

「了解した、データ。シールド最大、武器システム稼働。コール少佐、タイガースに警告を出せ」

「分かりました！」

程なくして目の前にオリンパス・モンスが出現した。やっぱでかいよな。確か全長927メートルだっけ。スケルターが一斉に飛び立つ姿はかっこいいな。

「艦長、タイガースのフェラン艦長より通信です」

「繋げ」

『カーク艦長、これは逃げに徹した方が良いと思うんだが』

「全くもって同意見だ、フェラン艦長。オリンパス・モンスの底部をすり抜けてからジャンプしてくれ。デイスカバリーが殿を務める」

『感謝する、幸運を』

タイガースが全火力をばら撒きながらオリンパスの底部に向かうのでデイスカバリーもそれに続く。底部に武器がなくて良かったよ本当に。あとなんかコッチが通信に割り込もうとしているけどシカトで。

「敵艦載機接近！ハードポイントに大型爆弾らしき物を確認！」

「コール少佐、あれを見たことはあるか？」

「恐らく対地攻撃用爆弾かと！タイガースに命中すれば甚大な被害が出ます！」

「データ、タイガースに向かう敵艦載機及びミサイルを集中的に迎撃しろ。本艦はシールドがあるから問題ない」

「了解です」

青い光線が宇宙空間を走り、スケルターとミサイルを次々と破壊する。タイガースには近接防御火器がないから仕方ないね。そうこうしているうちにオリンパス・モンスの底部を通り抜けた。あとは逃げるだけ。

「艦長、オリンパス・モンスが旋回。F—SPARが稼働しています。目標はタイガース！」

「今すぐF—SPARの射線に割り込め！フェラン艦長、直ちに緊急ジャンプを！」

『だがそれではデイスカバリーが！』

「この船なら耐えられる。行ってくれ！」

『…すまない！操舵手、緊急ジャンプだ！』

F—SPARが発射される数秒前にタイガースは戦線を離脱した。これでヨシツ！

「F—SPAR、間もなくチャージ完了します！」

「総員衝撃に備えろ！」

そしてデイスカバリーはF—SPARの攻撃で宇宙の藻屑に…なるわけないだろう！死んでたまるか！でもやばい衝撃だったな。

「全員怪我はないな？データ、被害報告！」

「第1シールド、出力5%にまで低下！」

「一撃でそこまで食われるとは…やっぱF—SPARは強いな」

「F—SPAR、再度チャージ中です！」

「相手には使えらんない。データ、オリンパスの後方にジャンプ。エンジンを攻撃して動けなくしてからこの宙域より離脱する」

「了解です、艦長」

「被害報告を！」

「艦底部の複数エリアで火災発生！ダメコン班が対応中！」

「撃墜されたスケルター隊の搭乗員をウォーデンが救出中です！」

「左舷エンジン大破！リアクター出力低下！復旧まで10分！」

「ドロップリアクターは正常稼働中です！」

コッチは不機嫌だった。リトリビュションを水星におびき出し、その間にタイガースを撃沈する作戦。うまくいくはずだった。ジャンプしたらあの憎きデイスカバリーもいた。これは好都合、まとめて沈めてやる。と思ったのだが結果的にタイガースは逃亡、デイスカバリーにF—SPARを叩き込んだが効果はなく、逆に12機のスケルターを撃墜された上、エンジンに一撃を受けた。

（おのれデイスカバリー！どこまでも我々の邪魔をしやがって！しかも私の通信を無視するとは…許せん！）

だがコッチには秘策がある。火星に連絡してオリンパス・モンス級2番艦及び3番艦の艦隊配備を早めるように指示を出した。3隻のオリンパス・モンス級が一斉にF—S

P A R をディスクバリーに放てば確実に破壊できるだろう。
(最終的に勝てば問題ない。そして火星が全てを制するのだ)

「艦長、火星からの最新データです」

「ありがとう、データ………ん？」

「どうしました、艦長？」

「あー大丈夫だよ、データ………これは…コール少佐？」

「はい、何でしょう？」

「ちよつと聞きたいんだけどさ…オリンパス・モンスに同型艦が複数いるって話、聞いたことあるっ？」

8：次の作戦は？

ベスタ3に降り立ったレイエス達だったが、地面から炎が吹き出るわ、太陽の熱でこんがり焼けそうになるわ、セキュリティボットが暴走しているわ：それはもう文字通り散々な目にあつた。だが結果的にカーク艦長から貰つたコムバツジは大勢の命を救う事になつた。

施設間を移動する際にとても役に立つた上、施設の奥で発見した生存者を避難させるのに転送装置は最適なデバイスだつた。着陸場がすぐ横にあつたがセキュリティボットと可燃物で埋め尽くされていた。もしあそこにレイブンを着陸させて避難をしていたら何人かは犠牲になつていただろう。この戦いが終わつたらカーク艦長には一杯奢らないとな。

「艦長、おかえりなさい」

「イーサン、何か報告はあるか？」

「カーク艦長の読みは当たりました。タイガースとデイスカバリーがオリンパス・モンスの襲撃を受けました」

報告によると、2隻はオリンパス・モンスの底部をうまくすり抜けてジャンプしよう

としたが、オリンパスがF—SPARを稼働させた為タイガースは緊急ジャンプを実行、デイスカバリーが盾となった。緊急ジャンプの影響でタイガースの機関が損傷し航行不能に陥る。そこにデイスカバリーが飛んできて月までタイガースを曳航した、と。色々ツツコミどころ満載なんだが：まず何でデイスカバリーはF—SPARの直撃に耐えれたんだ？しかも損傷したタイガースを月まで曳航してどうやって：なになに、トラクタービームでタイガースを引っ張りながらワープした？ちよつと何言ってるかわかんない。

そして今度はライアの報告書だがまさかトランスポンダーが埋め込まれていたとは：艦隊を侵攻させる為にAATISを破壊してライア自身も死ぬ、片道切符の特攻作戦。ならそれを逆手に取るのはどうだろう？

ソルター達は俺が考えた作戦はうまく行くと思っていた。イーサンがSTRATCOMに立案した作戦計画を送信したが、すぐにレインズ艦隊長から通信が入った。

『レイエス艦長、君のジュネーブにおける戦略だが：正直に言おう、私は承認しなかった』

「と言いますと何か問題でも？」

『うむ。ここからはカーク艦長に説明してもらおう』

『レイエス艦長、無事にベスタ3から生存者を救出できたと聞いてホツとしたよ。それ
はともかく、まずはこれを見て欲しい』

送られてきた映像を見た俺達は固まった。どうみてもオリンパス・モンスにしか見え
ない船が2隻もいる。あいっらいっのまに同型艦を…

『以前実施したランダムアタッカーオプスで火星宙域に探査機を展開していた。そいつ
からの映像なんだが、これはオリンパス・モンスによる襲撃から逃げた後のデータだ』
「つまり、オリンパス・モンスは合計3隻いる?」

『おそらくその通りだ。SDFのメインフレームを覗いた時にはこいつらの存在は確認
されなかった。極秘に建造されたのだろう。しかもF—SPARがオリンパス・モンス
のものより大きくなっている。ただでさえ破滅的な威力のF—SPARを改良したと
なると…』

「その威力は計り知れないものとなる…」

『そこが問題なのだ、レイエス艦長。こちらの計算ではあの3隻が同時にジュネーブに
押し寄せた場合、AATISを全力稼働させたとしても敵を無力化する前にF—SPA
Rの攻撃を受けるだろう、とのことだ』

「オリンパスが1隻ならうまくいく。2隻ならまだなんとかなる。3隻はきつい。

「作戦を練り直すしかないな…」

『…いや、今思いついた別の作戦がある』

「と言おうと？」

カーク艦長の作戦はこうだ。基本的には俺の作戦で動く。ただしライアの移送には転送装置を使用する。移送時にSDFからの妨害を受ける訳にはいかない。そして作戦開始直前にデイスカバリーは火星に飛んで3隻のオリンパスのどれかを引き付ける。それと同時にライアからトランスポンダーを摘出。信号途絶を確認したコッチがオリンパス2隻で地球にやってきたところをAATISとトリビューションで破壊する。『今やデイスカバリーは火星人民最大の敵になっている。俺が行ったら必ず1隻は引き付けられるはずだ。肉汁滴るスペアリブを前によだれがとまらない犬みたいになるだろう』

「しかし改良型F—SPARの攻撃にデイスカバリーは耐えることは出来るのですか？」

『多分な。ノーマルのF—SPARの攻撃ではシールドが1枚吹っ飛びかけた。改良型がどれだけの威力なのかは攻撃されるまではわからない』

SDFの駆逐艦や艦載機からの攻撃を全く通さないシールドにそこまでのダメージを与えるとは…やはりF—SPARは恐ろしい兵器だ。

『あと確認なのですが、UNSAとしてはコッチを生け捕りにしたいですか？それとも

デッド・オア・ファイブ
生死を問わずですか？」

『…出来れば生け捕りにして裁判にかけてやりたい。ジュネーブのツケを払ってもらわねばならないからな。しかし無理にとは言わない。出来なければ問答無用で排除で構わない』

一体どれだけの民間人、軍人が命を失っただろうか。未だにジュネーブでは街のあちこちで撃墜された艦艇が燃えている。犠牲者の集計すらままならない状態だ。コッチとSDFは許されない事をした。その代償はきちんとは払ってもらおう。

『わかりました。レインズ艦隊長、この作戦を行うにあたり2つ程お願いしたい事があります』

『何かね？』

『まず全てのAATISの安全点検を。ひよつとしたらSDFのスパイ達が既にAATISに爆発物を仕掛けている可能性があります』

『それはまずいな。実は火星から回収したデータを元にSDFのスパイ摘発及びセーフハウス襲撃を行った。一番大きなセーフハウスには1ヶ月の間歩兵1個中隊が全力で戦えるだけの武器弾薬、それにどうやったから分からないがSDFのAPCまで隠してあった。UNSA本部にもスパイが1ダース以上潜入していたのは痛恨の極みだよ。最終的に作戦は成功したが、セーフハウスから大量の爆発物が行方不明になっていた。

どこかに輸送されたか、あるいは既に設置済みなのだろう』

「艦隊長、作戦を遅らせてでも点検を行うべきでは？」

『そうだな。AATISがなければこの作戦は成立しない。カーク艦長、もう一つは？』

『タイガースの修理を私にやらせて下さい。損傷報告を見る限りすぐに戦線復帰させる事が出来ます』

『分かった。タイガースにはこちらから知らせておこう』

『感謝します』

こうして作戦が正式に決まり動き始めた。これで全ての戦いに終止符を打つ。

まさかオリンパス・モンスに同型艦が2隻もいたとは思わなかったよ。ちよつとSD Fズルくない？そういうの良くないと思います。あ、俺もズルい？それは否定できん。

それはともかくタイガースの修理だ。ここでもポイントを使つて購入したアイテムを使う。オマー軍曹とタイガースが無事だったので更にポイントが貰えた。主要人物を助けるとドカンと貰えるらしく、今のポイント残高は150万ポイントだ。これで何を買ったかというと。

「テレレレッツテレー……これなんて名前だ？」

いやわからん。スタートレック・ピカードのシーズン1第9話と第10話で登場した機械なんだけど『想像力を使つて物を直す機械』としか言つてなかつたし。確か神経原子のフィールド・レプリケーターだっけ？まあいいや。これがあればどんな機械もすぐに直るつてわけよ。

「これで直せるんですか？」

俺が渡した謎機械をくるくる回しながらそう聞くのはタイガースの機関長。まあ疑うのも無理はない。こんなちつぽけな機械で直るんかいと。

「修理が完了して完璧な状態をイメージすれば直るはずだ。とにかくやってみてくれ」

「わかりました……」

フェラン艦長や他の乗組員が見守る中、機関長は目をつぶったまま謎機械を壊れた機関に近付ける。すると機械が動き出して青い光が機械と接触、壊れた部分がどんどん直り始める。

「嘘だろ…」

「なんだあれ、どうなってんだ？」

「信じられん…」

報告ではドックに入れて1ヶ月はかかると言われていた損傷がたったの10分で直ってしまった。

「これはすごいな…これで直せないものとかあるんですか？」

「生体組織の修復は出来ないな。基本的にはそれ以外全部直せるはずだ」

普通のレプリケーターは色々制限があるけどこれはないから都合がいいね。これがたったの10万ポイントってのはお買い得だったよ。

さて、最後の作戦だけドッチはどう動くのかな？ゲームで起きたライアの脱走&ATIISの破壊は転送装置の使用と安全確認で阻止できるはずだ。問題はドッチがどちらを優先するか。トランスポンダーを取り出した後、ゲーム同様ドッチが地球に来るのか？それとも火星に現れた俺と戦うのか？出来れば生け捕りにして裁判で死刑にさせたいから俺が引き止めた方が良くないかな。引き止め方法だが盛大に煽り散らかし

てコツチをブチ切れさせれば何とかなるかな？

「まーやってみないと何とも言えんな。明日が楽しみだ」

9：最後の作戦

ついに作戦の日が来た。AATISの点検をしたところ、やはり爆発物がしこたま設置してあったようだ。しかもライアの輸送に使うはずだった高速道路にも大量の爆発物が設置されていた。ゲームと同じだね。UNSAの爆発物処理班が徹夜で取り除いたんだとか。お疲れ様です。リトリビューションとタイガースは地球大気圏内にて待機している。ジュネーブ郊外の空軍基地にもジャツカルが待機しており、SDFが攻めてきたらすぐに駆けつける事になっている。これなら勝てるでしょ。

『これが最後の戦いになるだろう。通信回線は常時接続状態を維持。レイエス艦長、フェラン艦長、カーク艦長、全員の幸運を祈る』

「了解です、艦隊長。火星を派手に荒らしてきますよ」

よし、それでは行きますか。ポイント使ってコッチを生け捕りにする方法も考えたしな。

「データ、火星に行こう。これで終わらせるぞ」

「了解しました、艦隊長」

まさに壮観という言葉がぴったりだ。タルシス造船所所長と副官はコマンドセンターから艦隊を眺めながらそう思っていた。予定よりも早くオリンパス・モンズ級超大型空母の2番艦と3番艦が配備されたのだ。コッチ艦隊長率いる第8軌道艦隊には2番艦パヴオニスが、所長が兼任している火星宙域防衛艦隊には3番艦アンセリスが配備され、既に出撃準備は完了している。

「オリンパス級が3隻揃うのをこの目で見る事が出来るとは思っていなかったよ」
「私もです。しかしこれで我々の勝利は確実なものとなりましたね」

「その通りだな。オリンパスの修理も完了したからコッチ艦隊長はいつでも地球を攻撃

できる」

デイスカバリーとタイガースに逃げられてエンジンを片方やられたコッチは、とにかく怒りを沈めて分析に専念した。スーパースローモーションで戦闘映像を再生したところ、デイスカバリーの船体表面にシールドのようなものがある事を確認した。更にF—SPARが直撃した時の映像ではそのシールドに大きなヒビが入っていた。つまりF—SPARを何回か当てればシールドが消失してデイスカバリーを沈める事が出来る。

「それにあれも届いたしな」

「そうですね。これも艦隊長のお陰です」

タルシス造船所には防衛用の対空ミサイルと対空砲、更にスケルター隊2個小隊が駐留している。そこに新たに設置されたのが小型のF—SPARと言える試作エネルギー対空砲、F—SPAR AAだ。F—SPARの技術を歩兵兵器に転用したのがF—SPAR Torchだが、これは拠点防衛用に開発されたものだ。威力は通常のF—SPARの半分もないが、速射性は極めて高く3秒に1回のペースで射撃が可能となっている。この兵器が造船所の8カ所に設置された。エネルギーは軌道エレベーター経由で地上から送られるので敵が沈むまで撃ち続ける事ができるのだ。「しかし問題はデイスカバリーに命中させる事が出来るかという点ですね」

「それはそうだ。一瞬で違う場所にジャンプするからなあいつは。なんかズルい」

「いきなり飛んできて滅茶苦茶にしてすぐ逃げるといふのはセコいですよね」

「全くだ。あんな風にいきなり来られても困るんだよな」

そう言いながら所長は窓の外にいるデイスカバリーを指差す。

「本当ですよ全く。もう少し空気を読んで…えっ?」

「はい?」

2人は窓の外をよく見る。どう見てもデイスカバリーです。本当にありがとうございますと言いました。

「敵襲だ!総員戦闘配置!!」

「また来やがった!スケルター隊を出せ!」

「F—S P A R A Aを起動!チャージ中です!」

「コッチ艦隊長へ知らせろ!」

「何!?!」

コッチは報告を受けて造船所に目を向ける。確かにデイスカバリーがいた。

「絶対に逃がすな!艦隊の全火力を集中して奴を…」

「艦隊長!ライア中佐のトランスポンダー信号が途絶えました!」

「何だと!？」

あの信号が途絶えたという事は、地球に潜入させていたスパイ達がライアを奪還してAATISも破壊された事を意味する。今こそ地球に侵攻しUNSA本部を破壊出来るはずだ。

(だがこのままデイスカバリーを放置する訳にはいかん。どちらを優先する? : 地球が最優先だがデイスカバリーは放置できんな)

「パヴォニスとアンセリスは地球へ急行しUNSA本部を瓦礫の山にしてやれ。私はここに残りデイスカバリーを破壊する!」

「了解です!」

「戦闘可能な全艦艇及び艦載機はデイスカバリーを攻撃せよ!ここを奴の墓場にしてやれ!」

また来ました火星。やっぱオリンパスが3隻もいると圧迫感半端ないな。

「艦長、造船所の各所にF—SPARを内蔵したと思われる砲塔が複数確認できます」
「マジかよ、あいつらあれを量産して造船所に取り付けたのか」

それはアカン。とにかくジャンプしまくって攻撃を受けないようにしないとね。その間にオリンパス2隻がジャンプしていった。でもコッチが乗るオリンパス・モンズはそのまま。やっぱりこつちに残ったか。

「こちらデイスカバリー。オリンパス級2隻が地球へジャンプした。コッチは火星に残っている。AATISで風通りを良くしてやってくれ」

『こちらトリビューション、了解です。そちらもコッチをボコボコにしてやって下さい』

「もちろんだ。データ、光子魚雷の制限を解除。自由射撃を許可する。だが量子魚雷は使っちゃ駄目だぞ。あと造船所本体は攻撃するな」

「了解しました、艦長」

そこからはもう一方的な戦いとなった。こちらは好きな所に一瞬でジャンプ出来るのに対し、SDFはそれが出来ないから仕方ないね。オリンパスや造船所からF—SPARが飛んで来るけど全然当たらない。造船所の小型F—SPARの攻撃はそこまで強くないけどすぐに次のビームが飛んでくるから、威力を落として速射性を上げたんだろうな。

「7時方向から駆逐艦5隻が急速接近中！敵艦載機がミサイルを発射！」

「敵駆逐艦隊に光子魚雷を連続発射。艦載機はフェイザーで薙ぎ払え。ミサイルは放置で構わん」

接近する光子魚雷を迎撃しようと敵駆逐艦が対空砲で弾幕を張る。しかし健闘むなくしく魚雷は命中し、駆逐艦は蒸発してしまった。敵艦載機もフェイザーの攻撃で次々と火の玉と化した。あのスケルター、かつこいいよな。ジャツカルも好きなんだけど前進翼のスケルターに惹かれるんだよね。

「オリンパスがF—SPARをチャージ中です！」

「F—SPARの攻撃を受けた直後にオリンパスの真上にジャンプ。例のミサイルを発射して無力化する」

「了解です」

他の攻撃を受けながらF—SPARが命中した結果、ついにシールドが1枚吹っ飛んだ。しかし2枚目のシールドがあるから安心。

「ジャンプ完了、オリンパスは正面です！」

「よし！イオン・ミサイル連続発射！」

俺がポイントを使って買ったのはイオン・ミサイル。Star Wars：スコードロンに出てくる兵器でスターファイターに搭載されるミサイル兵器の一種である。イ

オン・ミサイルは敵のスターファイターを無力化させたり、主力艦のサブシステムを不能にすることができる。これをオリンパス目掛けて大量に撃ち込んでやった。するとF—SPARはもちろん対空砲等が次々と動かなくなり、オリンパスの攻撃能力は完全に喪失した。

「オリンパス、沈黙しました!」

「データ、あいつが動けるようになるまでどれぐらいかかると思う?」

「腕のいいダメコン要員がいたとしてもあのサイズの船ですから、どんなに頑張っても20分は動けないでしょう」

このままオリンパスに乗り込んでコッチを捕まえて地球に帰るのもありだが…

「艦長、次はどうするんですか?造船所はまだ無傷ですから破壊すべきでは?」

「造船所はちよつと考えがあるから放置でいい。それより軌道上の敵艦艇及び艦載機はほとんど破壊したが敵はまだ残っている。あそこに」

そう言つて俺は火星を指さした。

「これより火星大気圏内に降下してSDFの軍事施設を攻撃する。目標は軌道エレベーター周辺の造船所や航空基地、制限時間は20分だ。なお光子魚雷は威力が大きすぎるから使用禁止。フェイザーのみで攻撃する」

「了解しました、艦長」

「コール少佐、君のモニターで敵施設内にいる非武装の民間人をスキャンする事ができる。1人でも民間人がいる施設は攻撃対象から外してくれ。SDFみたいに民間人を殺すような事はしたくないからな」

「分かりました！」

「ヘルナンデス大尉は軌道上に来るであろう敵増援の索敵を頼む。既に土星方面へ救難信号を送っているはずだ。ヒロセ大尉はオリンパス・モンスの監視を。再起動したら知らせてくれ。シンクレア大尉は敵通信網の妨害を。通信施設や目につくアンテナ全てにイオン・ミサイルを撃ち込んでやれ」

「了解です！」

火星に住む人々は皆恐怖のどん底にいた。民間人はパニック状態に陥っていた上、軍人もまた怯えていた。なぜこんな事になった、どうしてこうなった、と誰もが思っていた。

地球との戦争開始に皆が喜んでおり、最初の奇襲はうまくいったものの、それ以降はほとんど負けている。しかも数日前に火星軌道上で艦隊が敗北した上、2つの衛星も破壊された。だが今回こそは大丈夫だと人々は信じていた。あのオリンパス級が3隻もいるなら問題はまず、と。しかし現実是非情だった。軌道上には友軍艦や航空機の残骸が浮かび、オリンパス・モンスは全く動かなくなってしまった。更に見たことがない船が降りてきて、地上軍事施設への攻撃が始まった。

火星が誇る対空防衛システムが全火力を敵艦に叩き込む。航空基地から出撃した戦闘機から次々とミサイルが発射される。しかし敵艦は全くの無傷であった。敵艦からの攻撃は凄まじく、対空砲や対空ミサイルは燃え盛る鉄と何かのオブジェとなり、戦闘機は残骸となって地上に落下、航空基地は石器時代レベルまで破壊され、造船所は隕石が落ちたようなクレーターと化した。

それを見ていた人々は一斉に都市部から逃げ始めた。上流階級の連中はシャトルで、そうでない者はローバー等で郊外へ逃げ始めた。郊外には大規模なシェルターが備わっており、都市部に住む全員が収容可能となっている。あの敵艦は民間人には攻撃をしてくれなかったため、全ての民間人が避難する事が出来た。負傷者はいたものの死者は出なかった。

ある人は言う、あの船は死神か悪魔だと。全員を殺すまで攻撃を止めないだろうと。

だが他の人は、地球でやった仕返しを受けているだけだ、と言う。大量の民間人を殺した、その報復だ。

20分。たったそれだけの時間で7箇所の通信基地、3箇所の航空基地、2箇所の造船所、5箇所の弾薬庫、2箇所の発電所が完膚なきまでに破壊された。後の歴史で『地獄の20分』と呼ばれる一方的な戦闘であった。

まあこんなもんかな。民間人の犠牲者も出ていないし、軍事施設はだいたいふっ飛ばしたし。SDFは当分の間動けないだろう。ヨシッ！

「艦長、オリンピック・モンスが動き出しました！」

「まずい：敵の増援が出現しました！駆逐艦7隻、空母が2隻！」

「了解だ。増援を片付ける前にまずはコッチを捕まえる」

「捕まえるといつてもどうやって？我々だけで乗り込むんですか？」

「いやいやそれはしないよ。レイエス艦長やオマー軍曹みたいな戦闘スキルは持ってい

ないからね。ピユツと行つてパツと捕まえてサツと戻つてくるさ」

ポイントで精神と時の部屋みたいなのが買えないかな？それで特訓すれば俺も特殊部隊みたいな戦闘スキルが身につくんだが…もしくは超人血清とか。

「とりあえずオリンパスの真横にジャンプしてくれ。ジャンプ後に艦橋目掛けてイオン・ミサイルを発射。フェイザーでF—SPARを破壊しろ」

「了解です」

折角修理したのにまた無力化される可愛そうなオリンパスであった、まる。しかもF—SPARもなくなっちゃったね。

「じゃあ行つてくるわ」

念の為に用意した宇宙服を着て転送装置でオリンパスの艦橋にジャンプ。するとなかなか悲惨な事になっていた。まず生命維持装置が停止しているから無重力状態。んでロボット達はイオン・ミサイルのせいで機能停止。そしてコッチも空中でぐるぐる回っていた。

「えっ生きてる?」

「な、なんだお前は!？」

「生きてんじゃん良かった。とりま寝ててね」

挨拶代わりにハンド・フェイザーでコッチを麻痺らせ、一緒にディスクカバリーに戻る。

「ヒロセ大尉、ヘルナンデス大尉、こいつをちよつと格納庫まで運んでくれ。真ん中に拘束衣があるからそれ着させておいて」

「了解です」

ちなみに拘束衣は映画『羊たちの沈黙』でハンニバル・レクターが移送される際に装着されたやつだ。コッチを捕まえるならこれしかないと思ってカタログから買っていた。

「さてデータ、残りの敵を殲滅する。蹴散らしてやれ」

「了解です。蹂躪という言葉の意味を教えてくださいましょう」

5分後にはオリンパス・モンスと敵増援艦隊も宇宙の藻屑になり、残っているのは造船所だけとなった。これでSDFもおしまいだな。とりま報告入れておこう。

「こちらデイスカバリー。オリンパス・モンス、敵主力艦隊及び敵地上施設の破壊に成功。なおコッチ艦隊長の身柄を拘束した。お土産も手に入れたのでこれより地球に帰投する」

『こちらリトリビューション。こちらもオリンパス級2隻の撃沈に成功した。作戦は成功だ！』

『こちらトップキャット。よくやってくれた！我々の勝利だ！』

「よし、そろそろ地球に戻るとするか」

「造船所は何で攻撃しないんですか？あれが残ったままですと、SDFは再び軍拡を…」
「造船所本体は攻撃しないけど残すつもりはないよ。まずはこうする」

最大出力のフェイザーで造船所下部、正確に言うとは軌道エレベーターを攻撃する。この際注意しなければいけない点は、エレベーターの先端が都市部やシエルターの方向に倒れないようにすること。これで造船所は完全に宙ぶらりん状態に。ただこのままだと火星に向かって落下しておしまいになる。

「次にトラクタービームで造船所をこちらに引き寄せる」

タイガースを牽引するのは訳が違う。トラクタービームへ全エネルギーを注入して何とか火星重力圏から脱出する事ができた。なんか造船所の一番高い所に白旗が見えるけど気のせいだろう。

「最後にフックで掴んで準備完了！」

ケルベロスを運ぶ時に使ったでかいフックで造船所をつかむ。あとやることはもちろんわかってるよね？

「データ、地球に帰ろう。孢子ドライブ起動」

「了解です」

10：最後の作戦（地球サイド）

デイスカバリーからの報告を受けてレイエス達は気合を入れた。既にレイエスとソルター、他のSCARチームはジャッカルに搭乗し空中で待機しており、タイガースも全ての主砲とミサイルの準備を整えていた。またAATISもその巨大な砲を空に向けて侵入者に備えていた。

なおトランスポンダーを埋め込まれていたライアだが、一瞬でメデイカルホールに転移した時の顔が最高にウケた、とソルターは言っていた。摘出時の麻酔が効くまでずっと『何で：：どうして：：』と繰り返していたそう。まあ普通はそうなるな。

『アクチュアル、こちらトリビュション。大規模なSDF艦隊が接近中！報告と異なりオリンパス級2隻の他に複数の駆逐艦、空母、A-JAKを確認！』

この時は分からなかったのだが、地球侵攻時には土星宙域に展開していた全てのSDF艦艇が地球に集結するよう、事前にコッチが命令していたそう。

「了解だゲイター。全SATO部隊、こちらレイエス。自由射撃を許可する！攻撃開始！地球に來た事を後悔させてやれ！」

それはともかく敵艦隊は大混乱に陥った。事前に破壊されているはずのAATISが動いていたからだ。真つ先にAATISの犠牲になったのはオリンパス級2番艦のパヴォニスだった。スケルターを発艦させる間もなく、次々と巨大な砲弾が船体下部に突き刺さり甚大な被害を生み出した。SDF艦艇の中で最も強固な装甲を有しているオリンパス級だったが、残念ながらAATISの攻撃に耐えられる設計ではなかった。ジャンプ後僅か2分でパヴォニスは火を吹きながらレマン湖に墜落していった。

しかし黙ってやられるだけのSDFではない。3番艦アンセリスが指揮を引き継ぎ攻撃を開始した。搭載している30機のスケルター、更に空母からも次々とスケルターが発艦する。対するレイエス達は近隣の空軍基地からの援軍と共にジュネーブ上空でドッグファイトに突入した。

「フィーバー、7時方向からスケルター!」

『分かっている!これで:よし!敵機撃墜!』

「良い腕だ、相棒!」

『こちらタイガース!敵駆逐艦2隻を撃沈!だが後部主砲に被弾!』

「フェラン艦長、作戦通りAATISの近くで攻撃継続を!」

装甲が薄いタイガースは複数のAATIS付近を旋回しつつ攻撃する作戦になっていた。

『もちろんやってる！だが敵艦載機の攻撃が激しいんだ！援護を頼む！』

「了解！行くぞソルト！」

『了解だ、レイダー！』

タイガースの援護に向かうが敵の攻撃が激しい。今まで多くの敵エースパイロットを撃墜してきたが、今戦っている敵のエースも腕がいい。だがレイエスの方が空中戦の技量が上だった。しかもここは地球。レイエス達UNSAのホームグラウンドだ。絶対に負けられない戦いなのだ。

『全ステーション、オリンパス級が攻撃態勢。F—SPARをチャージしています！』
「まずい！全AATISは敵超大型空母に攻撃を集中しろ！」

AATISが砲弾を吐き出しアンセリスに命中する。艦首下部に次々と砲弾が命中した結果、突き上げられるように大きく上に艦首を向ける形となった。その数秒後、F—SPARが発射されたが誰もいない空に消えていった。

「2発目を撃たせるな！タイガース、集中砲火だ！」

『了解！全主砲、連続射撃！弾薬庫が空になるまで撃て！』

タイガースがアンセリスの左舷側から接近して速射砲による攻撃を行う。オリンパス級を破壊する為に用意した大口径徹甲弾が左舷を破壊し尽くした。互いの距離が1キロ以下での攻撃だった為、アンセリスの装甲で徹甲弾を防ぐ事は出来なかった。重要

区画に被害が出た為か、F—SPARへのエネルギー供給が途絶えた。

だがアンセリスからの反撃でタイガースも壊滅的な被害を受けた。右舷エンジンがカウリングごと木端微塵になり、艦底部にもミサイルが多数命中した結果、タイガースは空中に留まる事が出来なくなった。

『メーデー！メーデー！メーデー！タイガースは高度維持不能！推力喪失！これより不時着する！繰り返す、タイガースは不時着する！』

「なんてことだ……」

運が良い事にタイガースの操舵手は腕の良い人間だった。彼はジュネーブの街に墜落しそうになったタイガースをうまくコントロールし、ほとんど推力がない状況で船をレマン湖に不時着水させた上、バルトン公園付近の湖岸にうまく座礁させた。

『大丈夫だニック！あれなら被害も大きくないはずだ！』

「そうだな。急いで退艦すれば問題ない。流石だな、フェラン艦長」

しかしこれで貴重な戦闘艦が1隻失われてしまった。残るはリトリビューションのみ。SDFも本来の作戦である地上攻撃を放棄し、リトリビューションへの攻撃を開始した。レイエス達もリトリビューションを守るべく全力で戦うが、敵の数が上回っていた。船体各所から炎が吹き出し、ゲイターから悲鳴のような通信が入る。

『こちらリトリビューション！誘導システムダウン！ハンガーで火災発生！船体整合性

が50%を切りました！いつまでもつかわかりません！」

『ニック！このままではリトリビューションが！』

「分かっている！あれを使う時が来た：メタル1、火力支援を開始だ」

『メタル1、了解。派手に行きましょう』

リトリビューションを攻撃する敵駆逐艦の1隻が突然砲撃を受ける。機関部を破壊された駆逐艦はゆっくりと地面に向けて落ちていき、落下途中で数機のスケルターを巻き込みながら地面とぶつかり巨大な火の玉と化した。

SDF艦隊はレーダー上に新たな敵艦艇の姿を捉えた。だがそんなはずはない。UNSAの動ける船は不時着したタイガースとフルボッコにしているリトリビューションだけのはず。モンスターことデイスカバリーは火星で暴れている。ならこの船は？

敵の姿を見たSDFは驚愕した。その姿はどこからどう見てもSDFの空母だったからだ。しかし船体の右半分だけ塗装がUNSAカラーになっている。そしてその空母には他のSDF空母にはないある特徴があった。連装式の大型レールガンを両舷に1基ずつ備えている、極めて攻撃力が高い空母なのだ。こんな空母はSDFの艦隊では1隻しかない。

『おい、あの空母はまさか：ケルベロスか!?』

『ミランダのドックで吹っ飛んだはずじゃ…』

『だがあのレールガンはどうみてもケルベロスのものだ!』

『いつの間に拿捕されたんだ?!』

そしてその空母、ケルベロス改めヘラクレスの艦橋にいるのはエンハンスド・タクティカル・ヒューマノイドであるイーサンただ1人だった。

ヘラクレスの作戦投入はカークの作戦にはなかったが、レインズ艦隊長が極秘裏に投入を許可した。カークから空母を買ったUNSAは、構造解析と同時に乗組員の訓練を行っていた。しかし作戦には間に合いそうになかった為、空母としてではなくレールガンを備えた戦闘艦として運用する事になった。中途半端に塗装を半分しかしていないのはそれが理由だからだ。

火力を上げる為、レインズ艦隊長は思い切った行動に出る。普段なら艦載機を置く格納庫だが、今回置いているのは陸軍が運用する地上発射型大型対艦ミサイルの4連装発射機だった。両舷の格納庫内に発射機が10基ずつ設置されており、搜索評定リーダーや中継装置、指揮統制装置といったシステムはヘラクレスのFCSとリンクしている。本来は絶対にリンクしないのだが、イーサンが中継しているから出来る芸当だった。

空母改めミサイル搭載レールガン艦として、ヘラクレスはSDFの艦隊に突っ込んだ。リトリビューションですら直撃弾を受ければ撃沈は免れない威力を誇るレールガ

ン。当然駆逐艦やA-JAKでは全く歯が立たない。艦載機が攻撃するも対空砲火で撃墜される。極めて至近距離の為、タイガースに左舷とF-SPARをやられたアンセリスでさえ防ぐ事はできなかった。

そこに飛んでくるのはUNSA謹製の大型対艦ミサイル。40基のミサイルが一齐に発射され、アンセリスに襲いかかる。死にもぐるいで迎撃するがあまりにも時間がなかった。右舷の艦首から艦尾の間にまんべんなく命中し、右舷部分は完全に大破。そしてメインリアクターも破壊された事で高度はどんどん落ちていく。そしてとどめを刺したのがAATISだった。アンセリスの船体は空中で崩壊し、残骸がレマン湖や街に降り注いだ。

『敵艦撃沈！SDF艦隊は全滅した！我々の勝利だ！』

AATISタワーからの通信で全員が雄叫びを上げた。レイエスも、ソルターも、レインズ艦隊長も、誰もが喜んでいた。フェラン艦隊長も無事にタイガースから脱出したとの報告が上がっていた。うまく不時着したおかげで重症者こそ出たものの死者はゼロだそうだった。そこにデイスカバリーから通信が入る。

『こちらデイスカバリー。オリンパス・モンス、敵主力艦隊及び敵地上施設の破壊に成功。なおコッチ艦隊長の身柄を拘束した。お土産も手に入れたのでこれより地球に帰

投する』

なんとコッチを生け捕りにしたと言う。これで奴を裁判にかけてジュネーブや他の惑星、衛星で犯した罪を償ってもらおう。

「全SCARへ、こちらレイエス。リトリビューションに戻ろう。ゲイター、まだ飛んでいるか？」

『かろうじてなんとか、というところですよ。最低でも半年はドック入り間違いなしです』
「戦いは終わった。しばらく有給でも取って一緒にバイクでも乗ろう」

『それはいいな。みんなでツーリングに行こう』

リトリビューションに着艦後、レイエスはソルター、イーサン、オマー軍曹と一緒にレイブンでUNSA本部に移動した。その途中でイーサンが報告する。

「艦長、デイスカバリーが軌道上に出現しました」

「そうか、無事に帰って来たんだな」

「ただ…どでかいお土産を持って来たみたいです」

「どでかいお土産？なんだそりゃ？…おおう」

オマーがそう言いながらドアから上を見上げると、彼はフリーズしてしまった。

「どうした軍曹？」

「…イーサン、あれは…お土産、っていう表現でいいのか？」

「少なくとも私にはちよつと大きすぎかと。艦長にはぴつたりだと思いますけどね」

見上げるとデイスカバリーの姿が目に入った。そしてその下には。

「…あれSDFの造船所か？」

「みたい、だな…」

「レイエスよりカーク艦長へ。今回は大きな買い物をしたみたいですね？」

『そうなんだよ。この造船所はすごいんだ。なんとF—SPARを小型にして速射性を上げた試作エネルギー対空砲が付いてる造船所なんだよ。おかげでシールドが2枚抜かれたよ。これを地球と月の中間あたりにでも置いたらどうかと思つてね』

F—SPARの対空砲？えげつないものを作るな、SDFの連中は…

『とにかくこいつは適当なところに、といつても地球に落ちないようにするけど一旦置いておく。コッチを連れて地球に降りなければな。どこに行けばいいかな？』

「それではUNSA本部のヘリポートで落ち合いましょう」

『了解した。カーク、アウト』

これで長いようで短い戦争が終わった。

11：後片付け

いやーSDFは強敵でしたね（棒）。これから地球は戦災復興と艦隊再建で大忙しでしょう。どこまで付き合うかは気分次第でいこうかな。

まずパクってきた造船所だけど、とりあえず高軌道に置いておくことにした。中にいた人たちはハッキングしたロボットを使って降伏させたし、建造途中や修理中だったSDFの船は動かさないようにしてある。既にUNSAはレイブんに部隊と技術者を載せて向かっているらしい。

「よし、じゃあ地球に降りようか」

「そうですね。こいつとは一緒にいたくないので早く行きたいです」

コール少佐は蔑んだ目でコッチを睨みつける。Mな人が見たらゾクゾクだろうね。なおコッチはトイレと食事時以外は例の拘束衣を着させている。捕虜の対応がーとか権利がーとかうるさかったので、

『あのな、この船は惑星連邦宇宙艦隊に所属している。だからUNSAのルールは一切適用されない。そもそも惑星連邦には捕虜の項目がないんだ（大嘘）。俺からしたらお前は大勢の罪なき民間人を虐殺したクソツタレ集団のボスだ。本来なら問答無用でそ

の憎たらしい顔に銃弾ぶち込んで宇宙空間に放り出すところだが、銃弾がもつたいないからUNSAに引き渡す事にした』

『何だ?!この私を地球人共の見せしめにすると言うのか!』

『犯罪者を裁判にかけるのは普通だろう?おたくの星はどうなっているか知らんけどな。知つての通りUNSAにはジュネーブ条約第3条があるから、向こうに行つたら少しは待遇が改善するだろう。だがそれまでは俺の管理下にある。グダグダ言わずにそれを着ている。あとうるさいからこれも付けとけ』

『んぐっ!!』

と言つてボールギャグを噛ませておいた。

「いい年こいたおっさんがボールギャグと拘束衣つてなかなかキモいし酷い絵面ですね…」

シンクレア大尉があからさまに嫌そうな顔をしている。ヒロセ大尉とヘルナンデス大尉も笑いをこらえながら目を背けている。うん、気持ちはわかるよ。こんな見たら普通に笑うし。

「みんな転送装置と武器は大丈夫だね?」

「大丈夫です」

転送装置はコムバッジを、武器はUNSAの標準装備を用意した。コール少佐には拳

銃のKendall 44を、シンクレア大尉にはショットガンのReaverを、ヒロセ大尉とヘルナンデス大尉にはアサルトライフルのNV4を渡してある。リミッターを解除したレプリケーターでさつき作った出来たてホヤホヤの銃だ。俺はタイプ2ハンド・フェイザーをホルスターに入れておいた。まあ使わんだろ。

「それじゃUNSA本部へリポートに転送！」

へりポートに到着してまず思ったのは空気が違う事だな。宇宙船の中とは違って色々な匂いがある。自然の匂いっていうかなんというか。でも一番強く感じるのは焦げ臭さだ。周りを見ても街はもちろん墜落したUNSAやSDFの船があちこちで燃えてるからなあ。それはさておきニコニコのレインズ艦隊長と握手タイム。

「レインズ艦隊長、直接お会いするのは初めてですね。デイスカバリー艦長のカークです」

「初めまして、カーク艦長。地球を救ってくれて感謝する。君とデイスカバリーがいなければ我々が勝利することはなかっただろう」

「そんな事はないですよ。レイエス艦長や優秀な部下の皆さんがいたからこそ勝てたんです。私一人に出来る事は限られていますから。それでこいつが今一番ホットな戦争犯罪人です」

そうやって俺は拘束コッチを指差す。コッチを見たレインズ艦隊長が若干引いてる。その後ろで付添の兵士達が笑いそうになるのを必死に我慢しているのがウケる。

「…拘束衣は良いとして、何故口にボールギャグが？」

あ、それ聞いちゃう？後ろの兵士さん顔やばいっすよ？

「はつきり言うとうるさかったんですよこいつ。死は恥ではないだの、火星よ永遠なれだの…なのでお口チャックをしておきました」

コッチがむーむー唸ってるけど無視しとこ。

「なるほど、確かに必要みたいだな。中尉、この愚かな犯罪者を連れて行け」
「はっ！」

MPの腕章を付けた兵士達が拘束コッチを連れて行った。裁判できっちり裁かれて欲しいね。

「立ち話はこれくらいにしよう。もうすぐレイエス艦長やソルター少佐達が来る。一緒に食事を取ろうと思っただけ」

「地球を守った英雄達に会えるとは光栄です」

「噂をすれば来たようだ。あのレイブンだ」

隣のヘリポートに着陸するレイブン。このゲーム内に登場する兵器で個人的に一番好きなのはレイブンなんだよね。

会議室に移動してみんなで飯を食いながら話を進める。ハンバーガーうめえ。なおコッチが連れて行かれる姿を見たレイエス達は爆笑していた。

「以上が火星での作戦内容になります。軌道エレベーター周辺約200キロ圏内に存在した軍事施設は破壊してきたので、しばらくSDFは何も出来ないはず。動ける船は非武装の輸送船ぐらいでしょうが、引き続き警戒を続けます」

コール少佐がモニターを使って説明をしていた。

「諸君、戦いは終わった。ここから先は政治家が動く内容だ。今の連合の外務担当はSATO出身の元軍人だからSDFとの交渉は問題ないだろう。だが、最後にやらねばならん事がある」

「と言いますと?」

レインズ艦隊長はモニターに2つの衛星を映した。

「まずエウロパ。今回の戦いの始まりの地であり、兵器工場の職員達とSCRAチーム7が眠っている地でもある。次にチタニア。かつてSDFに虐殺された入植者達と護衛部隊の遺体が今も凍ったまま眠っている。どちらも回収せねばならん」

「そうですね…彼らを故郷に戻さなければ」

「しかし艦隊長、現在稼働状態にある大型艦はヘラクレスのみです」

イーサンが言うにはタイガースはエンジンが吹っ飛びレマン湖に不時着、リトリビューションは数々の戦闘で船体のあちこちにダメージが蓄積し、おまけにドロップリアクターにまで損傷が出たせいで、この先半年はドック入り確実なんだとか。俺が万引きしてきた空母ヘラクレスが役に立って良かったよ。

「その通りだ。そこでレイエス艦長、貴官をリトリビューションの臨時艦長職から解き、ヘラクレスの臨時艦長に命じる。亡くなった人々を故郷へ帰すカムホームオプスを実行せよ。出撃は明朝だ。イーサンはレイエス艦長の補佐として一緒に行け」

「了解しました、艦隊長」

お休まないのねー。働かせまくりやん。軍隊もなかなかブラックやのう。そしたらレインズ艦隊長をこっちに話を振ってきた。

「カーク艦長、以前話していた報酬についてなのだが、最初は政治家達がいい顔をしなかったが戦果で黙らせた。単刀直入に何が欲しいか言って欲しい。可能な限り答えるよ」

マジすか。まあ海軍と海兵隊いなかったら負けてるし。なら…

「では3つほど。1つはSCARチームで使用している宇宙服が欲しいです。恥ずかしながら我が連邦の宇宙服は探査任務に特化しているくせに壊れやすいという欠点があります。あとデザインがダサイんです」

欠点は嘘。単純にあの宇宙服かつこいいから欲しいだけ。エウロパへの降下シーンが凄すぎて最高のプロローグだと思ったよ。

「わかった。他は？」

「レイブんとジャツカルを頂けたらと」

「…実物を？」

「ええ。中古でも構わないので欲しいです」

レイブンはガチで欲しい。あのデザイン、性能、全てが100点満点。HALOに出てくるペリカンに似ている点も素晴らしい。ジャツカルもかつこいいんだよ。本当はスケルターが欲しいけどUNSAの人を前に言えん話だよ。まあ貰ったら色々弄くるけど。

「わかった、全て準備しておこう。1週間程かかるがよろしいか？」

「問題ありません。ありがとうございます」

飯と話し合いを終えてデイスカバリーに戻ってきた訳だが。でも1週間何しようか。ちよつと日本見てきますって言える雰囲気ではなかったからこつそり行けばいいか。あと色々調べ物でもしようかね。

まずはSDFの様子でも見よう。火星地表攻撃をした時に超小型の探査機を格納庫

からこつそりバラ撒いておいた。見た目はハエつぽいドローンだけど、狭いところに潜り込んで電子機器に引っ付き情報を盗める。いい買い物したよ。

ちなみに今のポイント残高は驚異の5000万ポイント。リトリビューションは生き残っているし、レインズ艦隊長も無事、コッチは生け捕りにした上、火星は滅茶苦茶。ポイントが大量で嬉しいです。何を買うか迷っちゃうね。

「さて火星はどないなつとんねーんって、ええ…」

おやおやこれは…まさかの民衆が評議会相手にデモ起こしてる。絶対的な軍事主義を持つて自由や平和を皮肉ってきた癖に、いざ全面戦争に突入したら負けちゃったんだもん。艦隊は文字通り全滅するわ、地上の軍事施設は軒並み瓦礫の山になるわ、みんなのカリスマであるコッチは捕まるわ、そりやみんな怒るもの無理はないな。でもデモ集団をC12バトルタンクで排除（物理）するのはやり過ぎだと思えます…

情報を見るとやはり艦隊の再建が最優先みたいだな。でも軌道造船所と主要な地上造船所は破壊したし、付近の資源倉庫等も木端微塵にしたから大変みたいだ。コッチの命令で軌道エレベーター周辺の造船所に資源を集中させていたのが裏目に出たな。まともに動く兵器がスケルターとウォーデンが少し。地上戦力はあるけど輸送手段がウォーデンしかない。造船所も資源も兵器もないとなると…あれ、詰んでね？

プロパガンダ部隊や秘密警察が全力で頑張っているけど評議会はどうすんのかね。

大人しくUNSAに降伏するとは思えない。でも逃げるところもないしな。火星に引きこもって徹底抗戦…いや負けるっしょ。軌道上から砲弾やミサイルバラ撒いたらおしまいだし。ここは評議会が少しでも理性的な対応をしてくれる事を祈るとしよう。

「艦長、ドロップリアクターによるジャンプの分析が完了しました」

「ありがとう、データ」

ゲームしてても思ったけど、やっぱあのジャンプはかなーり危険なものだな。うまくいかないかと船体が耐えきれなくなつて分解する可能性がある。しかもジャンプすると放射線まで出す。そういうリスクがあるから、この世界の人類は太陽系の外に進出できていないんだろう。

土星から水星までリトリビューションは20秒かからなかったから、SDFとの戦いが完全に終了したら太陽系外の探索を始めるのかもな。潜在的に居住可能な太陽系外惑星とか見つけければ良いんだが。地球類似性指標（ESI）の値が最も高く、かつ地球に一番近いのがティーガーデン星bだったかな。ちよつと覗いてくるのもありだな。

「艦長、通信が入っています」

「分かった、繋いでくれ」

てつきりレインズ艦隊長かと思つたら見覚えのある白髪のおっさん。神やん。

『おひさ』

「お、おひさ。てか何の用？」

『この世界での役割、終わり。次の世界、行く』

「えっ」

普通転生つて1回やったらずっとその世界で死ぬまで住むんじゃないの？

『原作変えて、みんなハッピー。俺も、ハッピー。でもまだある、変えるべき世界。だから、お前、行く』

「ちなみに次の世界はどんなやつなの？」

『言えない。行つてから、お楽しみ』

「なんでやねん。で、いつ行くんだ？」

『データに、方法、教えとく。じゃ』

切れたし。てかまた別の世界行くのかよ。

「データ、どうやるかわかった？」

「はい、艦長。まずは通常ワープを実行し、ワープ中に孢子ドライブを起動すれば別世界へ行けるみたいです」

「わかった。UNSAから報酬を貰ったら行く事にしよう」

「了解しました」

次どんな世界に行くんだよ…あまりにも技術レベルに差があるとマジでえげつない事になっちまうで。進撃の巨人の世界で巨人がいきなりフェイザーで蒸発したり、マーレが光子魚雷で街ごと吹っ飛ぶの見たくないでしょ。

「ちよつとはメカメカしい世界がいいなあ…」

12：旅立ち

あれから1週間。ついに今日レインズ艦隊長から報酬を貰える事になった。貰ったらそのまま次の世界に旅立つ事になっている。もちろんそんな事を言っても信じてもらえないだろうから嘘の理由を伝える事にした。

『地球から見てさそり座の方向に約500光年離れた位置にあるさそり座 ν 星。7つの恒星から成る七重連星系であるこの星だが、観測データによると時空に歪みがある事が判明した。ここを無理やり通過すれば元の世界に帰れる。なお時空の歪みは通過後に消えるから問題はない』

という説明をした。さそり座 ν 星は存在するけど時空の歪みとかは嘘。でもUNSAにそれを知る方法はない。むしろ500光年も離れた場所に行ける事に驚いていたな。

あと火星だが評議会が盛大にやらかした。艦隊再建に伴い色々で大規模な政策変更を実施したのだがこれがひどいものだった。元々SDFは全ての男性に12歳から15年間の兵役を義務付けていたが、徴兵年齢の下限を大幅に下げてなんと6歳から生涯

兵役義務というルールに変えちまった。しかも男女問わず。12歳から兵役ってルールもかなりぶつ飛んでるのに、それを6歳に下げるとって頭おかしいだろ。そんな小さい子供に何が出来るんだ？

他には不足気味の各種物資（食料品・医療品を含める）の民間での販売を禁止し、評議会が定めた平等なルール（上流階級優先）に則り配給制となった。ついでに今までの労働基準法が廃止となって、1日の労働時間が15時間にされたそう。最後のが地味にえげつない。

ただでさえ負け続けの軍や評議会に不満が溜まっている火星市民。そこにこんなイカれたルールを押し付けられた市民達の怒りが爆発した。再び大規模なデモが火星の至る所で発生したが、例によって評議会は排除を命令。C12バトルタンクやC6ロボット達が銃を構えてデモの中止を命じるも市民達は応じない。まあ当然だわな。

するとロボット達は一齐に射撃を開始、市民達は悲鳴を上げながらバタバタと倒れていった。逃げ惑う市民達の背中に容赦なく発泡を繰り返すロボット達。市民達が逃げ込んだ建物を吹き飛ばすバトルタンク。いやマジでドン引き。エクストリームドン引きだよ。映像を見せたけどレインス艦隊長達も顔がこわばっていたし。火星版血の日曜日事件じゃねえかよ。

その惨劇を知ったSDF地上軍の大多数が市民側について評議会への攻撃を始めた。

火星内戦の発生である。秘密警察やプロパガンダ部隊が反撃するも、彼らは純粹な戦闘部隊ではないので壊滅するまでそう時間はかからなかった。んで評議会は輸送船で逃走を図るもスケルターがエンジンで蜂の巣にして撃墜。生き残った評議会メンバーを拘束した地上軍の責任者がUNSAに連絡してきたのが3日前の事だった。

民間人で構成された火星臨時政府はUNSAに対して、SDF高等評議会メンバーの生き残りを引き渡す用意がある事や、即時の停戦要請、終戦に向けた交渉の要請を連絡してきた。UNSAは二つ返事でこれを受諾。カムホームオプスから帰還したばかりのヘラクレスは、回収した遺体を降ろした後、外交官を乗せて火星にジャンプ。昨日交渉がまとまり戦争は終わった。ヘラクレス艦上にて調印された降伏文書の内容は以下の通り。

・その所在地に関わらず、SDF軍全軍及びSDF高等評議会直属の全戦闘部隊へ無条件降伏を布告し、全ての指揮官はこの布告に従う事。

・SDF軍と火星市民へ敵対行為の中止を命じ、艦艇・航空機、軍用非軍用を問わず財産の毀損を防ぎ、SATO軍総司令部及びその指示に基づき火星臨時政府が下す要求・命令に従わせる事。

・火星臨時政府に所属する公務員とSDF軍の職員は、SDF降伏の為にSATO軍総司令部が実施・発する命令・布告・その他指示に従う事。なお非戦闘任務は引き続き

実施する事。

・戦時中及び戦争以前にSDF軍及びSDF高等評議会が太陽系内にて実行したSATO軍所属軍人・UNSA所属民間人の虐殺行為について、火星臨時政府は関与した人物及び関係資料を速やかにSATO軍に引き渡す事。

・UNSAは上記の戦争犯罪についての裁判を1年以内に実施する事。

・火星臨時政府とSDF軍は、捕虜として抑留しているSATO軍所属軍人及びUNSA所属民間人を即時解放し、必要な給養を受けさせる事。

(6つ目の項目については、SDF軍が軍人・民間人問わず捕虜を取らずその場で処刑するよう評議会及び軍司令部から命令を受けていた事が判明。実際にSDF施設に捕虜がない事も確認された為、降伏文書から削除された)

引き渡された評議会メンバーや虐殺に関わった人間、当時の命令書等の関係資料を回収したUNSAは裁判の準備を大急ぎでしているんだと。だいぶ年寄りの被告もいるみたいだから死ぬ前に裁判したいってのもあるんだろうね。

地球に帰還したレイエスはSATOから勲章が授与された。アメリカ軍で言うところの名誉勲章レベルのやつらしい。ソルターやオマー軍曹も同じ勲章を貰ってた。おまけにリトリビューション所属の海兵隊員は全員1階級昇進となった。

レインズ艦隊長は現在ドック入りのリトリビューションの正式な艦長としてレイエ

スの名を推薦した。更にリトリビューションとヘラクレスはSCARチーム専属艦艇として運用されるようになるらしい。ただでさえ船いらないのによく海軍が反対しなかったなと思うていたら、俺が盗んできた造船所を使って艦隊再建を進めるみたい。何でも海軍はアドミラル級を一回り大きくした空母の建造計画を進めているそうだし。ちなみにアドミラル級はリトリビューションの艦級の事ね。

そのリトリビューションだが、ヘラクレスの設計思想に習って大型レールガンを装備する事になった。元々近接防御火器や対空ミサイルしか搭載していなかったけど、オリンパス・モンスの登場でもっと火力載せないといかん、みたいな考えになったそうなの。

あと昨日の夜レイエス達に誘われて飲みに行った。ブラック企業で社畜をしていた俺の肝臓はアルコールに強くなっていたので、結構な数のボトルを開けた。ビール、ウオツカ、バーボンなどなど…酒はやっぱうまいね。てかレイエス酒強すぎだろ…カシマはぶっ倒れていたぞ。

そして今、俺はデイスカバリーの格納庫でレインズ艦隊長達とお別れの挨拶をしていた。新品ピカピカのジャッカルとレイブンは隣に置いてある。あとで試運転しないからね。

「本当に感謝しているよ、カーク艦長。地球を代表して礼を言わせてくれ」
「こちらこそお役に立てて光栄です、艦隊長」

その後レイエス達ともお別れの挨拶をして彼らがレイブンに乗り込む時に俺はある物をレイエスに渡した。現在UNSAで使われているデータチップだ。

「これは？」

「多分数年すればあなたの方でも作る事が出来るはずの物だ。きつと役に立つはず。地球に帰ったら見てみると良い。うまく使えば地球のさらなる発展に繋がるだろう。
Live long and prosper
長 寿 と 繁 栄 を」

そう言つて俺は人指し指と中指・薬指と小指をくっ付け、中指と薬指の間と親指を開いて、相手に掌を見せるヴァルカン式挨拶をした。これやってみてかっただよね。難しいけど。

格納庫からレイブンが出ていくのを見送った後、俺は艦橋に移動してデータに命じた。

「よし、まずはさそり座の星にジャンプしよう。七重連星をこの目で見てみたい」

「了解です、艦長。胞子ドライブ起動します」

さらば（この世界の）地球よ！

クルンと回りながら姿を消したディスクバリーをレイエス達は眺めていた。

「行ってしまいましたね…」

「未来は色々つぶつ飛んでるということがよくわかったよ」

イーサンはカークから貰ったデータチップの中身を見ていた。

「艦隊長、これはすごい代物です。モニターに出します」

モニターに表示されたのは大型の人工衛星のようなもので、それらは大量に地球軌道の上に設置されていた。そして一齐に起動すると地球を囲む形にシールドが展開したのだ。カークが渡したのは、『スタートレック・ディスクバリー』シーズン3にて地球連合防衛軍が使用していた惑星防衛シールドの設計図と運用システムだった。

「これは凄いな…だがイーサン、実際問題これを作れるのか？」

「我々は既にエネルギー系兵器を運用しており、F—SPARの開発にも成功しています。それらの技術を兵器からシールドにシフトすれば恐らく可能でしょう。しかしカーク艦長の言う通り数年の時間はかかります」

「SDFと睨み合っているうちは作れない…いや、人間同士で争っている話にならないということか」

「この30年間、我々は常に戦ってきましたからね…」

1年後、SDFの戦争犯罪についての裁判がジュネーブにて開廷。今までSDFが実行した数々の戦争犯罪が明らかとなり地球市民は衝撃を受けた。それまでの地球市民の認識では『あの事件はSDFの仕業だろう』『またSDFか』『ぐらいのものだったが、裁判で実際の被害の大きさや残酷性が公表されてドン引きしたのだ。特にチャニアでの入植者虐殺事件については、ヘラクレスが回収してきた遺体の状態やSDFから押収した資料等が伏せ字無し（遺体にはモザイク加工がされた）でネット上で公開された。

裁判の結果、評議会メンバー及び虐殺に関わった人間のほぼ全員に死刑判決が、残り人間には終身刑が言い渡された。エウロパ兵器工場攻撃及びジュネーブ奇襲攻撃を計画・指揮したコッチも当然死刑となった。判決の1週間後に死刑が執行され、コッチ達死刑囚は全員銃殺刑で処刑された。死刑囚達は最後まで喚き散らしていたが、銃殺隊を指揮していたレイエスに、

『火星が永遠かどうかは知らないが、今確実に言えるのはお前達の罪は永遠に消えない

という事だ。それに死は恥ではないと言うのなら、生きている事は恥なんだろう？ 良かったじゃないか、死ぬ事が出来て。こちらとしてもお前達が死んで本当に嬉しいよ』
と言われて口を閉じたという。遺体は火葬された後に大西洋で散骨された。遺体が埋葬された土地が聖地となるのを防ぐ為の措置である。

火星臨時政府は死刑執行の数日後に公正な選挙を実施。これをもって火星臨時政府は火星政府となり、正式にUNSAに加盟した。軍備制限により火星政府の軍隊である火星防衛軍は小規模なものとなっている。駆逐艦以上の大型艦を保有出来ず、エネルギー系兵器の艦艇搭載も禁止された。かつてSDFと地球が争った原因の1つであるヘリウム3・メタンハイドレート等のエネルギー資源やレアアース資源の採掘及び貿易に関する条約が締結され、地球と火星の国交正常化がここに実現した。

それから4年後。UNSAエネルギー技術本部の責任者、コール中佐率いるチームがカークが残っていた惑星防衛シールドシステムの開発に成功。シールドの強度は小惑星帯での衝突実験、リトリビューションによるレルガン攻撃実験、更にF—SPARによる攻撃実験でその強度が保証されている。また、このシールドは起動している惑星大気圏内へのジャンプを妨害する機能を持っており、半年後に地球と月、その3ヶ月後には火星に設置された。装置の小型化も進みつつあり、リトリビューションにて実施試験が行われている。

この世界の地球はこれからも発展していくだろう。

これが七重連星か！すげーな！写真撮っておこ。

「まさに芸術的、という言葉がぴったりの光景ですね」

「そうだな。さて満足したから次の世界に行こうか」

「了解です。まずは通常ワープに入ります」

すると見慣れたワープの光景が。やっぱこれだよなあ。

「それでは胞子ドライブを起動します」

「やってくれ」

次はどんな世界に行くのだろう。楽しみだ！

幕間

インターバル

俺は今なんかよくわからん浜辺にいる。ハワイみたいだな、行ったことないけど。んで頭上にはデイスカバリー。隣には神。何お前トロピカルなジュース飲んでんねん。

「なんで俺ここにいるん？次の世界に行くんじゃなかったの？」

「次に行く世界、まだ決まってるじゃない。それまで、リラックス。OK？」

「リラックスって…どれくらいかかるんや？」

「3日。準備できたら、呼ぶ」

「…まあリラックスは出来るか。暇だしジャツカルとレイブンの操縦訓練でもするか」

海でしばらく泳いでからジャツカルとレイブンに乗ってみた。レイブンは比較的操縦しやすいね。でもジャツカルはちよつとピーキーだな。マクロスの可変戦闘機程ではないけど練習はしばらく必要だね。

あとポイントで買ったものを使う時が来た。まずSCP-2400。SCPに手を出す時が来るとは思ってなかったけどね。これはコンクリートの壁のかけらに取り付

けられた扉だ。サイズは壁のかけらが3・71m×2・25m、扉自体は0・65m×0・91mと小さくて、なんとかかかんで入れる程度の大きさ。これを余っていた倉庫に入れておいた。この扉を開くとSCP-2400-Aと指定されている空間に繋がっている。美しい青空の下にどこまでも広がる、白く平坦な大地である。んでこの空間の中に入って扉を閉めると、その瞬間時間の流れは空間の内部と外界で隔絶され、内部の時間だけが外界の140倍という恐ろしいスピードで流れ始めるのだ。空気と重力が普通の精神と時の部屋みたいな感じだね。この中で3日間を過ごすとして3×140で420日間過ごせる。

なんでこれを買ったかというのと、同じくポイントで買った訓練施設とハートマン軍曹型アンドロイドで自分を鍛える為だ。今まで銃を撃つたことがない一般人だったから、いざという時身を守る力が必要だと感じた。だからこそあの鬼軍曹を呼び出した。地獄の8週間の訓練をするのだ。ただ体を壊すかも知れないから保険は必要だよ。そこでこの魔法辞典。ご存知ドラえもんのみみつ道具で、なんにも書かれていない白紙の本に魔法の『効果』と『発動条件』を書き入れると、誰もがその魔法を使えるようになる。発動条件には『呪文』や『ジェスチャー』などを柔軟に設定できるから、自分に分かからない呪文やジェスチャーを用意しておけば、他の人には使う事が出来なくなる。これで用意した魔法は『死ぬまで健康体でいて、あらゆる病気にかからず、どんな

に食べても太らない』というもの。これをコマネチしてからアイーンをしながら言う魔法が発動するようにした。

「訓練教官のハートマン一等軍曹である。話し掛けられた時以外口を開くな。口からクソを垂れる前と後に『サー』を付けろ！分かったかウジ虫！」

「サー、イエツサー！」

「ふざけるな！大声出せ!!タマ落としたか!？」

「サー、イエツサー!!」

「ええええええ！でも俺はやると決めたんだ。これを超えて俺は男になる！」

※訓練の様子をダイジェストでご覧下さい

「起きろ！起きろ！起きろ！マスかきやめ！パンツ上げ！」

「ダボダボのケツを何とかしろ、デブ！上でマ〇コが待ってりや登るだろ、コノヤロー！」

「じじいのファックの方がまだ気合いが入ってるぞ！」

「死ぬか？おれのせいで死ぬつもりか？さっさと死ぬえ！」

8週間を俺は乗り切った。何度も死ぬかと思った……てか原作よりもアグレッシブじゃねえかあいつ！疲れて走れなくなった時に後ろからM16で俺の足元を乱射し始めたし！それらを乗り越えて俺は海兵隊員になった！けれどここがスタートラインなんだよね。ここからひたすら訓練を重ねて実戦に向かうって凄い事だと実感したよ。国を守る為に戦う兵士の皆さんには尊敬と感謝の念しかない。時間はまだまだ残っているから筋トレや射撃訓練続けよう。武器は主にC o D : I Wの物を使用している。これで訓練していれば問題ないはず。

「いいか海兵……これからライフルとピストル、両方のマークスマンバッジを取れるように訓練してやる！……発外すごとに腕立て伏せ20回だ！お前が外すと仲間が死ぬんだ！それを忘れるな！」

「サー、イエッサー!!」

俺が持つてるのはまだシャープシューターバッジだからもつと上を目指して頑張らないとね。でもマークスマンバッジって相当高いスコアを出さないと取れなかった気がするんだが……まあいいか。微笑みデブみたいに射撃の性能を開花させるとしよう！

2ヶ月後。

「よくやった海兵！これでお前は立派な上級射手だ！このM38　SDMRとSIG M17をくれてやる！大事に使い！」

「ありがとうございます、サー！」

ようやく合格点を貰えたよ。実戦と同じ状況で当てると言われたけど、まさか狙っている時に俺の頭の真横に銃を撃つてくるとは思わなんだ。M16はもちろんM2で撃ってきた時は漏らしそうになった。M2重機関銃は駄目でしょ、何発か当たったし。死なずに済んだのはUNSAから貰ったSCARチーム仕様の特別宇宙戦闘服に、ポイントで買った小型のシールド発生機を組み込んでいたから。実弾系なら歩兵が運用するほぼ全ての武器を無力化できるし、エネルギー系ならF—SPARの直撃に10秒まで耐えられる。これだけあればなんとかなるかな。

「おい」

すると神がやってきた。準備出来たのかな？

「準備、終わった。いつでも、行ける」

「なら行こう。どうすればいい？」

「ここから、ワープ。そして、胞子ドライブ」

「わかった」

SCP—2400—Aから出てまずはシャワーでさっぱり。服を着替えてから艦橋

に行く。

「艦長、出撃準備完了。いつでも行けます」

「ありがとう、データ。まずは通常ワープ、それから胞子ドライブで次の世界に行く」

「了解しました。ワープ開始します」

さあ次の世界はどんなところかな？メカメカしい所が良いなあ。

「ワープ完了。船体及び船内に異状なし」

外を見るとただの宇宙で何も無い。さてここはどここの作品の世界なんだろうか？

「艦長、救難信号を受信しました。座標特定…完了。ここから5光年離れた場所です」

「救難信号か。よし、助けに行くぞ。胞子ドライブ起動」

可愛い子がいるといいんだけどね。

アベンジャーズ／インフィニティ・ウオー

1：俺らこんな世界嫌だ〜♪

「困った…」

「困ったな…」

2人の男は窓の外に広がる広大な宇宙を眺めながら心底困っていた。短い髪に髭が似合う男の名はソー・オーディンソン。アスガルドの第1王子、そして今のアスガルド王であり、稲妻を召喚・蓄積・放出する特殊能力を持つスーパーヒーローでもある。隣りにいるロン毛の長身イケメンはロキ・ラウフェイソン。ソーの義弟であり、アスガルドの第2王子だが実はアスガルド人ではなかったりする。

そんな2人が困っている理由だが、1時間程前に故郷のアスガルドで姉のヘラと盛大な戦いを繰り広げた。自力では倒せなかったのでちよつと前に倒した炎の巨人スルトを復活させてラグナロク、アスガルドの滅亡を故意に引き起こした。その結果スルトはヘラもろともアスガルドを滅亡させた。

ここまでは良かったのだが問題はその後。木端微塵になったアスガルドの破片やらがソー達アスガルドの民が乗る避難船『ステイツマン』にぶつかったのだ。船体のあち

ここに破片がぶつかり、主にエンジン周辺の被害が深刻だった。機関そのものは無事だったが、船体後部と底部のエンジンノズルが完全に崩壊し、推進力がほぼゼロになってしまった。

修理のしようがないレベルまで壊れてしまったので、ソーは地球方面に救難信号を発信する事にした。地球にはアベンジャーズの仲間がいるから、時間はかかるが気付いてくれるはず。船内にはそれなりに食料品・医療品が保管されていた。

「いつ地球の連中は来るんだ？」

「それ5回目だぞ、ロキ」

「他にやる事といたら酒を飲むぐらいしかないからな」

「それはそうだが……」

ロキはウイスキーを一気に飲むと、言いにくそうにソーを見た。

「実はちよつと言わなきやいけない事があって……」

だが窓の外に見慣れない宇宙船が突然現れ、ロキの言葉は途中で止まった。

「あれは地球の船……なのか？」

「わからん。艦橋に行くぞ。話はその後だ」

艦橋に行くとハルクことロバート・ブルース・バナード博士とソーの親友でもあるハイ

ムダルが待つていた。2人とも嬉しそうな表情だ。

「バナナ、あの船は？」

「これを聞けば分かるさ」

バナナがコンソールを操作すると男の声が聞こえた。

『こちらはUSSディスカバリー。前方を漂流中の大型船に告げる。貴船より発信された救難信号を受信した。もしこの通信が受信できているなら、船名、責任者の氏名、乗船人数、船の状態を教えてください。本艦には食料品・医療品の提供を行う準備がある。また船の曳航設備も備えている。繰り返し、こちらは…』

「救難信号が届いたのか！あれは地球の船なのか？」

「それは分からない。船名の頭にあるUSSつてのは、アメリカ海軍艦の艦船接頭辞であるUnited States Shipの略だと思っただが、海軍があんな宇宙船を持つているなんて話を聞いた事が無い。そもそも地球の技術力であんな船を造るのは難しいと思う」

「確かに…とりあえず返信はしなないと」

ソーはマイクを手に取り返事をすることに。

「こちらアスガルド所属ステイツマン。責任者のソーだ。本艦は現在推進力を喪失し漂流中。機関は無事で生命維持装置は稼働している。乗船人数は…民間人が大勢いる。

食料や医療品も少しは余裕がある。可能であれば曳航を要請したい」

『アスガルド…了解した。怪我人はいるか?』

「怪我人は少しいるがどれも命に別条はない」

『わかった。映像通信は可能だろうか?』

「少し待つてくれ…これか?よし」

ボタンを押すと男の姿がモニターに表示された。よく鍛えている、とソーは感じた。見慣れない制服の上からでもその鍛えられた肉体がわかる。

『私がUSSデイスカバリーの艦長、ジェームズ・T・カークだ。あなたがミスター・ソー?』

「ソーでいい。カーク艦長、救助に感謝する」

『カークで大丈夫。救助を求める船がいたら助ける。船乗りの常識だよ。とりあえず生命維持装置が無事で良かった。空気が漏れている場所はないか?』

「漏れていた場所は既に閉鎖した。怪我人も応急手当を終えている」

『それはなによりだ。今軽く船体をスキャンをしたがかなりやられているみたいだな…岩みたいなのが底部にいつぱい突き刺さっている。小惑星でも飛んできたのか?』

「…まあそんなところだ」

故郷の惑星を姉と一緒にふっ飛ばして、その破片でやられましたとは言えないソーで

あつた。

『なるほど……つてソーも目を怪我しているじゃないか』

「これか？ちよつと取れてな。ウイスキーで消毒したから大丈夫だ」

『いやいやきちんと治療しないと駄目だろ！転んで膝擦りむくのは訳が違う。ちよつとそつちに行くからエアロックの場所を教えてください』

「あ……わかった。ここがエアロックだ」

『了解、すぐに行く。到着まで5分。カーク、アウト』

おいおいおい。ソーにステイツマンつて事はこの世界はインフィニティ・ウォーかよ！やべえじゃん！サノスのハゲに指パッチンされたらおしまいだからなんとしても阻止しないと。てかもうすぐ来るんじゃないかね？ここに来る時には既にパワー・ストーン持つてたはずだし、あのクソデカなサンクチュアリIIも来るし！急がないと死ぬ！

「データ、スキヤナーを最大出力で稼働させる。所属不明艦が近付いてきたらすぐに連

絡を頼む」

キヤプテン・マーベルが体当たりで壊せるぐらいだから、この船の武装なら勝てるでしよ多分。

「了解しました、艦長。幸運を」

「そつちもな」

そう言つて俺はレイブンの格納庫から宇宙空間に飛び出した。着ているのはSCAR宇宙服。やつぱ宇宙遊泳つて楽しいな。レイブンは自動操縦でデイスカバリーに戻るようしておいた。ブーストリグでエアロックまで飛ぶとドアが空いたので入る。さあ正念場だぞ。

『気圧調整完了。ドアを開けます』

丸い大きなドアが開くとそこにはソーにロキ、ヘイムダル、バナナ達がいた。ソーは筋肉やべえ。まさに漢つてやつだな。ロキはめっちゃイケメンやん。ヘイムダル俺好きなんだよな。バナナ博士もかつこいい。スルトに飛びかかるシーンは笑つたけど。

「はじめまして。カークだ」

「ソーだ。こいつは弟のロキ、こっちは俺の親友ヘイムダル、そしてバナナ博士」

「よろしく」

全員と握手。これだけでMCUファンは小便漏らすレベルで嬉しいだろ。

「早速だがソーの目を治療をしよう。一体何をしたんだ？」

「ちよつと姉と喧嘩してな」

「アスガルド流の喧嘩は物騒だな…」

鞆から医療用トリコーダーを取り出してソーの目をチェック。やっぱ目ん玉がないから修復は不可能だな。小型のレプリケーターを用意しながらソーに尋ねる。

「損傷が酷くて自然修復は不可能だ。そこで義眼を用意しようと思う。何か要望はあるか？目の色とか特別な機能とか…」

「ちよ、ちよつと待ってくれ。この場で義眼を作れるのか？その小さな機械で？」

バナーがレプリケーターをまじまじと見つめている。そりや地球の技術じゃ無理だもんな。

「うちじゃこれが普通なんだ。あとで機能を説明するよ。で、どんな機能を付ける？おすすめは高度な動体視力付きのとか、目からレーザービームが出るやつとか…」

「ビームとか物騒だな！とりあえずどんな雷にも耐えられるようにしてくれ。俺雷使えるから。目の色は今と同じで頼む」

「わかった…これでよしと」

必要なデータを入力するとレプリケーターが作動し、10秒もしないうちに義眼が完成した。バナーはもちろん、他の3人も口が開きっぱなし。

「えっ…もう出来たのか?」

「はい完成。付ける前に軽く消毒するから痛むぞ。あと義眼と神経が接続すると凄まじい痛みがくるから覚悟しといて」

「そ、そんなに痛いのか?」

「俺はやったことないけど…聞く所によると金床の上に置いた金玉をスレッズハンマーで殴った程度の痛さ、らしいよ?」

心なしかソーの顔が真っ青になってきているみたいだが気にしない気にしない。まずはガーゼを取ってマ〇ロンをバシャー。

「痛ってえ!」

血は止まっているみたいだから目の周りの血を拭いてから、消毒した義眼をソーの眼窩にシユウウーツ!!

「うおおおおおおおおおおお!!!」

釣りたての魚みたいなのにた打ち回っている!!エキサイティンじゃないな。はい口キ君、そのイケメンフェイスでニヤリとしない。

「本当に大丈夫なのか?」

「あと5秒もすれば復活するはずだ」

「うおっ!?!」

するとソーが口を閉じて跳ね起きた。周りを見ながら義眼に雷を当てている。痛くないのかあれ。

「見えるぞ！よく見える！」

「よし！じゃあ次は曳航の準備をしよう。元々どこに行く予定だったんだ？」

「地球に行く予定だった。あそこには仲間がいるからな」

「わかった、では……」

その時、コムバッジが作動してデータから通信が入った。

『艦長！9時方向よりアンノウン接近中！極めて巨大な戦艦です！』

「わかった。ソー、ここで誰かと合流する予定は？」

「もちろんない。艦橋へ行こう」

艦橋に着くのと同時にサンクチュアリⅡを目視で確認した。ロキはやべえって顔している。

「データ、不明艦の詳細を」

『全長19000メートル、全幅14000メートル、全高7800メートルの超巨大宇宙戦艦です。たった今、一部データのハッキングに成功。船名はサンクチュアリⅡ、ブラック・オーダーなる組織の所有物です』

「どでかい聖域だな……そのブラック・オーダーって組織のリーダーは？」

『サノスとかいう全身紫色のデカくてハゲてるタイタン人です』

データの言い方に艦橋にいた全員が拭いた。ロキは腹を抱えて爆笑している。

「ハゲは失礼だろハゲは…データ、何時でも動けるようにしておけ。シールド出力最大、全兵装オンライン」

『了解です』

「誰かサノスを知っている人はいるか？」

4人に聞くとバナー以外は頷いた。曰く、全宇宙の最大の脅威。行く先々で破壊と虐殺を繰り返し、6つのインフィニティ・ストーンを探しているそう。6つが揃うと宇宙を支配する力が入るらしい。しかもロキは以前サノスと同盟を結んでいたとか。

「でもここにストーンはない。アスガルドと一緒にテッセラクトは吹き飛んだ」

「あ…実はそれ間違ってる」

ロキは気まずそうに言う。手のひらを上に向ける。するとそこに青いキューブが出現した。映画でも思ったけどめっちゃ綺麗やん。お洒落なバーとかで間接照明として置いてあっても不思議じゃないね。

「お前また盗んだのか！」

「いや、気が付いたらポケットに入っていて…」

「それはいいとして、その石をあいつに渡しちゃ駄目なんだろう？なら急いで逃げないと

な」

「でもどうやって?」

ヘイムダルの言葉に返事をしようとしたが、その前にデータが大声を上げた。

『艦長、敵艦より発砲! 目標はステイツマン!』

民間人が大勢乗っている船に問答無用で攻撃してくるとか、やっぱサノスはイカレハゲだな。

「直ちに応戦! デイスカバリーを射線に割り込ませろ! あとフックでステイツマンを掴んで胞子ドライブでジャンプだ!」

『目標は?』

「ちよつと待て」

俺はソーの横にあるコンソールを操作して星系図を表示させた。うわ、地球までめっちゃ距離あるじゃん。どこに行こうかな。

「今星系図を送った。とにかく太陽系方向へランダムジャンプ! ブラックホールや恒星は避ける!」

『了解!』

デイスカバリーから送られてくるデータを見る限り、サンクチュアリIIの攻撃は全てデイスカバリーのシールドで防げている。仕返しにフェイザーと光子魚雷をお見舞い

したら、いい感じの被害が出ているようだ。あのクソダサイドーナツみたいな船が吹き飛ばすのも見えた。しかも艦橋をズームしたらサノスがガントレットで何か叩いてるし。怒ってんのか？

そうこうしているうちにデイスカバリーがフックでステイツマンを掴んだ。

『固定完了！いつでも飛ばします！』

「ジャンプ開始！」

デイスカバリーとステイツマンが回りながら消失するのを、サノスはサンクチュアリIIの艦橋から見ていた。全てが予定と異なりストレスが溜まっていた。ステイツマンに乗り込んでスペース・ストーンを強奪するはずだった。到着すると見慣れない船がいたが気にせず攻撃。しかしその船が凄く強い船で、こちらの攻撃が通らず、向こうの攻

撃でかなりの被害を受けた。そのせいでしばらくこの場から動けなくなってしまった。

「おのれ…」

「修理完了まで時間がかかります。次はどうします?」

副官のコーヴァス・グレイヴからそう聞かれると、サノスは唸りながら椅子に座った。
「動けるようになったらノーウエアへ向かう。リアリテイ・ストーンを奪うぞ」

2：話をしよう

ソーは自分が経験した事を信じられないでいた。つい数秒前までサノスの巨大船から攻撃を受けていたはずなのに、視界がぐるりと回るとサンクチュアリIIは消えており、船も全く別の場所にいた。ロキ達も困惑している。

「カーク、いったい何が起きたんだ？」

「俺のデイスカバリーには特殊なワープシステムが搭載されている。それを使って逃げたんだ。本当ならあのクソ紫ハゲをブチ殺すところだが、大勢の民間人が乗っている船の避難を優先すべきと判断した。データ、現在位置は？」

カークの問いに男の声で返事が来た。恐らくデイスカバリーに乗っているカークの副官だろう。

『現在位置は先程の位置から50000光年離れた宙域です。現在周辺をスキャン中』

「50000!?!」

バナーはもちろんヘイムダルもびつくりしていた。一瞬でこんなに遠くまで飛べるとは…

「まあまあ遠くまで飛んだな。損害報告を」

『サンクチュアリⅡによる攻撃でシールド出力が22%低下しましたが、デイスカバリー及びステイツマンに損害はありません』

「わかった。あのデカ船にはどれだけダメージを与えた？」

『しばらく動けない程度には』

それはいい知らせだ。相手が動けない間に早く民を地球に避難させねば。

『艦長、12時方向よりアンノウン接近中。数は1、恐らく小型船』

「全くこの船は人気者だな。戦闘準備を…」

「待ってくれ、通信が入っている」

ヘイムダルがコンソールを操作すると、モニターに6人の男女が映った。

『こちらベネター号。救難信号を受信して飛んできたんだが、問題はないか？』

バナーが確認すると救難信号を切り忘れていたようだ。

「こちらステイツマン。来てくれて感謝する。本艦は自力航行が出来ない状態だが、上にいるデイスカバリーが救援に来てくれた。救難信号を切る前に問題が起きてそのままにしていた、申し訳ない」

『問題？何かトラブルでも？』

「サノスっていう紫色のサイコハゲに襲われてな。デイスカバリーがいなければ本船は沈んでいただろう」

すると6人の顔色が変わった。

『今、サノスって言ったか?』

「ああ。知り合いか?」

『…あいつを追いかけていてな。話すと長くなる、直接会って話さないか?』

「なら俺の船に來ないか?」

そう言うのはカーク。

「俺はカーク。デイスカバリーの艦長だ。広めの会議室もあるし出来立ての飯も用意出来るぞ」

まさかガーディアンズ・オブ・ギャラクシーのメンバーと会えるとは思ってなかったよ。スター・ロードかつけえなあ。それはともかく、まず俺はデイスカバリーからステイツマンに複数の大型レプリケーターを運び込んだ。これでアスガルドの民に温かい食事を提供できる。保存食だけだと気が滅入るからみんな喜んでくれた。

次にレイブンでソー達4人と一緒にデイスカバリーへ戻った。それと同時にデータの誘導でベネター号の小型ポッド、スペース・ポッドも格納庫に着陸した。流石にベネター号は大きいから格納庫に入らなかつた。でもデザインが素晴らしい。

軽く挨拶を交わしてから会議室へ移動。レプリケーターで飯を用意すると言つたらみんな驚いていた。ガーディアンズ・オブ・ギャラクシーのメンバーはカレーを注文。ソー達はシャワルマを食べた。確かアベンジャーズのエンディングで食べていたな。俺はもちろんハンバーガー。やはり美味しいな。ハンバーガーは素晴らしい食べ物だ。穀物、肉、野菜をバランス良く接種できる。ダイエツトコークを飲めばカロリーは実質ゼロだし。

「さて、それじゃ飯も食い終わった事だし話を進めようか」

それぞれメンバーが自己紹介をする。よく考えるとここにいる面子はなかなか凄い。世界を救ったヒーロー達が勢ぞろいしている。俺だけなんかアウェイ感を味わってる。最後は俺の番か。

「俺の名前はジェームズ・T・カーク。惑星連邦宇宙艦隊所属、このUSSデイスカバリーの艦長を務めている。階級は大佐。カークと呼んでくれ」

「惑星連邦…聞いたことある?」

「いや、ないな…」

みんな首をかしげている。まあそうなるよな。

「ちよつと信じられないかもしれないが…俺は違う世界から来た人間だ。元の世界にはアスガルドは存在していないしな」

「えっ」

「データ、説明を頼むよ」

すると俺の後ろにホログラムのデータが出現した。見た目はもちろんデータである。どうやらソー達はデータが俺の副官だと思っっているみたいだ。実際頼れる副官だしな。

「皆さんはじめまして。デイスカバリーの艦載AI、データです。本艦は宇宙艦隊司令部の命令を受け、銀河系内で発生した時空間異常についての調査任務を実施していました」

会議室中央のモニターに表示したのは銀河系の図で、太陽系を含めた5か所で時空間異常が発生しているのが見える。でもこれは真つ赤な嘘。神様に言われて転生しましたとか言っても信じてくれんだろう。

「本艦はサンクチュアリIIのような純粋な戦闘艦ではなく、科学実験や調査を主任務としている先端技術実験船ですので、今回の任務を問題なく実施していました。しかし最後の時空間異常点において時空が大きく破れているのを発見しました」

スタートレック：ピカードのシーズン2エピソード1のような緑色の時空間異常をモ

ニターに出すと、科学者であるバナーが質問をしてきた。

「あれは…宇宙に穴が開いている？ いったいなんなんだ？」

「解析不明です。タキオン・レベルは低く、本艦が到着した時は安定していました。しかしその後時空間が急速に不安定になり、逃げようとなりましたが間に合わず、デイスカバリを巻き込んで時空間は消滅しました」

「俺は死んだと思ったけど無事だった。んで救難信号を受信したから現地に向かったら、見たことがない船に聞いたことがない国名。俺は違う世界に来ちゃったと確信したよ」

話を終わると色々と質問された。まずはピーター。

「サノスの船をボコボコにしてたけど、どんな武器積んでるんだ？ 実験船にしては重武装だと思うんだけど」

「そんなに強くはない。指向性エネルギービームのフェイザー、反物質弾頭を搭載している光子魚雷、真空エネルギー弾頭を搭載している量子魚雷、敵艦の電子機器を無力化するイオン・ミサイルぐらいだ。それにこれぐらいの武装は32世紀じゃ最低限必要な装備だぞ」

「32世紀やべえな…」

次にソー。

「カークはなかなか鍛えているみたいだな。戦えるのか?」

「基本的に俺はここで指揮をするのが多いな。でも海兵隊式訓練を受けた後に特殊部隊の訓練も受けている。剣やハンマーは難しいが銃やナイフなら任せてくれ」

「それは頼もしいな」

実はポイントを使ってバイオプラントを買った。これは映画版バイオハザードに出てくるアイザックス博士が開発した身体機能管理システムで、これを体内に取り込んでいると超人的な戦闘能力、肉体の損傷に対する修復能力、敵の様々な攻撃パターンを即座に予測し対応できる『格闘予測ソフトウェア』を使えるようになる。

「それで今後の話なんだが、まずこれを見て欲しい」

俺はサンクチュアリIIの艦橋をズームした画像を出した。サノスがキレて何か叩いてる図だ。自分の思い通りにいかなくて物に当たってなかなかのクズだよな。こんながリーダーの組織にはいたくないね。

「この左手の金ピカ手袋に付いている紫色の石はインフィニティ・ストーンの一つなんだろう?」

「その通りだ」

ソーが詳しくそうなので説明を任せる。

「あれはパワー・ストーンだ。ザンダー星でノバ軍が保管していたはずだが、サノスの手

にあるということは既にサンダー星は滅んでいるだろう」

「嘘だろ……」

ガーディアンズ・オブ・ギャラクシーで見たけど綺麗な星だったよな。よく滅ぼせるな、サノスのイカレポンチは。ちよつと脳みそ湧いてるとしか思えん。

「スペース・ストーンはアスガルドで保管していたが今はここにある。サノスが奪いに来たがカークのお陰で逃げる事が出来た。タイム・ストーンとマインド・ストーンは地球でアベンジャーズが持つてる。ソウル・ストーンの所在は誰も知らない。つまりサノスが次に行く場所はリアリティ・ストーンが保管されているノーウェアだろう。ここ数年コレクターに預けているからな」

「あいつに預けるとか正気かよ」

見てくれと言動は確かにアレだけど、アスガルドが2つもストーンを持つのは良くないから預けたんだよな。でもアベンジャーズは2つ持つてるよな。まあマインド・ストーンはヴィジョンになつてるから持つてるとは言えんか。

「そこで提案なんだが……ピーター、ガーディアンズを率いてノーウェアへ行つてリアリティ・ストーンをサノスより先に回収して貰いたい。コレクターに、サノスが狙つていると言えばすぐ渡してくれるはずだ」

「分かった。パツと行つてサツと貰つてくるさ」

「カークは引き続きステイツマンを地球まで曳航してくれ。地球に着いたらアベンジャーズに連絡してくれば話がスムーズに通る。バナーはアベンジャーズのメンバーだから、ロキがいてもそこまで問題にはならないはずだ。出来ればノルウェーのトンスベルグに船を降ろして欲しい。あそこは父が眠っている場所なんだ」

「了解。超特急で地球に向かうよ」

「で、俺はちよつとニダベリアに行つて武器を調達する」

「あの伝説の場所か？宇宙がビビる最強の武器を作つてるだろ！俺も行つてみたいな
！」

初めて見た時はたぬきなのかウサギなのか分からなかったロケットがウキウキして
る。これが元人間とは思えんな。

「ドワーフのエイトリにサノスを殺す武器を頼む。ロケット、君がベネター号の船長殿
か？」

「おうよ、お察しの通りだ」

「なるほど、風格がある。一緒に行つてくれるか？俺がナビゲートする」

「船長に聞くよ。おつと俺が船長だったな、よし行こう！」

「素晴らしい」

「俺が船長なんだけど」

ピーター置いてけぼりなのウケる。

「あの」

と言いなから手を挙げるのはガモーラ。

「私はソウル・ストーンがどこにあるか知ってる」

「何だって!?!」

聞くと、昔サノスの仲間だった頃に調べるように命じられ、ヴォーミアという惑星にある事を突き止めていたそう。でもサノスは両親を殺したクソ野郎だったから内緒にしてたらしい。

「ただし、惑星のどこにあるのか、どうやって手に入れるのかは分からなかった。ストーンキーパーという監視者がいるらしいわ」

「なるほど…」

入手方法は愛する者の魂と引き換えなんだよな。だったら…

「ガモーラ、君は極力前線に出ない方がいいと思う」

「何ですって!?!」

「いや、気を悪くしたなら謝る。だがサノスがソウル・ストーンを手に入れるには君の知識が不可欠だ。つまり君を誘拐して情報を引き出そうとする可能性が高い。最悪の場合、君の仲間を捕まえて拷問するかもしれない」

「それは……」

実際映画じゃネビュラを拷問していたしなー。出来ればサノスに捕まる前にこちらで保護したいところだが。ならこうしよう。

「1つの案だが、ガモーラは俺と行動を共にする。この艦なら絶対に安全だからな。まず地球にアスガルドの民を避難させる。その後ピーターを追ってノーウェアに向かうというのはどうかな？」

ピーターが凄く嫌な顔をしている。知ってるけど念の為聞いておくか。

「…もしかして2人って、お付き合っている感じ？」

「えっ!? いや、その…まあ、そういう事、だな！」

カップルを離れ離れにさせるのは重罪だから駄目だな。百合の間に挟まる男と同じレベルの極悪人になってしまう。

「じゃあピーター達と一緒に行くしかないな。だが念の為にこれを渡しておくよ」

そう言つてゲーディアンスの目の前にレプリケーターで作り出したのは2つの機械。1つはゲームボーイサイズのもので、もう1つはモンスターボールみたいなやつ。ポインタを使って購入したものだ。

「これは……」

「まず右の機械は携帯型スクラントン現実錨。これを起動すればある程度まで現実改変

を無効化出来る。リアリティ・ストーンの能力は現実改変だろ？サノスに取られた時に對抗する為の機械だ。ただし効果範囲は2立方メートルだ」

SCPの世界ではおなじみのスクラントン現実錨。意外と安くてびっくりした。

「左のは個人用シールド発生装置。ただでさえ頑丈なサノスがパワー・ストーンで自身を強化している。でもあいつの口からビームが出るわけじゃない。全力でぶん殴られてもこれがあれば無傷で済む」

ピーターは恐る恐るといった様子でシールド装置を手に取る。

「そりやすげえな。どれぐらいの強度があるんだ？」

「それにはピーターの協力が必要だ。ちよつと立ってくれ」

「えっ」

「そうそう、ここに立ってもらって、よし。で、シールドを起動して…ソ、ちよつとピーターを殴ってくれ」

「ええっ!？」

「良いのか？」

「大丈夫大丈夫」

ソ一の腕に電流が走り、ピーターの顔は真っ青。

「いいか？」

「良くないー！」

「よし、行くぞおおおおお！」

ソーのかみなりパンチ！ピーターはシールドをつかった！ソーは吹き飛んで壁にぶつかった！ロケットはポカーンとしている。そしてロキはニヤニヤしている…

「うえ!? 痛くない！てか俺動いてない！」

「なんて硬さだ…びくともしない」

「強度はこれで証明されたな。あと全員に恒星間通信装置を渡しておくからやばくなつたらすぐ連絡してくれ」

必要な物を渡し終えて会議はおしまい。俺は再びデイスカバリーとステイツマンをワープさせて地球軌道上に到着した。この間僅か3分。

「この時代の地球はあまり発展してないな。軌道エレベーターもないし、そもそも宇宙船飛んでないし」

「今の地球は2018年だから仕方ないさ。君の世界ではどんな歴史を歩んでいたんだ？」

「バナーに聞かれてちよつと考える。確か2063年にフェニックスが初めてワープ

航行に成功したんだっただけかな。その後は色々あったなあ。

「22世紀前半の惑星連邦成立前に4年ほど敵対的な宇宙人国家と恒星間戦争をして、その戦争後に連邦が成立したんだけど、その後も200年ぐらい定期的に戦争したり外宇宙から機械生命体が侵攻してきたり…」

「随分長い間戦争しているな。そんなに好戦的な連中だらけなのか?」

ロキも驚くレベルらしい。

「まあ色々とな。26世紀にはタイムトラベルのせいで歴史の大規模改変とかが起きたり…なかなかカオスな歴史を歩んできたよ」

「タイムトラベル!?それは凄いやないか!」

「歴史的な出来事を観察することが可能になったのは素晴らしい事だ。だが29世紀にとあるバカが1944年の歴史に介入して、ナチス・ドイツがアメリカの征服に成功するという歴史を作りやがった。その結果大規模な過去改変が発生して大変な事になった。そいつのタイムシップを破壊したから全ての改変は消滅してめでたしめでたしとなったわけだ」

「そんな恐ろしい事が?」

「もしこの世界でタイムトラベルが可能になったとしても、絶対に過去を変えないようにするんだな。誰しも変えたい過去を持っているだろう。だがそれを変える事によつ

て改変が発生する。最悪の場合自分が消滅するかもしれないし」

バック・トウ・ザ・フューチャーがいい例だよな。母親と父親の恋愛に干渉したせいで主人公が消えかかっていたし。

「肝に命じるよ…」

そうこうしているうちにデータがアベンジャーズの本部であるアベンジャーズ・コンパウンドに通信を繋げる。

「アベンジャーズ本部、こちらブルース・バナー。応答してくれ」

『…バナー？本当にバナーなのか!?!』

「その声はトニーか！元気か？」

『まあまああってところかな。それよりバナー、君は3年間もどこに行ってたんだ？ロマンフが悲しんでいたぞ』

「色々あってね。でも今は緊急なんだ。今すぐ地球に降りて話をしないとイケない。ソーの故郷、アスガルドが木端微塵になつて避難民を大量に乗せているんだ。本部の近くに宇宙船を降ろしていいか？」

『そういう事情か。分かった、適当な場所に降ろしてくれ。医療スタッフを準備しておく』

「ありがとう」

今度はトニーと話せるのか！おらすっげえワクワクしてきたぞ！

「データ、アベンジャーズ本部上空にジャンプしてくれ。今のステイツマンが大気圏突入に耐えられるかわからん」

「了解です、艦長」

3：何なんだ、あいつは…

アイアンマンことトニー・スタークは腕を組んで空を見上げていた。周りには大勢のスタッフが同じように空を見ていた。念の為に武装チームも待機している。それにしてもバナナから連絡が来た時はとても驚いた。ソコヴィアの戦いで姿を消したもんだからロマンノフはとてものがっかりしていた。早く付き合えばいいのに。

しかしあのアスガルドが吹っ飛ぶとは信じられないな。ソーの声が聞こえなかったが無事だろうか。そう簡単にやられるとは思えないけどな。

『ボス、衛星軌道上の2隻の宇宙船に動きがありません。本当に降りてくるのですか?』
トニーをサポートするA.I. F. R. I. D. A. Y. からの報告に首を傾げる。

「2隻? バナナが乗ってる船だけじゃないのか?」

『光学観測の結果、大きく派手な宇宙船の上に別の宇宙船がいます。上にいる宇宙船が下の宇宙船をフックのようなもので掴んでいるようです』

「おんぶに抱っこ、というやつか」

その時突如空に青い光が瞬き、トニー達の上空200メートル程の位置に宇宙船が出現した。よく見ると派手な宇宙船はあちこちにダメージを受けている。上にいる宇宙

船が曳航してきたのか？いやそうじゃなくて。

「：F. R. I. D. A. Y.、何が起きた？こいつらどこから来たんだ？」

『軌道上からワープしたのではないかと推測します』

「なるほど…」

そしてゆつくりと宇宙船は降下し、トニー達の眼前に着陸した。上にいる宇宙船は着陸せず、後部から小型の降下艇らしき航空機がこつちに向かつてきた。クインジエツトよりごつい見た目だがデザインは好きだな。それが着陸すると後部からまずバナーが出てきた。

「ブルース！」

「トニー！」

思わず駆け寄ろうとしたが、後ろから出てきた男を見て足が止まった。

「やあ。何年ぶりかな？」

緑色の服を着たロン毛のイケメン、そしてどこか人を馬鹿にするような口調。どう見てもニューヨークで戦ったロキだった。初めて会った時のようにニヤツとした表情を見て、俺は素早く合図を出し武装チームがトニーの周りで銃を構えた。

「おい、どういう事だ？まさか脅されてるんじや…」

「違う違う。落ち着いてくれ、色々と積もる話があるんだ。彼は敵じゃない。敵だった

らニューヨークの時みたいに殴ったりぶん回してる。だから武器を下ろすように言うてくれ」

「…わかった」

チームに武器を下ろさせ、改めてバナーと抱き合う。

「よく戻ってきてくれた」

「帰りが遅くなつてすまない」

「いいんだ。それで他のメンバーを紹介してくれ、ロキ以外」

「冷たいなあ」

ロキはシカトしていかついアスガルド人と握手。

「ヘイムダルだ。アスガルドでは番人を務めていた。王からアベンジャーズの事はよく聞いている。よろしく頼む」

「こちらこそよろしく。ソーはいないみたいだけど大丈夫なのか?」

「問題ない。王は寄り道をしてから地球に来るそうだ」

「なるほど…てかソーは遂にアスガルドの王様になったのか!」

「紆余曲折あったが無事に王になられた。それも長い話があるんだ…」

本当に色々あったみたいだな…次はこれまた鍛えてそうな男。

「はじめまして。ジェームズ・T・カーク、デイスカバリーの艦長だ。アスガルドの避難

船受け入れ感謝する」

「トニー・スタークだ、よろしく。あの艦やこの降下艇のデザインは素晴らしいね」

「なかなかイカすだろう？特にあのエンジンが分離してるところが大好きなんだ」

あのぶかぶかしている細長いのがエンジンだつて？分離しているのに推進力が伝達するの……

「どんな技術を使っているのか気になるよ。カークはアスガルドの人間には見えないけどソーの知り合いなのか？」

「知り合ったばかり、というべきかな。この避難船、ステイツマンから発せられた救難信号を受信して、その後色々あつてここまで曳航してきたんだ」

「救難信号？平和な話じゃなさそうだな。場所を変えて話をしようか」

「そうしよう。アスガルドの民についてだが、ソーからの伝言でノルウェーのトンズベルグに移住したいとの事だ」

「すぐには難しいだろうが調整しよう。とりあえず俺が持っているリゾートホテルを10軒ちよつと確保してあるから、しばらくはそこで過ごしてもらおうよ」

「助かるよ。故郷を失ったばかりだから、今は少しでも休息が必要だ」

本部内の会議室に移動してお互いに状況を説明した。まずアスガルド側の話だが、サノスっていうサイコパスがとんでもない事を仕出かすつもりなのは理解した。6つあるインフィニティ・ストーンのうち、現在3つがこの地球にある。この情報を掴んだら必ずサノスは地球を攻撃するだろう。ただタイミングが最悪すぎる。

「そういえばキャプテンは？ えっクリントもない？ じゃあサムはどこ？ ま、まさか口マノフも？」

2年前に起きたソコヴィア協定絡みの内乱のせいでアベンジャーズは事実上の瓦解状態。メンバーだったステイプ、サム、ロマンフ、クリント、ワンダ、ヴィジョンはアベンジャーズを去った。残っているヒーローは俺とローズ、そしてバナーだけになってしまった。その事実を知ったバナーは頭を抱えて愕然としていた。

「たった3年でチームがこんな事になっているなんて…これでは地球を守りきれるかどうか…メンバーに連絡は取れないのかい？」

「二応ステイプに繋がるフリップフォンはある。あるんだが…」

連絡・追跡等も含め、俺は一切のコンタクトをしていない。やろうと思えば出来るが、アベンジャーズの瓦解の原因が自分にもあると考えると躊躇してしまう。しかし全宇宙の危機が迫っている今の状況を自分達だけでは対処できないのも事実。それにワンダと一緒に暮らしているヴィジョンにも連絡をしないとイケない。やる事が多すぎる

がやるしかない。

「まずはストレンジに連絡しよう。彼がタイム・ストーンを持っている。事情を説明すれば協力してくれるだろう。ステイブには俺から電話する。ワンダとヴィジョンの潜伏場所はF. R. I. D. A. Y. に調査させよう」

「わかった。アメリカ政府には連絡を？」

「放っておく。ロシアは相変わらずのヒーロー嫌いだからな。連絡したところで何か出来るとも思えん」

「それだけでも政府もそんなに馬鹿じゃないみたいだ」

と言うのはカーク。胸に付いている小さなバッジからホログラムデータが投影されている。あんなサイズでどうやってそんな機能が…

「ロス国務長官率いる部隊が南から接近中だ。完全武装のVTOLが5機、うち4機は兵士で一杯。光学迷彩を使用しているがディスプレイのセンサーには丸見えだ」

「まずいな…とりあえず兵士には帰ってもらってロスと話をしないと」

「それなら俺も協力する。政治家ってのは嫌いだけどいと困る存在だからな」

外に出るとクインジェットが荒々しく着陸し、あつという間に兵士達に取り囲まれ

た。ロスの一部下なだけあってよく訓練されているみたいだな。ロスもこっちにやってきた。

「スターク！一体どういう事だ！いきなり軍のレーダーが反応したというから来てみたら、こんなでかい宇宙船を許可なく地球に着陸させるとは！」

そこそこブチ切れているロスだが、ロキの姿を見て目をひん剥いている。

「お前は…ニューヨークの！」

「落ち着けロス！彼は敵じゃない。説明するからお前の部下に銃を下ろすように言ってくれ」

「信用できる訳ない！ニューヨークで何人死んだと思っているんだ！奴は戦犯だ！」

激おこなロスの前に両手を上げながらカークが歩み寄る。

「国務長官。過去の事はさておき、彼や他のアスガルド人は全員が避難民だ。貴国は非武装の避難民に武器を向けるような野蛮な国なのか？」

「何だと!？」

「それにだ、ここにいるロキは現在のアスガルド国王であるソーの弟だ。アスガルドと戦争する気がないなら今すぐ武器を下ろす事をおすすめする」

「何を偉そうに…お前は何者だ!？」

「ジェームズ・T・カーク。ただの艦長だよ。とにかく武器をしまってください。そんなのを

向けられたままじゃ話もできん。そもそもここはスターク・インダストリーの施設であり、ここにいるスタークの私有地だろ？俺はそんなに法律は詳しくないが、アメリカには『私有地に宇宙船を着陸させてはいけません法』でもあるのか？」

「黙れ……いつらを連行しろ！」

カークの説得を完全に無視したロス。こいつこんなに石頭だったか？

「仕方ない」

そう言つてカークは指を鳴らす。すると近付いてきた兵士達が一斉に飛んだ。とうか見えない何かに釣り上げられた、と言うべきか。兵士達は10メートルくらいの空中でぐるぐる回っているし、武器は全部明後日の方向に吹っ飛んでいくし、おまけにクインジェットも逆さまになっている。そして真上にはデイスカバリー。唯一無事な口スは周りを見て口をパクパクさせている。

「カーク、何をしたんだ？」

「デイスカバリーからトラクタービームを発射して全員を掴んだだけだ。死にはしないさ」

そしてカークはロスに向き直り、今度は強めの口調で説得を始めた。

「いいか国務長官。私は32世紀の別世界地球から来た軍人だ。21世紀の武器など一斉通用しない。銃弾やナイフはもちろんNBCR兵器も含めて全てだ。やろうと思え

「ば10分以内に地球そのものを破壊できるだけの力がある。だがそんな事はしない。我々惑星連邦は平和主義の恒星間国家なのだからな。あんたがダイヤ並みの石頭で融通がきかない人間なのはよく分かった。だが今は武器をしまつて話を聞け。分かったか？」

「…いいだろう。少し熱くなりすぎた、すまない。部下を降ろしてくれないか？」

「もちろん」

再び指を鳴らすとゆつくりと兵士達とクインジェットが降りてきた。吹っ飛んだ武器も持ち主に返ってくる。まったく32世紀つてのはどんでもない技術のバーゲンセールだな。ヘリキヤリアがおもちやレベルじゃないか。

ロスを連れて会議室に戻り最初から説明した。が、やっぱりロスはロスだった。アベンジャーズの再結集の許可は出さないと、軍が動くからお前らは大人しくしているとやばい。そろそろバナナがキレそうやばい。

「お言葉だが長官」

カークの口調からも怒りが伝わってくる。

「今の時代ではアメリカ軍が世界最強の軍隊であるという事は分かっている。しかし貴

国の軍だけでは間違いなく勝てない。というか地球上の全ての軍隊を集結させたとしても無理だろう。サノスにとつて核兵器なんかパーティークランチャーと同レベルだ」

「だがソコヴィア協定がある以上勝手に動く事は許されない。国連の委員会承認が無ければ…」

「その委員会とやらを開催するのに何ヶ月かける気だ？サノスはそんなに待つてくれんぞ。例外規定はないのか？」

「抜け穴はない。あつたら問題だからな。国連が機能不全にでもならない限り無理だ」
するとカークがとんでもない事を言い出した。

「そうか…なら当面の間は大人しくしているしかないな」

「[[[[[えっ]]]]」

俺やバナー、ロキ、ヘイムダルは『こいつ何言ってるんだ』という驚きで、ロスは『こいつ素直に言うこと聞かやん』という驚きだったに違いない。

「ならとつとと委員会を招集して活動許可を出してくれ。その間は情報収集に務めるとしよう」

「カーク、それでは…！」

「後ろから撃たれるのは嫌だろう？キャプテン・アメリカのように追い回されながらサノス達と戦うのはリスキーだ」

そう言いながらウインクをしてきた。なるほど、理解した。

「分かった。ロス、あなたの言う通りにするよ。ただアスガルド人をホテルに連れていくのを止めないでくれ。彼らは俺の客人だからな」

「それは認めよう。では私はこれで。何かあったら連絡する」

そう言ってロスは兵士達を連れてクインジェットで帰っていった。それを見届けた後、カークに尋ねる。

「それで？ 本当のところはどうするんだ？」

「さつき国連のメインサーバーをハッキングしてソコヴィア協定の中身を一通り確認した。ロスの言う通りあの協定に抜け穴はないようだ。でも…」

カークはロキみたいにニヤリとした。

「協定に書いていない事であればやっても違反にならないし当然罰則もない。違うか？」

4：アベンジャーズ、再集結

その着信音を聞いたステイブはびっくりして飲んでいたコーラを吹き出しそうになった。この3年間一度も鳴る事がなかったからだ。隠れ家で一緒にいたサムとロマノフも驚いてステイブを見ている。

「ステイブ、それは…」

「ああ…」

ポケットから取り出したのはフリップフォン。ステイブはゆっくりと応答ボタンとスピーカーボタンを押した。

「トニー？」

『ステイブ…元気にやってるか？』

「まあまあだ。そっちは？」

『もちろんみんな元気さ』

久しぶりに聞いたトニーの声にステイブは嬉しく感じた。

『ステイブ、俺は…俺は間違っていた。君はあの内乱の時も、その後も常に正面から向き合って生きてきたのに、俺にはそれが出来ていなかった。それに君やバツキーに対し

でも酷い事を言った。本当にすまなかった』

「いいんだトニー、分かっているさ。僕も謝らないといけない。ご両親の事を黙っていてすまなかった」

『両親の事は…受け入れたよ。俺も君も歳を重ねる。色々な事を割り切ったり受け入れたりして進んでいかないな。進むと言えば、実はペッピーと婚約したんだ』

「本当か？それはめでたい。みんなでお祝いをしないと」

『ありがとう。でもパーティーをやるには今起きている問題を片付けないといけない。それで電話したんだ』

「問題？」

『単刀直入に説明する。まずソーの故郷、アスガルドが滅亡した。ソーが姉貴と喧嘩したら吹っ飛んだらしい』

「……………えっ？」

思わず声が裏返ってしまった。サムとロマノフも口が開きっぱなし。懐かしい名前が出たと思ったら滅亡って…しかも姉と喧嘩して惑星が吹っ飛ぶってどんな喧嘩をすればそんな事になるんだ？宇宙はレベルが違うな。

『それでアスガルドの避難民が今地球に来ているんだ。とりあえず俺が持っている幾つかのリゾートホテルで滞在中。ここまでは良いんだが…』

その後の説明に愕然とする。アスガルドの避難船を容赦なく攻撃してきたサノス。彼はテツセラクトやヴィジョンのマインド・ストーンといったインフィニティ・ストーンを狙っている。既にサノスの攻撃で惑星が一つ滅亡している。地球外のヒーローチームであるガーディアンズ・オブ・ギャラクシー。彼らもサノスを止めるべくストーン回収に動いている。原因は不明だが32世紀の別次元地球から来た軍人、カーク・トニーも理解できないレベルの技術力を持っていて彼も協力してくれる。そして遂に地球に戻ってきたハルクことバナー。バナーの名前を聞いたロマンoffもこれには頬を染めてニツコリ。早く付き合えばいいのに。

『…という感じだ。使えん協定のせいで国連の動きは亀並に遅いが、それについてはカークに考えがあるそうだ』

「そうか…確かにこれはチーム一丸となって戦う他ないな。何をすれば良い?」

『今から座標を送る。その隠れ家から1キロ程南の空き地にカークが降下艇に乗って待機している。合流したらスコットランドのエディンバラに行つてヴィジョンとワンダをピックアップして欲しい』

「分かった。すぐに移動する」

『ありがとう。本部で会うのを楽しみにしてるよ』

「僕もだ。では」

電話を終えたステイブ達はすぐに移動を開始した。警察に見つからないように、しかし急いで動く事10分。座標の空き地に到着したが降下艇はいない。しかし空き地に入ると突然降下艇が現れた。ヘリキャリアのような光学迷彩を使用しているようだ。後部ランプから武装した男が1人出てくる。彼がカークだろう。

「君がカーク？」

「そうだ。ジェームズ・T・カークだ。よろしく」

「僕がステイブ・ロジャース。よろしく頼む。こちらは相棒のサム・ウィルソン、そして彼女はナターシャ・ロマノフだ」

「みんなの活躍はトニーやブルースから聞いているよ。一緒に戦えて光栄だ。早速移動しよう。出してくれ！」

カークが操縦席に声をかけるとゴテゴテしたロボットが無言でサムズアップしていた。ウルトロンよりロボットって感じだな。

「あれは…ロボットか？」

「そうだ。C6二足歩行ロボット。元々建設現場での作業や警備の為に開発されたんだが、パーツを変えれば高性能な戦闘ロボットになるんだ。アイアンマンのように空を自由に飛んだりビームは出せないけど、宇宙空間でも戦えるし自分で考えて戦うからなか

なか強いぞ」

そんな話をしている間に降下艇はどんどん加速していく。これは間違いなくクインジェットより高性能だな。ステイブは知らなかったがこの降下艇、レイブンの最高速度は時速3100キロメートル。ブースターを使用すれば時速130000キロメートルまで加速して大気圏脱出も可能になる。ちなみにクインジェットの最高速度はマツハ2.1。宇宙にも行けるが改修が必要である。

「忘れるところだった。キャプテン、トニーからこれを預かってきた」

「これは!？」

カークは床の格納スペースからある物を取り出した。それは盾だった。アベンジャーズ内乱時の傷は完全に修復されている。そしてユニフォームも新調されたものが入っていた。

「トニーはキャプテンが戻ってきた時に備えて準備していた。出来れば直接渡したかったそうだ」

「…ありがとう。やはりこいつが一番だ」

着替えた後カークから最新の情報について説明を受けた。ガーディアンズは間もなくリァリティ・ストーンが保管されているノーウェアに到着するそうだ。またタイム・

ストーンを管理しているドクター・ストレンジもトニー達と合流。今回の戦いに参加してくれるそうだ。ソーはニダベリアに到着したがサノスのせいで手こずっているらしい。

「なおクリントだが現在彼は自宅軟禁中だから連絡はしていない。彼には守るべき家族がいるからな。邪魔するのは良くない」

「そうだな。ワンダとヴィジョンには連絡済みなのか？」

「ネガティブ。これからしようと思っている。ビデオ通話にして…出るかな？」

カークが壁のパネルを操作するとモニターにワンダとヴィジョンが映った。あれ、ヴィジョンが人間みたいになっている。めっちゃイケメンじゃないか。

『ステイープ？それにサム、ナターシャも。どうやってこの番号を…』

「ワンダ、電話を切らないでくれ。ヴィジョンが狙われている。いや、厳密に言うともインド・ストーンが狙われているんだ。もうすぐエディンバラに到着するから一緒に来て欲しい。トニー達も動いているしバナナも宇宙から帰ってきた。もう一度チームで戦う、だから協力してくれないか？」

『何故私の額にあるストーンが狙われている？またヒドラの連中か？』

かつてマインド・ストーンはロキが杖に入れて使っており、その後はヒドラが奪ってワンダとその双子の兄であるピエトロ・マキシモフの人体実験に使用していた。最終的

にアベンジャーズが回収し、紆余曲折を経てヴィジョンの額に収まっている。またヒドラが狙い始めたとヴィジョンが考えるのも不思議ではない。

「正直ヒドラが狙っていた方がまだマシだったよ。今回の敵は宇宙からやってくる。ストーンを集めてとんでもない事をやらかすつもりなんだ」

『分かったわ、すぐに準備する。どこに行けばいい?』

既にカークは地図で着陸場所を選んでいた。その場所を告げる。

「エディンバラ・ウエイヴアリー駅の近くにあるセント・アンドリユー・スクエア・ガーデンまで来て欲しい。街のど真ん中だが素早く着陸して君達を回収する。可能か?」

『問題ないわ。今すぐ移動する』

「ではまた後で」

通話を切った後気になった事をカークに尋ねる。

「そういうえばカーク、この機体はリーダーには映らないのか?」

「もちろん。このレイブン、そして俺の艦であるディスカバリーには遮蔽装置が搭載されている。電磁スペクトル及び既存の全センサーから身を隠し、尚且つ視覚からも消し去るステルス技術、それが遮蔽装置だ。この世界の地球の技術では100%検知不能だから安心してくれ」

「すごい技術だな。音も聞こえないのか?」

「当然。まあ大気圏内だと離着陸時の風でバレルかもしれないな」

ロマノフは機内に置いてある武器に興味津々だった。

「これは拳銃タイプ、でこつちがライフル…」

「それは我が連邦の標準装備だよ。拳銃型がタイプ2・フェイザー、ライフル型がタイプ3・フェイザーだ。どちらも極めて高威力だから取り扱いにはご注意を」

「…そんなに威力があるの？このサイズで？」

「どっちも人体を一瞬で蒸発させる程度の破壊力がある。タイプ2なら最大出力で巨大な岩石を吹き飛ばせるぞ。一応麻痺モードがあるから非殺傷兵器としても使えるけど、至近距離からぶつ放すと肉体や内臓が機能不全起こして死んじゃう事も稀によくある」
「おう…」

ロマノフは静かに持っていたタイプ3・フェイザーを元の位置に戻した。

「でもあなたが持っている武器は実弾兵器よね？」

「俺は元々海兵隊で訓練を受けて、その後特殊部隊の訓練を受けた。フェイザーは便利だし強力だけどパワー切れになったらただの鉄屑になる。だから実弾兵器の方が好きなんだ。実弾兵器は今よりあまり進化してないよ、ほら」

そう言っただけは最初会った時に持っていたアサルトライフルをロマノフに渡

した。確かに見た目はアメリカ軍が使っているM4カービンにそっくりだ。サブレッツサーにフォアグリップ、ACOGのような照準器が付いている。

「サイトが見やすくいいわね。それに近接用の投影型レティクル：持ちやすいし気に入ったわ」

「デイスカバリーに戻ったらもつと色々な武器がある。この戦闘スーツ一式も用意するよ。スーツがあればこういうのも使えるようになる」

カークは左腕から素早くシールドを展開した。僕の盾みたいだ。

「これは格納型シールド。ほぼ全ての実弾兵器を止める事が出来る。時間制限付きだけどエネルギー兵器も防御可能、フェイザーも含めてね。試験では戦闘機搭載の30ミリ機関砲も食い止めた。でもレールガンを撃ったら流石に10発くらいで壊れたよ」

「いやレールガン止めれるだけでもすごいでしょ」

ロマンフがそう言うのとカークは悲しげな表情で首を振る。

「そうでもないさ。俺が所属している惑星連邦は設立以来約10世紀の間、とんでもない敵達とひたすら戦ってきたんだ。流石にサノスのようなイカれた野郎はいなかったけど、それでも敵は強力な軍隊を保有する恒星間国家だったり機械生命体だったりした。その過程でとんでもない数の軍人や民間人が死んだ。俺も多くの友人を失った。俺の艦も、これらの武器も、全ての設計図は先人達の血で書かれている。我々は今の世

代を守る為、そして次の世代を守る為にも技術開発を止めてはいけない。だから決して現状に満足してはいけないんだ」

「10世紀も戦いを!?尋常じゃないな…」

彼のいた宇宙にはとんでもない連中がうじゃうじゃいるということか。この世界の人類は惑星間移動すらままならない状態だ。もつと宇宙関連技術の発展が進まないとな。この戦いが終わったらトニーやバナーに話してみるか。あとワカンダにも協力してもらえないかな。

エディンバラの着陸地点には既に2人が待っていた。カークはレイブンを静かに着陸させてから遮蔽装置を解除。2人を素早く機内に招き入れた。

「ステイプ、それにみんな。久しぶり。あなたは初めましてよね?私はワンダ・マキシモフ。彼はヴィジョン。よろしくね」

「ジェームズ・T・カークだ。こちらこそよろしく。ではアベンジャーズ本部に行こう。でもよく考えたら遠いな」

確かにこのエディンバラからニューヨークまでは直線距離で約5000キロメートルは離れている。1時間以上はかかるだろう。

「今は時間が幾らあっても足りないし…よし、ちよつと近道するか。全員座席に座って

ジェットコースターみたいな安全バーを下げてくれ」

「どうするつもりだ？」

「ブースターを使う。このレイブンは追加パーツ無しで第三宇宙速度を超える速度を出せるんだ」

壁を背にする形で配置されていた座席が回転して正面を向く。こいつは嫌な予感しかしない…

「第三宇宙速度…時速換算で60100キロメートルより速く飛ぶのか!？」

「ブースターを使えばこいつは時速130000キロメートルまで加速する。ここからニューヨークまでなら3分くらいで着くぞ。よし、ブースター点火!思い切りかつ飛ばせ!」

数秒後、機外から凄まじい音が響くのと同時に一気に加速を開始した。僕達は極めて強いGのせいで座席に押し付けられている。正直息も出来ないくらいつらい。なのに隣にいるカークはまるで子供のような笑みを浮かべている。しかもこつちを向いて話しかけてきた。

「そう言えばみんな飯は食べた?腹が減ってるならデイスカバリーで用意するよ。ハンバーガーから寿司まで何でも作れるからな」

「そ、それは…楽しみ、だ!」

「ちなみに俺が一番好きなハンバーガーはカールスジュニアだな。あのパティが美味しくてたまらないんだ。次点でバーキン、あとベガスのハートアタックグリルも最高だな」

呑気にバーガーの話をするカーク以外の全員が考えていたのは、こいつ体が丈夫過ぎるしメンタル強いな！ってことだった。

やっぱブースターで加速するのは楽しくていいな！みんな静かだったけど疲れてたのかな？まあいいか。アベンジャーズ・コンパウンドに着いたのはその3分後だった。ロスにバレないようにアメリカが保有する偵察衛星は全てハッキング済み。キャプテン達が映らないようにしてある。着陸するとトニーとバナー、ストレンジが待っていた。

「やあステイプ」

「トニー」

トニーとステイブは和解の握手。お互い笑っている。これが見たかった。原作みたいにサノスにやられないようにしないと。で俺はストレンジと握手。

「初めまして。ジエームズ・T・カークです」

「ストレンジだ、よろしく。トニーから君は別世界から来たと聞いた。どんな世界なのか興味があつてね」

「なかなかスリルがあつて面白い世界ですよ」

和やかに話す一方で…

「や、やあナターシャ…」

「私の事を覚えていたのね、ブルース・バナー。最後の通信は途中で切られるし全然連絡もないし探しても見つからないし、てっきり忘れられたのかと思つてたわ」

「そんな、君の事を忘れるなんてありえないよ」

「ならあなたは3年もどこをほつつき歩いていたのかしら？」

「いや、それには複雑な事情があつて…」

「事情？あらそうなの。なら話をしましょうか、その事情とやらについて」

「待つて…首が締まる…引きずるのは…」

ブルースは般若と化したナターシャに首根っこ掴まれて建物の中に消えていった。明日の朝食は赤飯でも用意しないと…でも赤飯文化はアメリカじゃ通用しないか。

「これでカップル成立かな」

「そうだな」

その場にいた全員でうんうんと頷く。

5：出撃

キャプテン達がアベンジャーズ本部に到着した翌日。全員でディスクバリリーの会議室に移動していた。レプリケーターでそれぞれ好みの朝食を用意して優雅な朝食タイム。トニーとステイプは昨日の夜遅くまで語り合っていたみたいで、今は昔みたいに仲良くなっている。俺はストレンジやサムに32世紀の話をしてあげた。タイムトラベルに興味を示していたけど絶対やめとけと注意しておいた。そしてバナーとナターシャだけど、バナーは妙に痩せてるしナターシャは肌がツヤツヤしている…何も言うまい。

「さて、では今後についての話をしよう」

俺はホログラムでガーディアンズとソーの居場所を表示させた。

「まずガーディアンズだがリアリティ・ストーンの回収に成功したとの連絡を受けた。現在地球に向かってる。そしてソーはムジョルニアに変わる新たな武器を作らせたそうだ。その過程で焦げたみたいだけど」

「焦げた…？」

なんで武器作るだけで焦げるのかね？まあ普通はそう思うよな。

「これで地球に4つのストーンが揃う事になる。サノス、そして我々が手に入れていないソウル・ストーンについては、ガーディアンズのガモーラしか場所を知らない。故にサノスは間違いなく地球に来るだろう」

そこでサムが口を挟んできた。

「それはわかったけど問題がある。地球のどこで戦うんだ？都市部は論外だ、民間人の犠牲を出す訳にはいかない。かと言って俺の国で戦ってもいい、なんていう国はないだろう」

「確かにその通りだ。今考えているのは月の公転軌道でサノスのサンクチュアリIIを沈めてしまう作戦だ。火力はそこそこあるが所詮は凶体がでかいだけの船だ、あつという間に沈めてやる。地球に向かう破片等はフェイザーで蒸発させれば問題ない」

「それなら確実にサノスを殺せるだろうが、あいつが持っているパワー・ストーンも一緒に吹っ飛ばさないか？」

トニーの主張も無視できないな。

「その可能性は残念ながら大いにある。でも狙う奴がいるならいつそ破壊した方が良くないか？」

「それはまずい。パワー・ストーンが物理的に破壊されると、とてつもなく破壊的なエネルギー放射が発生する。月でそんな事をするとも月はもちろん地球にも甚大な被害が出

るだろう」

ストレンジさんそれは初耳っすよ…

「ならこちらから打って出るしかないな」

「だがどこで？地球以外で大気が存在して戦っても問題にならない惑星なんか…」

「1つある」

俺はモニターにとある惑星を表示した。

「タイタン。ここには大気もあるし人もいない。完全に放棄された無人の惑星だ。ここなら好きだけ暴れる事が出来る」

「確かに大きな惑星だ。ならここにしようか」

「異議なし」

全員の同意を得られた上で次の議題へ。

「ヴィジョンに聞きたいんだが、その額にあるマインド・ストーンはやっぱり外せない感
じ。」

「そうだ。これは体と一体化しているから外す事は不可能だ」

「やはりか…実は試したい事があったんだが…」

「どんな事だ？」

「実際に見てもらったほうが早いと思う。ロキ、すまないがスペース・ストーンを貸して

くれないか? すぐ返すから」

「ん? いいぞ、ほれ」

ロキから借りたスペース・ストーンをレプリケーターにセット。もちろん直接接触すると危なさそうなので手にシールドを張ってある。

「ありがとう。データ、やってくれ」

「了解です」

ストーンのあちこちをスキャンする。しばらくすると結果が出た。

「艦長、スキャン完了しました」

「出来そうか?」

「可能ではありません。しかし作成には12時間程掛かります」

「艦の余剰エネルギーをレプリケーターに全部回したらどうだ?」

「それでしたら15分で出来ます」

「やってくれ」

「了解」

ストーンをロキに返してレプリケーターが動き出すのを眺める。それを見たバナナが顔をひきつらせながら聞いてきた。

「なあジム、まさかとは思うけど…」

「そのまさかだ。軽く説明すると、本艦に搭載されているレプリケーターは分子を材料として、実物とほとんど変わりのないコピーを作り出す事ができる。例外として生体や一部の物質は作成できない。だがスペース・ストーンはコピーできるようだ」

「そうそう、みんなには俺の事をジムと呼んでもらう事にした。いつまでも名字だとなんか嫌だし。てかレプリケーターは放射性物質の類いも作成出来ないはずなんだが：微弱なγ線だから大丈夫なのかな？まあいいか。てかみんながフリーズしてる。」

「どうした？なんか変な事言ったか？」

「いやいやいやいやおかしいだろー！」

「そう言いながら立ち上がるのはロキ。」

「インフィニティ・ストーンは概念を司るエネルギーの結晶石だぞ？それをたった15分でコピーできる？あり得ない、というかあつてはならない事だ！宇宙の均衡が崩壊してしまう。そもそもコピーしてどうするつもりなんだ？」

「サノスを騙してからかつてやろうかと思つてね。俺が今作っているのはストーンの劣化コピー品だ。実際に使おうとしたら崩壊するようにしてある。俺のプランはこうだ。スペース、マインド、タイム、リアリティの4つの海賊版を作つてタイタンへ持つていく。それに釣られてやつて来たサノスと愉快的仲間たちを殲滅する。もちろん本物は地球で保管しておく」

本物は遮蔽装置付きの箱かなんかを作ってしまったっておけばサノスも探知できないだろう。見た目と波長が本物にしか見えない偽物を用意すれば絶対にそっちに釣られるはずだ。

「確認なんだが、ストーンの完全なコピーは作成できないんだよな？」

その疑問についてはデータが返答する。

「不可能です。本艦のジェネレーターを全力稼働させたとしてもエネルギーが全然足りません。実行するには最低でも複数のクエーサー、もしくは超大質量ブラックホールレベルのエネルギーが必要です」

「そうか……」

ロキは心底ホツとしたようだ。確かにあんなのをポンポンコピーされたらたまったもんじゃないしな。しかしヴィジョンは納得出来ないみたい。

「ジム、君の作戦を採用した場合、私は地球で留守番をしなければならぬという事だな？ 皆が宇宙の為に戦うのに自分だけ地球にいるのは納得出来かねる。だが君の主張するストーンの破壊については同意する。パワー・ストーンは力の概念の結晶だから破壊されると甚大な被害が出る。一方精神の概念の結晶であるこのマインド・ストーンが破壊されてもそこまで被害は大きくないだろう。せいぜい近くにいる人が吹っ飛ばす程度で済むはずだ」

ヴィジョンの発言に会議室の空気が凍った。

「ヴィジョン、自分が何を言っているか理解しているのか？ マインド・ストーンを破壊すれば君も死ぬんだぞ？」

「もちろん理解している。だが地球を守る為なら必要な犠牲だ」

「それは隣で半ベソをかいているワンダを見ながら言ってくれよ」

ヴィジョンとワンダは恋人の関係だしな。ワンダは涙目でヴィジョンの両肩を掴んだ。おや、ワンダの様子が…？

「どうしてそんな事言うのやめてよ駄目よ絶対に認めない私を置いていかないでお願いでしよ私達恋人でしよ無視しないでよ私を捨てないでずっと一緒にいて死ぬなら一緒に死なないと駄目よ貴方を守る為ならなんだってやるわ貴方は私が守るから命を懸けて守るからだから私から離れないで勝手に大事な事決めないできちんと相談して酷い事しないでもう大切な人がいなくなるのは嫌なのお願い」

「おおお落ち着けワンダ」

あれれ〜おかしいぞ〜？ いつの間にワンダはヤンデレになってんの？ みんな引いてるやん。いや〜ヴィジョンには献身的な彼女がいて羨ましいな〜（棒

「ワンダも反対しているしストーン破壊は駄目だな。取り外すのも無理だし」

「それについて考えがある。ワカンダに協力を仰ぐのはどうだろうか？」

ステイブの案はワカンダの王であるティ・チャラに協力をお願いするというもの。確かにあの国は地球上で一番発展しているしな。

「そんな国が地球にあるとは……だがそれだけ技術力が発展しているなら可能性はあるな」

「僕からコンタクトを取ってみるよ。あの国は信頼できる」

「頼んだ」

ステイブが連絡したところブラックパンサーことティ・チャラが協力してくれる事になったので、ヴィジヨンは地球待機組になった。ただヴィジョンだけ置いてけぼりだと発狂しそうなワンダもセットでお留守番。あとストレンジも同じくお留守番に。ストレンジには個人的にお願いをしておいた。

「ストレンジ、これを渡しておく。もしこの通信機器が起動したらタイム・ストーンで時を戻してくれ。勝てるまでやり直したいからな」

「保険という訳だな、わかった。だがジム、我々が負ける未来はきつと来ないだろう」
「そう願っているよ」

その後3つの偽ストーンが完成した。実際にロキやストレンジに確認してもらい合格点を貰った。また遮蔽装置付きの大きな箱も用意した。これに入れておけばストー

ンは探知できない。

「あとはガーディアンズとソーが戻ってくれば…」

そんな事を言っているとデイスカバリーの横に光の線が出現し、中からスペース・ポッドが飛び出してきた。あれ、ビフレストって人だけじゃなくて宇宙船も飛ばせるんだっけ？まあいいか。スペース・ポッドが格納庫に入った直後に緊急通信が入った。

『デイスカバリー、こちらベネター号！緊急事態だ！サノスに見つかった！』

「ピーター、状況は？」

『攻撃が激しい！このままじゃ捕まっちゃう！』

「すぐに救援に向かう。あと5分持ちこたえてくれ！」

『わかった！』

通信を切断して全員に向き直る。

「という訳で、出撃しよう。まずはワカンダでヴィジョン、ワンダ、ストレンジを降ろす。

その後すぐに宇宙に上がる」

「分かった。そう言えばジム、ロスの対策はどうするつもりなんだ？」

「それだが…ちよつとみんなに協力してもらいたい」

アベンジャーズ・コンパウンドから10キロメートル程離れた場所に白いバンが駐車していた。見た目は普通の車だがその中身は監視装置で埋まっている。国務省の偽装監視バンは長官命令でデイスカバリーの様子を遠距離から監視していたのだ。

「おい、あれを見ろ。動きだしたぞ!」

「何だって!」

モニターには徐々に姿が消えていくデイスカバリーが高度を上げながら大西洋に向かって行く様子が見えた。

「長官に報告だ、急げ!」

報告を受けたロスはずぐにカークから渡された連絡先に電話をかける。

『カーク艦長だ』

「国務長官のロスだ。艦長、君はどこに行くつもりなんだ?」

『もちろん地球を救う為に宇宙へ行きます。敵グループの首謀者の現在位置が分かりましたので。それより委員会の招集はいつです?』

「それは…まだだ。各国との調整に時間が掛かる。だからそれまで待つてくれ」

『正直待つていられません。地球上で戦うとニューヨークやソコヴィアレベルの被害が出るでしょう。例え勝つてもあとからギャンギャン文句を言われるのが容易に想像できる。だから地球では戦わず宇宙で戦う事にします』

「…艦長が行くのは止めないがスタークや他のヒーロー連中が行く事は許さない。協定にサインしている以上従つてもらわないと困る」

その後聞こえてきた言葉にロスは凍りついた。

『そう言うと思いましたよ。だからちよつとした強硬策を取らせてもらいました。スタークや他のヒーロー達の家族や大切な人を人質にとりましてね』

「……………は？」

絶句するロスの耳にはスタークやバナー達の怒号が聞こえてきた。ペツパーを返せだのロマンノフに何かあつたらぶつ殺すだの…どうやら本当にやったみたいだ。

『いや厳密に言うとな彼らの家族や大切な人の近くに暗殺に特化した戦闘ユニットを常時配置しています。高度なステルス機能を備えているので、あなた方の力では把握すら出来ませんがね。スタークや他のヒーロー達も本当は行きたくないけど家族が人質になつてから仕方なく戦いに行く事を決めたんです。だから文句は私だけに言つて下さい。それにクリントとスコットは今回声をかけていないのでご心配なく』

「あ、あり得ない！そんな馬鹿な言い分が通るとでも…」

『通りますよ。あなたが大好きな協定にはいろんな事がごちゃごちゃと書かれています
が、書かれていない事を罰する事は出来ないでしょう？それに私は協定に参加していま
せんし』

まさかヒーローの家族を人質にとって、無理やり戦わせる奴が出てくる想定をロス
もちろん誰もしていなかった。

『まあそういう事なので我々は行きます。恐らく1週間もしないうちに帰ってくると思
います。祝勝会の準備でもしておいて下さい。ではご機嫌よう』

そう言ってカークは通信を切った。しばらくロスはフリーズしていたが、受話器を叩
きつけると同時に盛大にキレた。

「ちくしょーめ!!」

「みんな協力ありがとう。これでロスや国連は放置できる。早速移動しよう。データ、
ブラック警報発令。目的地はワカンダ上空」

「了解、ワカンダにジャンプします」

6：救出任務

ワカンダでヴィジョン、ワンダ、ストレンジの3人を降ろした後、すぐに胞子ドライブでピーターのところまで連続ジャンプ。やっぱ胞子ドライブはチート技術だよなあ。みんなで艦橋に移動して雑談しているうちに現場に到着したが…

「あちゃーこれはひどい」

どでかいサンクチュアリⅡがベネター号に向けて集中砲火を浴びせている。弱いもののイジメにも程があるだろうに。小型軽量で機動性も高いベネター号はうまく攻撃を避け続けている。

「こちらデイスカバリー、待たせたな。これより攻撃を開始する。ピーター、俺の船の影に隠れる。あいつの攻撃で沈む事はないからな」

『待ちくたびれたぜ！』

ベネター号の退避を確認してから俺は指を鳴らす。

「データ、異世界のヒーロー達に我々の戦いを見てもらおうじゃないか」

「そうですね、艦長。あのイカれたハゲに惑星連邦宇宙艦隊の授業料がいかにかに高額か教育してやりましょう」

サンクチュアリⅡはその巨大な船体に無数の対地対空両用砲及びミサイル発射装置を備えている戦艦だ。その戦闘力は宇宙一であるとサノスは自負していた。パワー・ストーンの保管場所であるザンダー星もこの船で焼け野原となつたし、今まで戦ってきたどんな敵もこの船を沈める事は出来なかつた。

サノスにとって不幸だつたのは相手が悪すぎた事だつた。まずデイスカバリーのシールドが硬すぎてサンクチュアリⅡの攻撃が全く効いていない。全ての攻撃が命中しているにも関わらず、デイスカバリーの船体には傷一つ付いていない。一体あのシールドは何で出来ているんだ、とサンクチュアリⅡの乗組員全員が思っていた。

更にサノスを驚かせ、そして苛つかせたのはデイスカバリーが搭載している兵装だつた。あの船体から放たれる青いレーザー光線はサンクチュアリⅡの船体を容易に切り裂いてくる。ステイツマン襲撃時にデイスカバリーから受けた攻撃のせいでQシップは既に宇宙の藻屑となり、船体の修復については簡単に済ませた状態だつた。それを見

越したかは不明だが、デイスカバリーはその修復箇所を狙って攻撃してきた。そのせいで船体右の翼が中央部分からへし折れてしまった。

おまけに船体のあちこちにミサイルが着弾すると、船体に穴ができるかわりに何故か船内のシステムが次々とダウンしていく。デイスカバリーから発射されたイオン・ミサイルの集中攻撃によるものだった。射撃管制装置や各種センサー等が次々と機能不全を起こし、挙句の果てには主機関までもが緊急停止。この攻撃でサンクチュアリIIは完全に沈黙し、丸裸の状態となってしまった。非常電源により最低限のシステムは稼働しているが、戦闘艦としての機能はゼロになった。

そんな船内でサノスの部下達が右往左往している中、ある女性が拘束装置から抜け出す事に成功した。装置に供給されていたパワーが切れたおかげだ。女性は痛む体を引きずりながら愛用の武器を回収して外の状況を確認する。窓から外を見ると見慣れない宇宙船と見慣れた宇宙船がいた。

その女性、ネビュラは見慣れた宇宙船ことベネター号に通信を繋いだ。

「艦長、敵艦はイオン・ミサイルにより完全に沈黙しました。最低でも30分は再起動不能となるでしょう。それに翼を大きく損壊しているので電子機器が復旧したとしてもすぐには動けないかと」

「よくやった、データ」

トニーはあつという間に敵の巨大戦艦を無力化したデイスカバリーの性能に驚きを隠せなかった。ステイブ達も啞然としている。だが当のカークはつまらなそうな表情だった。

「どうしたジム？なんでそんな顔してるんだ？」

「いや、どうにもしつくりこなくてね。なんというかこう、噛みごたえがないなど。あんなどでかい船なんだからもつと強力な兵器を搭載してると思ってた。シールドがないのは分かっていたけどシヨボイ砲とミサイルしか積んでないって…はあ」

どうやらもつと派手に戦いたかったらしいな。

「まあ気持ちはわからんでもないけど、とりあえずピーター達が無事だからいいんじゃないか？」

「それもそうか。よし、じゃあ針路をタイタンに向けるとしようか。あ、でもその前に」
そう言うとかークは折れた敵船の翼の近くに船を飛ばし、あろうことかその翼をトラクタービームで引き寄せ始めた。

「な、何してんだジム?」

「こんな事言わなくてもわかっていると思うけど、この艦橋にいる全員はみんな優しい心を持っている。落とし物を見つけたら持ち主に返すのは当然の事だろう? だからこの折れた翼を返してやろうと思ってるね。ただし思いつき振りかぶって投げつけてやる。なーに、パワー・ストーンを持つてるサノスならノールックで、しかも片手でキャッチできるだろうよ!」

どうあがいてもオーバーキルじゃないか。だが放り投げる前にピーターから通信が入った。

『ジム、そのデカイ破片を投げつけないでくれ! 敵の船に味方がいる!』

「味方だつて? スパイでも忍ばせていたのか?」

『違うの。私の義理の妹、ネビュラがサノスに捕まっていたみたい。でも混乱に乗じて船から脱出しようとしているの。お願い、彼女を助けて!』

ガモーラの話だとサイボーグ化したネビュラから通信が入ったそうだ。昔は殺し合っていたらしいけど少し前に和解してサノス打倒の旅に出ていたらしい。

「家族なら絶対に助けないとな。分かった、何とかしよう」

通信を切ったカークは即座に救出作戦を計画した。参加するメンバーはカーク、俺、ステイブ、そしてソー。短時間で素早く任務をこなすという訳だ。

「だがジム、どうやってあの船に乗り込むんだ？あの降下艇を使うのか？」

ステイーブの質問にジムは首を振る。

「時間がない。だからこれを使うんだ。みんな胸に付けてくれ」

渡されたのは小さな楕円形のバッジみたいなもの。いつもカークが左胸に付けているものと同じだな。

「詳しい説明は省くがこいつには転送装置が組み込まれている。これを使って直接乗り込む」

「て、転送装置？」

「ここの事だ」

そういうと俺の目の前にいたカークが突然消えてステイーブの後ろに出現した。こんな小さな装置でワープができるのか!?! 32世紀ヤバいな。ちよつと練習したけどこれは便利だ。

「ディスプレイが敵艦の上を通過する時に転送装置で侵入。負傷しているネビュラを確保したらディスプレイに戻りタイタンへ撤退する。所要時間は5分もかからないな」

「交戦規定は？」

「ステルスを維持。極力見つからないようにする。だがバレた場合は派手にやろう。捕

虜はいらん、皆殺しだ」

サプレッサー付きアサルトライフルに弾倉を入れながら冷静に話すカークの目は軍人のそれだった。チェストリグには各種グレネードや予備弾倉、レッグホルスターには拳銃型フェイザーが収まっている。

もうネビュラ捕まってるんか。でも救出できるならしておかないとガモーラがサノスに連れて行かれる可能性があるからな。急いで救出しよう。

「よし、行くぞ」

他の3人に合図してサンクチュアリⅡの船内に転送。転送場所は倉庫のような場所
で無人だった。HUDにはネビュラの位置が表示されている。ここから20メートル
離れた部屋に隠れている。

「こつちだ」

通路を進み、曲がり角を覗き込むとチタウリ・ソルジャーが廊下をうろついていた。
しかもこつちに来る。ハンドシグナルで3人を待機させ、俺は腰のベルトからある物を
取り出した。両手で握れるほど長い柄と斜めに傾斜した鍔を持つそれは、一見ナイフの
ように見えるが肝心の刃がない。チタウリが曲がり角に差し掛かった瞬間、俺はスイッ

チを入れながらチタウリの胸にそれを突きつけた。

その瞬間、ぼんやりとした白色光に縁取られ、不気味な輝きを放つ真つ黒な刀身がチタウリの胸を貫いた。力と敏捷性強化、更には電子神経回路網によるサイバネティクスの補強まで施されたサイボーグであるチタウリだったが、このダークセーバーの前には無力だった。黒いプラズマブレードが一瞬で反応炉を蒸発させ、チタウリは何が起きたかわからない、という表情のまま死んだ。

「ジム、それは？」

死体を倉庫に押し込んだ後にソーが聞いてきた。

「こいつはダークセーバー。プラズマブレードを展開する剣だ。静かに殺すなら刃物が一番だしな。隣の部屋だ」

部屋に入ると壁際に座り込みこちらに銃を向けている女性がいた。ネビュラだ。

「おっと撃つな、味方だ。ガモーラから君の救出依頼を受けた」

「あんた、達は……？」

「アベンジャーズ、地球のヒーローチームだ。まあ俺は違うけど。とにかく行くこう」

でも部屋を出た瞬間警報音があちこちから鳴り始めた。

「バレたか!？」

「みたいだな。データ、急いで戻ってこい！」

『了解、到着まで30秒』

でも敵は30秒も待つてくれない。通路の奥から敵がやってきた。

「こっちは俺とソーが守る。ステイープ、トニーは反対側を頼む。あと30秒だけ耐えれば良い！」

「分かった！」

ソーが新しく作ったストームブレイカーをぶん回して暴れている横で、俺はNV4で敵を倒していた。威力不足かとも思っていたが普通に倒せるみたいだな。しかし敵がやたらめつたら多い。

「あと15秒！」

「敵が多すぎるぞ！」

トニーやステイープも大変そうだけど待つしかない。それに時間稼ぎをするにはピッタリのデバイスがある。チェストリグから反重力グレネードを取り出して2つをステイープに投げる。

「ステイープ、これを使い！敵を足止めできる！」

「わかった！」

俺もグレネードを敵の足元に投げつける。すると半径2.5メートル内の重力が消失して敵は宙に浮いてもがき始める。これが反重力グレネードだ。浮いてる敵を撃ち

殺しつつ、ついでにプラズマグレネードもあるだけ全部投げつけておく。

『艦長、まもなく到着。カウントを開始します！』

「わかった！間に合いそうにないならそっちで強制的に転送してくれ！みんな、俺が合図したら転送装置を起動しろ！」

「了解！」

NV4の弾を使い切ってしまったので、レッグホルスターから抜いたタイプ2・フェイザーで攻撃。敵が一瞬で蒸発しやがる。これは危ないけど威力は十分だ。次からタイプ3・フェイザーも持ってこよう。

「ジム、あれを見ろ！」

ソーに言われて通路の奥を見る。するとなんか強そうな4人組を従えた大きくて紫色の野郎がいた。反射的に俺は紫色の奴を指差し叫んだ。が、たまたまその名前をど忘れしてしまった。

「みんなあれを見ろ！ハゲだ！つるつるの紫ハゲが来たぞ!!」

「ぶっぶっぶっ……！」

それを聞いたネビュラが吹き出しサノスは動きを止めた。そうだ、あいつの名前はサノスだった。理由は不明だがどうも怒っているみたいだ。まあ船はボロボロにしたし、チタウリも殺しまくったし、怒るのも無理はないかな。

『3……2……1……!』

「今だ!」

顔を真っ赤にしたサノスがチタウリを押しつけながら突進してきたけど、俺はネビュラを抱えて転送装置を起動して一瞬でデイスカバリーの艦橋に戻った。トニー達も怪我なく戻ってきた。

「作戦成功、全員無事で何よりだ。データ、遮蔽装置起動。ベネター号を掴んでジャンプしろ」

「了解です、艦長。タイタンまで胞子ドライブで連続ジャンプを開始」

「クソ! また逃げられた!」

サノスは怒り狂っていた。あと少しでリアリティ・ストーンを手に入れるところだったのに、あの忌々しいデイスカバリーに邪魔された上、サンクチュアリⅡも大損害を被った。更に捕らえていたネビュラも奪還される始末。おまけに……いや、髪の話はやめ

よう。

「サノス」

そんなサノスに声をかけるコーヴァス・グレイヴ。

「なんだ？」

「あのディスカバリーと呼ばれる船からインフィニティ・ストーンの反応を検出しました」

「ほう、いくつだ？」

「4つです」

つまり今も場所が不明なソウル・ストーン以外の4つ全てがディスカバリーに搭載されているということになる。

「奴らの現在位置は？」

「タイタンに向かっているようです」

「…タイタンか」

かつての故郷に敵が向かっている。そう聞いたサノスは一瞬だけ懐かしさを感じた。

「船が直り次第タイタンへ向かう。最悪の場合、大気圏に強行突入して構わん。数で攻めれば勝てるだろう」

7：待ち伏せ

よし、タイタン到着！大気圧及び大気性質は人間が問題なく呼吸可能である事を確認した。でも所々で重力異常が起きている。かつて住んでいたタイタン人が築き上げた廃墟や残骸があちらこちらに散乱している。廃墟マニアはさぞ喜ぶだろうな。

「ネビュラ！」

「ガモーラ……」

タイタンの地表で2人の姉妹は無事に再開を果たした。良きかな良きかな。

「怪我はそこまで酷くないみたいだけど、かなり酷い拷問を受けていたみたいだな」

「大丈夫……痛いのは慣れてるから。それにこれくらいで休むのは性に合わない。私も戦うわ」

「ありがとうネビュラ……それにしてもサノスめ、絶対に許さない。頭に脱毛剤かけてやる」

「ぶっ！」

どうやらネビュラは俺のハゲ発言がツボっているらしい。どう見てもハゲだけど周りの連中にとってサノスは上司だから言えないんだろうな。でもサノスがフサフサに

なったらそれはそれで面白そう。ロキみたいなサラサラヘアのサノス：あかん、視界に入っただけで腹筋崩壊する。昔海外のシャンプールのCMでおっさんが女性みたいなサラサラヘアになってたやつを思い出したわ。

それはさておきサノスが来る前に準備をしておかないとね。まずガーディアンズが入手したりアリティ・ストーンと海賊版を作成。本物は5分で地球に戻りワカンダに置いてきた。ヴィジヨンのマインド・ストーンは時間がかかるけど取り外し可能だそう。な。良かった良かった。

タイタンに戻ってから海賊版ストーン4つを収めた箱を開けた場所にセット。蓋を開ければストーンが綺麗に並んでいるのが見える。金ピカ手袋に装着するまでは本物と同じように振る舞うけど、そのパワーを使おうとした瞬間に破壊するようになっていく。その時の表情はカメラで見るとしよう。ついでにロングヘアのウィッグも入れておいてやろう。

次。タイタン軌道上に機雷を大量に設置した。アメリカ海軍が運用している Mk 60 キャプター機雷のように、目標を感知すると発射管に装填されたミサイルが発射される。これは有り余っているポイントで購入しました。ミサイルの種類は7割がイオン・ミサイル、2割がデコイ、そして残りの1割が光子魚雷。軌道上で確実にサンクチュア

リIIを破壊する為だ。

だがあのデカブツをサノスごと吹っ飛ばす訳にはいかない。あいつの手にはパワー・ストーンが残っているからな。船の中核、具体的に言うとならサノスがいる艦橋部分以外を破壊するようミサイルにプログラムしておいた。そうすれば間違いなくサノスはストーンの力を使ってこちらの攻撃を防ぎながらタイタンの地表に降下するだろう。

念の為メンバー全員に個人用シールド発生装置とコムバッジを渡してあるからやばくなったら転送で逃げる事ができる。敵がどれだけタイタン地表に降りてくるかはわからないけど、明らかに数で押されてまずい状況になったらデイスカバリーの格納庫からあるものが投下される。正直使いたくないけど宇宙を守る為ならやむを得ないよね！

「…という感じの作戦だけど何か質問は？」

みんなの前で説明を終えるとナターシャが手を挙げる。

「まずい状況になったら使用すると言ったあるものって具体的にどんなものなの？」

「2つある。1つは極めて特殊な戦闘用サイボーグ。もう1つは、その…これ」

「何それ？」

俺は足元に置いたりユックサックから緑色の物体が入った小さなアンブルを取り出した。

「連邦内での呼称は多用途広域制圧兵器となっているが、ずばり言ってしまうとこいつの正体は生物兵器だ。正式名称はマンティコア」

そう言うのと全員が一斉に後ずさる。マンティコアは *Call of Duty: Advanced Warfare* でおなじみの最終兵器。アトラスはとんでもないものを作ってしまった。ちなみにこれもポイントで購入した。てか生物兵器なのに意外と安く驚いた。もっと高くてもいいと思うだが。

「ジム、流石にそれは駄目だろ。いくらなんでも大量破壊兵器を使うのは……」
顔を青くしたピーターがそう言うけどこれは大丈夫なやつだぞ。

「これはただの生物兵器じゃない。DNA爆弾とも呼ばれるこのマンティコアは使う前にDNA登録が必要になる。登録されたDNAの生物には一切の効果を及ぼさないんだ。だから生物兵器の使用条件の厳しさや味方への懸念が殆ど存在しない。僅かな胞子だろうと吸引すると即死する致死量だから、防護服程度では意味を成さない感染力を持つぞ。核兵器よりピンポイントで、化学兵器よりパワフル、そして既存の生物兵器より使いやすいという正に画期的な戦略兵器！ちなみにコストも安いから政治家も納税者もニツコリだ。それに当然だけど使った後に中和剤をまけば兵器は死滅するから安心してくれ」

ブルースが恐る恐る聞いてくる。

「まさか…既に実戦で使った事があるのか？」

「もちろんある。とある惑星で大規模なテロが発生して、その惑星の大統領や側近達が入質に取られた事件があった。その時戦争していた国に唆されたテロリストの作業でな、要求に応じなければ入質全員を殺すと言ってきた。だがテロリストとは交渉しないのが連邦のルール。それに戦時だからとととと事件を片付けないといけなかった。連邦所属の民間人・政治家・軍人は全員DNA登録をされている。あとはシンプルだ。犯人のDNA登録を無効化した上で、入質がいる建物に特殊部隊がマンティコアを流し込んでテロリストは全員死亡、事件は解決って話だ」

「テロリスト相手に生物兵器使うのかよ…」

全部ウソだけだね。

「最初は連邦も生物兵器の研究、製造、保有を禁じていた。だが敵が遠慮なく使ってきて複数の惑星が壊滅した事をきっかけに連邦も持つようになったんだ」

「今までの常識が通用しない敵って訳か」

「そうだ。30世紀に入ってから開発されたのがこのマンティコア。使い勝手が良くて敵以外は殺さずコストも安い。だからテロ等の凶悪犯罪には使用が許可されている。とは言ってもサノスにはパワー・ストーンはあるからこいつも無力化されるかもしれない。だが奴の部下は減らせるだろう。サノスが強くても部下を守りながら戦えるとは

思えないからな」

サノスの待ち伏せ準備が整ったので後は待つだけ。俺はその間にポイントで幾つかアイテムを追加で購入した。まず船体表面の装甲を全て量子クリスタル装甲に換装した。スター・ウォーズに出てくる超兵器、サン・クラッシュヤーの装甲と同じものだ。惑星を木端微塵にするデス・スターのスーパーレーザーを無効化できるから、パワー・ストーンの攻撃にも耐えられるだろう。

それとSCARチーム宇宙服を1セット購入してナターシャにプレゼント。ブーストリグの使い方を教えた後に好きな武器もあげた。彼女が手に取ったのは使いやすいNV4とブルパップ方式のサブマシンガン、RPR Evoだった。どちらも拡張マガジンとフォアグリップを取り付けた。ショックグレネードやフォームウォールも渡したから問題ないね。

俺の武装はフェイザーで統一する事にした。ライフル型のタイプ3・フェイザーと拳銃型のタイプ2・フェイザー。タイプ3・フェイザーはスタートレック：ピカードで登場していたやつだ。エネルギー切れにならないように増設パワー・セルを取り付けてあるし、予備のパワー・セルをチェストリグに入れてある。雑魚なら一撃で蒸発させれるがサノスや直属の部下は難しいかもしれない。

『艦長、サンクチュアリⅡがタイタン軌道線上に出現。攻撃を開始します』

軌道線上に展開したデイスカバリーから全員に連絡が連絡が入った。思ったより早かったな。映像を見る限り吹き飛ばした右の翼は置いてきたみたいだな。

「了解、作戦開始だ。今度こそあのデカブツを宇宙の藻屑にしてやれ」

サンクチュアリⅡがワープ直後に見たのはサノスの故郷であるタイタン。そして離れた場所にいるデイスカバリーだった。インフィニティ・ストーンの反応はタイタンの地表にある。サノスは船が破壊されても構わないから地表に向かうよう指示を出した。例えば船が壊れてもストーンが手に入れば問題ない、と考えたからだ。

「至近距離に多数の物体有り！恐らく機雷かと…まずい！機雷からミサイル発射！」

しかしカークが設置した大量の機雷からミサイルが飛んできた事でパニックになる。回避をせずにタイタン地表へ向かうサンクチュアリⅡにミサイルが次々と命中する。多くは先の戦いで使用されたイオン・ミサイルだったので、復旧したばかりの電子機器

等がダウンする程度で済んだ。しかし極稀に実弾が装填されたミサイルが混ざっており、それらは船体に大きなダメージを与えた。艦橋へ損害報告が雪崩のように押し寄せる。

「第4、第10、第15ブロックで火災発生！」

「艦底部格納庫からの通信が途絶した！誰か急いで見てこい！」

「左主翼に直撃弾！損害不明です！」

「損害箇所が多すぎる！ダメコンが追いつかないぞ！」

サノスはパワー・ストーンを使い周辺の機雷とミサイルを破壊するも、続いてデイスカバリーから飛んできたフェイザーを無効化する事は出来なかった。それどころか短距離ワープを繰り返しながら、常にサンクチュアリIIの周りを飛んで攻撃してくる。あの船には性根の腐った野郎が乗っているに違いない、とサノスは思いながら反撃を指示した。

「第4、第8ミサイル発射管に被弾！残弾を強制射出して回路をカットしろ！」

「第7から第11砲台応答なし！本艦の戦闘能力は現在19%！」

「敵艦に直撃弾多数！しかし効果は認められない！ビクともしないぞ！」

「リアクター出力が不安定だ！補助機関を今すぐ動かせ！」

「補助機関は右主翼のは吹っ飛んでるし左主翼のは起動しない！何とか安定させろ！」

「ミサイル残弾数に注意！あと4斉射分しかありません！」

しかし先の戦いで数を減らされた砲やミサイルでの攻撃ではデイスカバリーのシールドを貫く事は出来なかつた。パワー・ストーンでデイスカバリーを捕まえて粉碎しようとしたが、ランダムな場所にワープし続けているので不可能。そこでサノスは強力な衝撃波を全方位に連続で発射する事に。この攻撃でデイスカバリーは明後日の方向に弾き飛ばされた。それを見たサノス達は歓声を上げた。

だがサノスはある事を完全に忘れていた。度重なる損害のせいでサンクチュアリIIの船体の耐久力が致命的なまでに落ちていた事に。そこにパワー・ストーンから発せられた強力な衝撃波が何度も加わった結果、遂にサンクチュアリIIを構成する船体が崩れ始めた。慌てたサノスは自身がいる船体中央部をストーンの力で守ろうとした。サノスにとって残念な事に船体の崩壊スピードが想定より早く、またタイタンの重力圏に捕まり大気圏への突入コースに入った事もあり、サンクチュアリIIはあちこちから火を吹きながら壊れていく。

そこに追い打ちをかけるかのようにデイスカバリーが猛攻撃を仕掛ける。大気圏突入時の熱、そしてデイスカバリーからの攻撃で船体は完全に崩壊した。船体中央部はかろうじて原型をとどめていたものの、残りの部分は細かい破片となって地上に落ちていく。不思議な事にデイスカバリーは壊れた船体の残骸も攻撃していたが、現在進行系で

フリーフォール中のサノス達はそんな事を気にする暇はなかった。

最終的にサンクチュアリⅡの成れの果てが墜落したのは、4つのインフィニティ・ストーンの反応が確認された場所から僅か5キロメートル程離れた場所だった。パワー・ストーンを全力で使ったが船体は中央部を残して他は崩壊。その中央部ですら崩れかけのモニュメントと化していた。内部は更に凄惨な状態になっており、サノスと直属の部下4人は生きていたが、アウトライダーやチタウリは墜落の衝撃でほとんどが死亡。残存兵力は僅か600程であった。

その様子を姿を隠しながら静かに偵察するデイスカバリー。情報はデータを經由してヒーロー達に送られた。

『作戦の第1段階を完了しました。敵艦は完全に無力化。600程の生命反応を検出、サノスも生きています』

「よくやったデータ。引き続き偵察を続行。念の為マンティコアの投下準備を。それと

「…あのサイボーグもな」
『了解しました、艦長』

8：正々堂々戦おう（棒

「みんな聞いてくれ」

アベンジャーズのリーダーであり、タイタン地上戦における戦闘責任者のステイプは全員を前に口を開いた。

「ジムとデイスカバリーのお陰で敵戦力をかなり削る事が出来た。観測データによれば残っている敵は約600程。大多数がニューヨークで戦ったチタウリや、遺伝子改造研究で生み出されたアウトライダーだ。問題はサノスとその直属の部下だ」

データによると直属の部下は4人。まずサノスの副官であり金のハルバードを操る戦士、コーヴァス・グレイヴ。ストレンジと同レベルの戦闘力を持つ闇の魔術師、エボニー・マウ。サノスの軍勢で最も強力な戦士であり、白兵戦のエキスパートでもあるプロキシマ・ミッドナイト。そしてハルク並に大きな体と力を持つカル・オブシディアン。「サノスは僕とトニー、ソー、ロキで対処する。ナターシャ、ジム、ヘイムダルはグレイヴを、ブルース、ローディ、サムはオブシディアンを、ピーター、ガモラ、ネビュラはミッドナイトを、そしてドラックス、グルート、ロケット、マンティスはマウを相手にしてくれ。当然チタウリ達も相手にしないとイケないから難しいとは思いますがやるし

かない」

「わかっているさ、ステイプ。どんな手段を使っても勝つぞ」

「そうだな。でもジム、マンティコアは最終手段だ。本当にやばくなったら使うようにしてくれ、いいな？」

「もちろんさ。もう1つの戦闘用サイボーグもあるからなんとかなると思うぞ」

正直そのサイボーグがどんなものか気になったが、マンティコアを超えるようなサイボーグは流石に存在しないだろうとステイプは考えた。

「うん。直属の部下を倒した後はチタウリ達の掃討、そして僕達に協力してくれ。それとこれが重要だが、偽ストーンが入っている箱を守るフリをしながら戦う必要がある。だから基本的には防衛戦を展開する。敵が少なくなってきた、または偽ストーンが奪われた後は好きに暴れてくれ」

「了解！」

『データより全メンバーへ、敵部隊が南から接近中』

インカムから聞こえてきたデータの声とほぼ同時に、丘の向こうからサノス達が走ってくるのが見えた。見た感じかなり怒っている様子だ。するとジムがチェストリグから何かの装置を取り出して弄り始めた。

「ジム？」

「ちよつとした足止めをしようかなと。ステイープ、これ押してみて」

渡されたのはどこからどう見ても起爆装置だった。ステイープは少しだけ躊躇したが装置を受け取ってスイッチを入れた。

その瞬間サノス達の足元が一斉に破裂した。ジムがこつそり仕掛けておいた地雷が起爆したのだ。遠隔操作によって起爆した対車両指向性散弾地雷はチタウリやアウトライダー、そしてサノスと直属の部下を襲った。至近距離からの散弾を防ぐ事ができる訳もなく、チタウリやアウトライダーは次々と肉片と化した。しかしサノスとその部下には傷一つ付かない。彼らは足を止めることなくこちらに近づいてくる。

「まこんなもんか。100ちよいは削れたかな?」

「爆弾…いや地雷か!」

「ああ。嫌いか?」

「そりやまあ…」

少なくともステイープの知り合いに地雷が好きな人間はいない。

「良かった。もちろん俺も地雷は好きじゃない。だが威力は十分だし、心理的効果も絶大、そして何より公平な兵器だ」

「公平?」

ステイープは兵器に公平もクソもあるのかと思つたが、ジムは顔をため息をつきなが

ら起爆装置をチェストリグに戻した。

「元々地雷という兵器は軍人も民間人も家畜も、男も女も子供も老人も、それどころか敵も味方も区別しない。地面に埋められた途端、仕掛けた者の制御も受け付けなくなつて殺傷力だけが独り歩きしていく。しかも低コストだ。俺の世界でも地雷の完全な除去は22世紀になるまで終わらなかつた。人間の愚かさを象徴する兵器だと思わないか？まあスマート地雷が開発された事により地雷の非人道性は少し減つたがね」

ジムの世界でもそんなに時間がかかつたのか：確かに世界には今も地雷で苦しむ人々が数多く存在する。カンボジアや中東なんかが有名だな。この戦いが終わつたらトニーに地雷の処理について聞いてみるか。

そんな事を考えていたら走つてきたサノス達が突然足を止めた。僕達との距離は大體100メートルくらい離れている。

「お前らが我らの敵か。ようやくまともに戦える時が来た。小汚い戦法を使いやがつて……だがこれで終わりだ。お前らを殺してストーンを手に入れる。邪魔をするな！」

反射的にみんなでジムを見てしまったが、本人は全く気にしていない。

「俺はいつもまともに戦つてきたぞ。勝てないお前が弱いだけだ。それに卑怯だろうが何だろうが、ルールの範囲内であれば何でもやる、それが俺の流儀なんだね。そもそもパワー・ストーンを手に入れる為に惑星1つを壊滅させるようなキチガイテロリストハ

「ゲに汚いとか言われたくないんだが？」

「ぶっ！」

そこで笑つちやうかネビュラ：僕もなんか言っておくか。

「サノス、お前の好きにはさせない。ここに居るのは全宇宙から集まったヒーロー達だ。お前の野望は今日ここで終わりにする。宇宙を守る為にも引く訳にはいかない」

「ほざけ！あのイカれた性能の宇宙船さえなければ、お前らはただの雑兵だ！数で勝っている我らに勝てると思ってるのか？」

するとジムが笑いながらサノスに言った、

「もちろん勝てるさ。今日の夜には地球に帰って祝勝会の予定なんだ。みんなでバーベキューするから早めにお前らテロリスト共を殲滅しないとな」

「ふざけるな！何故そう言い切れる!？」

「事実だからさ。まずガーディアンズのみんなはパワー・ストーンを巡る騒動でロナン・ジ・アキューザーを倒してる。そしてアベンジャーズはスペース・ストーンを巡る騒動でロキとチタウリを倒した。どっちもお前と手を組んでいたよな？何が言いたいかと言おうと、ここに居る俺以外のヒーロー達は世界を救った実績があるという事だ。今回もお前らを叩きのめして世界を救うさ。二度あることは三度あるって言うだろ？で、お前は今まで何をしてきた？散々色々な惑星を滅ぼして、とんでもない数の民間人を殺し

て、手に入れたのはパワー・ストーン1つだけ。とてもじゃないが一生ついていきたいボス、つてやつじゃないな」

「くっ…だがお前は技術力がなければただの人間じゃないか！」

「うん、その通りだ」

ジムは何言ってるんだこいつ、みたいな目でサノスを見つめた。

「俺はちよつと特殊でな。この世界ではなく、別世界から来た人間なんだ。ヒーロー達のような特殊能力がある訳じゃないし、そもそもヒーローなんかじゃなくて唯の軍人だ。俺が生きていたのは32世紀前半の世界だ。当然技術力はここより上だから、お前らが勝てないのは全く自然だ。分かりやすい例で言うとな…」

ジムは真上を飛ぶデイスカバリーを指差す。

「お前らが傷1つ付ける事が出来なかったあの船。実は戦闘艦じゃなくて科学実験艦なんだ。お前らが乗っていた図体がでかいだけの戦艦はただの科学実験艦に負けたんだよ。この時点で勝てない事に気付いて欲しいな。あと俺の世界にはあれよりデカくて速くてめっちゃ強い船がゴロゴロいる。それこそ数秒で惑星上のあらゆる生物を殺害できる兵器や一撃で星系を丸ごと吹っ飛ばせる魚雷をたくさん搭載した船が。まあ後者の兵器はあれにも積んでるけど」

「……………」

サノスはもちろん僕達も全員理解が出来ていない。前者はあり得ないレベルの平気だし、後者も色々とおかしい。惑星ではなく星系だつて？星系つて恒星の軌道を周回する天体の一群の名称だったかな？太陽系も星系だよな？それを一撃：マジでやばすぎるだろ。てかデイスカバリーにも搭載されてるのか。

「本当なら戦いの時に手加減とかはしたくないんだ。俺は職業軍人だから手を抜いて戦うなんて教わっていないし、相手がプロの軍人だったら失礼だからな。だがお前らはただのテロリスト、鼻つまみ者、犯罪者だ。そんな卑怯で、姑息な、弱い連中に本気を出すのは：ちよつとオーバーキルになつちやうからかわいそうだな。でも俺も鬼じゃない。できる限り苦しませずに殺してやる。だから：」

そう言つてジムはライフル型フェイザーを構えた。

「お前らは今日ここで死ぬ。お前らが一人残らず暗闇の中で死ぬ事で、罪なき人々之光の中で生きられる。それを受け入れる」

「黙れ!!」

死ぬのを受け入れろつて言われて、はいわかりましたつて言える人はそうそういないだろ：しかも味方からならまだしも敵から言われてるし：そろそろ始めようか。

「行くぞーアベンジャーズ、アッセンブル!」

9：タイタン地上戦

「ナターシャ、ヘイムダル！俺が周りの雑魚を蹴散らす！30秒でいいから奴の相手を頼む！」

「承知した！」

「わかったわ！」

とりま周りにうじゃうじゃいるチタウリやアウトライダー達をフェイザーで薙ぎ払う。一瞬で蒸発するのマジやべえな。パワー・セルはしばらく持ちそうだからなんとかうまくいくかな？チタウリ達も懸命に反撃してくるけど格闘予測ソフトウェアが敵の攻撃を予測してくれるから全部避ける事が出来るし、それと同時に敵の行動パターンや弱点等を計算して視界に表示してくれる。だから効率よく敵を蹴散らせる。こつちだけズルして無敵モードだもんな。全くチート様々だぜ。

その間にナターシャとヘイムダルがグレイヴと激しくやりあっている。ヘイムダルはアスガルドの番人として数々の戦いを生き抜いてきた立派な戦士だ。そんな彼でもグレイヴの前では防御に徹するしかないみたい。でも彼は一人で戦っている訳じゃない。

「下がって！」

ナターシャが叫びながらシヨックグレネードを投擲。反応が遅れたグレイヴはシヨックグレネードの電撃にやられて身動きが取れない。そのタイミングを見逃さず、ナターシャはNV4でグレイヴにマガジン1個分の弾丸を叩き込んだ。グレイヴの金ピカボディアーマーがほとんどの弾丸を無力化した、1発の弾丸がグレイヴの左目を消し飛ばした。

「ぐっ!？」

「くらえー！」

そしてグレネードの効果が切れると同時にヘイムダルがグレイヴに斬りかかる。ヘイムダルの剣がグレイヴの体を切り裂くも、その傷は浅いものだった。お返しと言わんばかりにグレイヴは反撃を開始。傷を負っているのにヘイムダルより強いのは何で？しかも動きが早すぎてナターシャが援護できていないな。

「ナターシャ、雑魚は粗方始末したから周囲の警戒を頼む。俺がヘイムダルを援護する！」

「お願い！」

フェイザーをしまいつつ取り出すのはもちろんダークセーバー。ヘイムダルを蹴り飛ばして刺し殺そうとしていたグレイヴに黒いプラズマブレードで襲いかかる。グレ

イヴはすぐに気付いてブレードを受け止めるが、極めて高熱のプラズマブレードのせいでグレイヴのハルバードが加熱されて真っ赤になっていく。

「何だその武器は!？」

「ちよつとアツアツなだけだよ!」

そのままグレイヴと激しい戦いに。左目が見えないのにグレイヴはなかなか強い。でも俺には格闘予測ソフトウェアがある。グレイヴの攻撃の全てがスローモーションに見えるし、次の攻撃の完全な予測が出来る為、ダークセーバーで全てを防ぎつつ敵を追い詰めていく。

「クソっ! 何故お前達は邪魔をする!?! 宇宙を救済する為にサノスや我々は立ち上がったのだ! それを邪魔するなど言語道断だ!」

「馬鹿な事言うな! 宇宙の資源に限りがあるのは理解できる! だが全宇宙の生命体の半分を消し去ってバランスを取るなんて頭がイカれてる! それを救済だとか言ってるお前ら全員狂ってるよ!」

「何だ?! この野郎!」

グレイヴに腹を蹴つ飛ばされて吹き飛ばけど想定内。一度相手から離れるのが目的だ。

「ヘイムダル、一緒に行こう」

「ああ、行くぞー！」

イドリス・エルバと肩を並べて戦えるとかマジで興奮するわ。それはともかく俺はチエストリグからダークセーバーをもう一つ取り出して二刀流でいく事にした。普通の剣と違ってライトセーバーやダークセーバーは手元に伝わる感覚が柄の重みしかない。だから取り扱いに注意しないと自分の手足をぶった切る事になる。

それは置いといてグレイヴは一気に劣勢になった。攻撃スピードが早い俺と、スピードは若干劣るものの攻撃が強いヘイムダルから激しい攻撃を受けているからだ。しかも左目を失っているせいでグレイヴは俺達の攻撃をひたすら受け流したり避けたりを繰り返す。そうしていると徐々に攻撃を受けるようになり、グレイヴの体に傷が増えていった。

そろそろ止めを刺そうかね。まず俺が前に出て2本のダークセーバーを上から振下ろす。当然グレイヴはハルバードを水平に構えてダークセーバーを受け止める。が、ただでさえ高熱のプラズマブレードを2本も受け止めた結果、ハルバード全体が真っ赤になりグレイヴの両手が焦げ始めた。

苦悶の表情を浮かべながら耐えるグレイヴだったが、彼の忍耐力よりハルバードの耐久力の方が先に音を上げた。ハルバードは中心部から真っ二つになり、グレイヴは勢いで後ろに吹き飛ばす。そのタイミングで俺はその場でしゃがむ。するとヘイムダルが俺

の上を飛んでいき、武器を失い体勢を崩したグレイヴの胸に剣を深々と突き刺した。

「ごはっ!？」

「終わりだ、グレイヴ。お前達は宇宙の救済者なんかじゃない。ただの犯罪者として生を終えろ」

「ば……か、な……」

ヘイムダルが剣を引き抜くとグレイヴの胸からどんどん血が流れていく。どう見ても助からない傷だ。しかしグレイヴはまだ諦めていない。折れたハルバードを掴んでヘイムダルに斬りかかろうとした。しかしアスガルド最強の番人であったヘイムダルにとつてその攻撃を察知するのは簡単だった。素早く振り返りつつヘイムダルは剣でグレイヴの首を刎ねた。

グレイヴの首が飛んでいくのをミッドナイトは戦いの最中に見てしまった。なんと彼女とグレイヴは夫婦だったのだ。グレイヴは戦いの前に、

『この戦いが終わり宇宙の救済が完了したら、1週間ぐらい休みを貰ってバカンスにでも行かないか？ちよつと早いけど結婚記念日も近いしな。美味しいものでも食べてのんびり休もう』

という話をしていた。ミッドナイトは知らなかったが、これはいわゆる死亡フラグというやつだった。そして見事フラグは成立してしまった。

「おのれええええ!!」

愛する夫を喪ったミッドナイトは怒りに身を任せて激しい攻勢に出た。ピーター、ガモーラ、ネビュラは避けるのに必死だ。電撃を発する三又の槍で3人を黒焦げにしようとすも、回避されたりシールドで弾かれたりした。カークのシールド発生装置は極めて高性能だったからだ。

「シールドなんて卑怯な物を使いやがって!」

「うるせえ! 使えるものを使って何が悪い!」

ピーターが愛用のクアッドブラスタを乱射しながらミッドナイトを牽制する。その間にガモーラをネビュラが一気に距離を詰めて白兵戦に持ち込む。本来ならミッドナイトは白兵戦で負けるような人物ではない。しかし夫の死を目の当たりにして彼女は冷静ではいられなくなっていた。

「コーヴァスの仇!!」

ミッドナイトは2人に槍で素早い攻撃を繰り返す。だがガモーラは愛剣のゴッドスレイヤーでその攻撃を受け流し、ネビュラは電気ショックスタツフで反撃する。2人の姉妹は完璧なコンビネーションでミッドナイトの攻撃を跳ね除け、それぞれか押し返

し始めた。

「今がチャンスよ！」

「わかつてる！」

まずネビユラが電気ショックスタッフでミッドナイトを後ろに弾き飛ばす。そして素早く腰のホルスターから愛用の電気ショックブラスターを抜いて乱射。数発は槍で防いだが、残りはミッドナイトに命中した。それでも彼女は倒れない。発射されるエネルギーボールは、一発で並の種族を射殺できるほどの威力を有しているのだが、ミッドナイトは気合いと怒りで耐えきった。

しかし動きが止まったタイミングをガモーラは見逃さない。ゴッドスレイヤーを2本の刃に分割させ、長剣でミッドナイトの左腕を、短剣で脇腹を切り裂いた。それと同時にピーターがクアッドブラスターを発射、ミッドナイトは5メートル以上後ろに吹っ飛んだ。

「ぐううううう!!」

だがミッドナイトはまだ諦めていない。左腕は切れかかっているし、脇腹からも大量出血、そして胴体はブラスターのせいで複数の穴が空いている。普通なら間違いなく死んでいる筈なのだが、ミッドナイトは槍を使って何とか立ち上がる。そして左腕をチラッと見た彼女は槍を使って無言で左腕を切り落とした。

「嘘だろ…なんでまだ動けるんだ？」

ピーターが思わず呟くのも無理はない。彼女は左腕と脇腹を槍から出した電撃で焼いて塞いだ。ボロボロの鎧を脱ぎ捨て、ボディーマーから複数の注射器を取り出して首に突き刺す。何を打ったのかは不明だがミッドナイトはブルブル痙攣し始めた。それを見たガモーラとネビュラはドン引きしている。

「あれは鎮痛剤か？それとも興奮剤？」

「なんかヤバそうね…でもあの傷だから長くはないはず。畳み掛けましょう」

ところがミッドナイトはとんでもなく素早い動きでガモーラに接近し、一瞬でゴツドスレイヤーを砕いた上、腹に強烈なキックをお見舞いした。シールドで守られているがそれでも凄まじい衝撃だった。そして驚くネビュラに槍を突き立てようとするが、ピーターがブラスターを乱射した為、ミッドナイトは後ろに下がった。

「なんなのあれ!？」

「あんな薬見たことないわ…」

ピーター達は知らなかったが、ミッドナイトが打った薬はとある惑星でサノスが回収した植物をベースに開発された戦闘用興奮剤と鎮痛剤のミックスだった。どちらも効果は絶大であり、興奮剤は思考スピードを高め、アドレナリンが常時出っぱなしになる。そして鎮痛剤は戦闘で生じる痛みを完全に遮断してくれる。副作用として過剰摂取す

ると10分前後で確実に死んでしまうものがある。

しかし愛する夫を喪ったミッドナイトに躊躇はなかった。コーヴァスはもう帰ってこない。10分以内にこいつらを皆殺しにして、他の連中も殺せば問題ない。彼女はそう考えて規定量の3倍の注射を打ったのだ。もう彼女に恐れるものなどない。

「もういい。言葉など既に意味をなさない。死ね。お前達に出来るのはそれだけだ」

ピーターはブラスターを構えるが、ミッドナイトが急接近してきたのでジェットブーツで逃げようとした。しかし彼女は槍の電撃でピーターのブーツをピンポイントで破壊した。シールドが地面と干渉してうまく機能しなかつたのだ。右足のブーツが壊れたせいでピーターは飛行を制御できなくなり、くるくる回りながら明後日の方向に飛んでいった。

ガモーラが持っている武器はスイッチブレードのみ。これだけではミッドナイトに対抗できない。ネビュラは自身のブラスターをガモーラに投げ、電気ショックスタツプでミッドナイトと対峙した。幾ら薬で強化されていとはいえ、左腕を失い血液も大量に流れている。しばらく耐えれば間違ひなくミッドナイトは死ぬだろう。

ミッドナイトは攻撃の手を緩めない。大きな傷は焼いて塞いだが激しい戦闘で徐々に傷口から出血している。それにピーターのブラスターは肺を貫通しているらしく、呼吸がうまく出来ていない。それでも薬のせいで痛みを感じる事はなく、彼女の脳はとに

かく眼前の敵を殺せと叫んでいた。

体のあちこちから血を流し、右手だけで槍を振り回し、しかも口から血の泡を吹きながら襲いかかってくるミッドナイトは恐怖でしかなかった。後日ガモーラは夢にミッドナイトが出てきて寝小便をしかけたとか。

それに臆する事なくネビュラは分割したスタッフでミッドナイトを攻撃する。横からガモーラがブラスターを放つ。2人の攻撃をミッドナイトは完全に防ぐ事は出来なかった。更にそこに文字通り飛んできたのはピーターのジェットブーツだった。片方だけじゃ役に立たないと判断したピーターが、エンジンを起動したままミッドナイトに投げつけたのだ。

ミッドナイトはガモーラ・ネビュラを蹴り飛ばしてからブーツを槍で破壊したが、ブーツ内部のエンジン燃料やらが爆発したせいで、近くの瓦礫まで爆風で飛ばされた。すぐに槍を探したが手元にない。視線を上げるとガモーラがミッドナイトの槍を持っていた。

「これ、あなたのよね？返してあげる！」

ガモーラは全力で槍を投擲。白兵戦最強の戦士と言えど、飛んでくる槍を素手でどうにか出来る訳では無い。槍はミッドナイトの胸を貫き、背後の瓦礫に縫い付けられた。それを見たピーターが叫ぶ。

「今度こそやったか!？」

ミッドナイトは自分を貫く槍をしばらく見つめていたが、慌てる様子を見せずに槍を掴んで抜き始めた。ガモーラが投げた槍はミッドナイトの心臓を破壊してなかったのだ。ゆっくりと槍を引き抜き再び立ち上がるミッドナイト。そんな彼女を3人は呆然と見つめていた。

だがそこで薬の副作用が現れた。槍を引く抜く事には成功したがミッドナイトの体は限界を迎えた。両膝から前のめりに倒れた彼女は、頭を上げて何かを見ながらゆっくりと右手を伸ばしながら息絶える。右手の先にはコーヴァス・グレイヴの死体があった。

いやーグレイヴは強敵でしたね!。ピーター達もミッドナイト倒したみたいだし、オブシディアンとマウも既に死んでるね。雑魚のチタウリやアウトライダーも全滅だから全員でサノスをボコボコにしてやんよ!